
真・恋姫†無双～お喋りで愉快で刺激を求める何でも屋さん

doragon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜お喋りで愉快で刺激を求める何でも屋さん

【Nコード】

N9016T

【作者名】

doragon

【あらすじ】

一人の何でも屋が恋姫の世界に降り立つ。

彼は恋姫の世界でどう生きるのか……という建前は置いて、ようは俺が恋姫の世界で好き勝手に生きるだけだ。人生は楽しくないやもつたないからな……おもいつきり楽しむぜ。読者（お前たち）も一緒に楽しまないか？……後悔はさせない。

さて、物語の始まりだ。

「本編前の自己紹介は基本だよな」

読めばだいたいわかる 主人公紹介

名前 かんざきりゅうが
神崎龍牙

服装は赤い外套に黒い上着 黒のズボン
髪は黒

生粋の日本人。

戦闘能力 53万で二回の変身を残しているぞ

それに2000の奥義に5000の秘技を持っている

「だいたいはこんなもんでいいか……よう、画面の前のお前ら……
パソコンが携帯でこれ見てるんだろ？……これから仲良くしようぜ
……」

「え？……お前たちの事が分かるのかって？……俺にはお前たち（
読者）が分かかってるぜ」

何故なら第四の壁の破壊者だからな……

ありがた豆知識 第四の壁とは？

「第四の壁」とは舞台の用語で、「（舞台から見て）演劇には右の
壁、左の壁、後ろの壁の他に『前の壁』がある」という意味。

つまり、演じている間はお客さん側も「壁」であり、お客さん

はそこにいないという前提で役者は演じている。

漫画や小説でも同じく、登場人物は読者「お客さんはいない、作品世界こそが唯一の世界という前提で話を進めているのだが……詳しくはネットや携帯で調べてくれ

だいたいはいwikiから転載だ……。

第四の壁を破壊するのは苦勞したがな……というかタブーだし。

「というわけで俺のだいたいの自己紹介は終わりだ……俺の詳しい設定は本編で語られるだろう」

ちなみに……今はこの物語が書かれるのに待ちくたびれて眠いからこんなノリだが、本編の俺はもつとノリがすごいぜ。

「本編は少しだけ待っていてくれ……それじゃあ本編でまた会おう……宜しくな」

「本編前の自己紹介は基本だよな」（後書き）

というわけで又 応援宜しくお願いします。

龍牙「復讐の次はギャグか……発想が単純じゃね？」

作者「うるさい……さっそく壁破るなよ」

龍牙「いいの、いいの、それが俺だし」

作者「くそっ……」

龍牙「さあ、本編もぶっちぎるぜ」

作者「不安だ……」

「龍牙、恋姫世界に行つきまあああああす」

暗い視界に光が差した。俺は目を開けると辺りを見回す。

「何がどうなっている？……」

辺りを見渡せば、朝日輝く太陽に、風吹き荒れる周りには何も無い不毛な大地。遠くには大きな山々が見える。俺は今のこの状況に混乱していた。

とりあえず俺は落ち着くために懐からいつもの煙草に見えるケースから煙草型の飴を口に入れて、舐める。

そして、口内に甘さが漂……。

「うげえっ！……これイチゴ味とかじゃなく薄荷じゃねえか……ぺッ」

口内に甘さは漂わず強烈な辛さが漂った。

俺は迷わず吐き捨てる。

そして、口直しにケースからまた飴を取り出そうとするが……。

「嘘だろ！……あれで最後の一本かよ……ちくしょう」

空になったケースを地面に叩きつけた。

辛さのおかげで目は完全に覚めたが……おっと！

読者（お前たち）を忘れていた。

ハードボイルド調でやってみたが……止めだ止めだ。

堅苦しいのは俺の生に会わないし……すぐに崩壊したけどなWWW

WWWWWW

まあっ、そんなわけで……どうも、神崎龍牙だ。

読者（お前たち） おはよう、こんにちは、こんばんわ。

俺の事は「龍の兄貴」とか「龍ちゃん」とかまあ、好きに呼んでくれ。

小説は読者（お前たち）がいるからこそその小説だからな。

仲良くやろっぜ。

「しかし、本当に訳分からん……自分を振りかえってみるか……」

俺は神崎龍牙……年は十代（ピチピチな19歳）だ。

だから煙草なんて吸えない。本物はまずいらしいし、身体に悪いらしいからな。

ちなみに大学生で、一人暮らしだ。

金は何でも屋をやって稼いでいる。

金さえ貰えば、猫探しから暗殺までどんな依頼でも引き受ける。

こうみえて近所でも評判なんだぜ。

そう……俺は普通な大学生。

え？なんか違う？……フツ……突っ込みなら止めておけ……。

何故ならば……。

突っ込まれるとどんどんボケちまうからさあああ。

よし、自分の事は覚えてる。

次は昨日の行動だ。

俺は朝に大学に行つて、勉強した。そして夕方に近所のおばちゃんたちと最近についての会議をした。

夜はかなりの不正をした悪い資産家を暗殺して、事前に仕入れた情報より警護が多かったから嘘の情報を教えやがった情報屋のみつちやんとさっちゃんにゲイバーのオカマをデリバリーして掘られるのを見た後に家に帰って寝たんだ。そして起きたら見知らぬ土地に居た。

うーむ……普通の学生の暮らしをしていたのにな？……読者（お前たち）もそう思うだろ？

昨日についても覚えてるな……じゃあ、今の状況を把握しようか……。

俺の視界には朝日輝く太陽に、風吹き荒れる周りには何も無い不毛な大地。遠くには大きな山々が見える。

こんな風景は俺の日本には絶対に無い。

夢かと思って右頬を抓ってみる。普通に痛かった。

「……………はあ、とにかく目が覚めたら訳分からん土地に居たか……………いやあ……………参った参った」

こんな状況で言うべき台詞がある。

俺は息を深く吸い込んだ。　せーの……………。

「此処何処おおおおお！？」

俺の叫びは周囲に大きく響いただろう。

「俺は誰？ってこれは記憶喪失か……しかし……こんな経験初めてだぜ……」

そして、ふと思った。

見知らぬ大地　此処に何があるか分からない。

そして俺がこの先どうなるかも分からない。

どんな人々が居るかも勿論分からない。

「あれ？……つまり、予期せぬ危険やワクワクやドキドキが俺を待っているという事か？」

俺は日本での生活に物足りなさを感じていた。つまらなかったのだ。

でも、此処でなら楽しめるかもしれない。

「ヒヤッホー、よく考えりゃ最高じゃねえか。良いぜ良いぜ……俺こういうのだあいすき……クククク……ハハハハハハ」

俺はたまらず笑いだす。知らぬ人が見れば変態に見えるだろう。

見えるだからね？……オレヘンタイジャナイヨ？ホントウダヨ？

人と少しずれてるかもしれないけど……。

「まるで、ゲームやアニメや漫画みたいだけどな……」

待てよ……これ小説じゃないか……小説ならタイトルがある筈。タイトルを見れば此処が何処か分かるかもしれない。

俺は上を見上げた。

「タイトルよ、その姿を俺に見せろ……アブラカダブラアブラカダブラ……怪人列座以前……腹痛新業……開けゴマ……ビビデバビデブー」

俺は思いついた呪文を適当に唱えた。

すると上に文字が浮かび上がる。

真・恋姫十無双くお喋りで愉快で刺激を求める傭兵さん

「うわあ……しょぼいタイトルだな……っていうか……呪文適当でいいのな……俺、魔法使いじゃないんだがwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwww」

しかし、真・恋姫十無双か……真・恋姫十無双だとおおお!?

俺……真・恋姫十無双やった事ねえじゃんorz

確かエロゲとギャルゲだったな……最新作の出来に問題あったのか
ファンに叩かれたらしいが……。

「まあ、ファンを蔑ろにするのは良くないな……結局ゲームの世界
ということしか分からなかったか……。」

とりあえず歩いてみますか……。

俺は歩こうとしたのだが……。

「兄ちゃん、珍しいもん着てんじゃねえか……金と一緒に「だが、断る!」「」

俺は相手が言い終える前に即答する。

俺の目の前には……ああ、もう良いや……名前なんかヒゲとデブとチビで良いだろう……どうせモブキャラだろうしな……。

ヒゲとデブとチビは頭に黄色い布を巻いていて、右手にナイフのような剣を持っていた。

古臭い武器を使うもんだ……やってることも盗賊だしな……恐らく昔の時代な世界観なのだろう。

というかテンプレすぎて詰まらない。

モブキャラより早くメインキャラに会いたいもんだ。

俺はヒゲとデブとチビを無視して、無言で立ち去ろうとした。

「てめえ、まちやがれ!」

ヒゲは俺に襲いかかってきた。

しょうがない……モブキャラには退場願うか……誰も気にしないだろうしな……。

俺はヒゲに向かって走る。

「待てい！」

誰？

周囲に何者かの声が響く。

しかし、俺は今メインキャラに会いたくてうずうずしている。それに待てと言われたら待ちたくなるってもんだ……読者（お前たち）だってそうだろう？

まあ、なにより龍牙は急に止まれないという諺があるからな。

「か弱い一人の民に三人がかりで襲いかかるその所業……言語道断！」

俺ははまだ続いている声を無視して、走りながらヒゲが剣を振る前に跳躍しながら前転をすると、ヒゲの後ろに着地する。

「そんな貴様らに……」
声が止んだ。

「な？」

ヒゲが振り返る前に俺はリアットをするように左腕の肘の裏をヒゲの首に絡ませ、ヒゲの左膝裏に右足の後ろ蹴りを繰り出した。

炸裂して音が響く。骨を折った。

「がっ！」

ヒゲが倒れる前に俺は右手を回してヒゲの顔の左側面を持ち、右に
一気に捻る。

音が響いた。俺はヒゲを解放する。

ヒゲは前を向いたまま息絶えた。首の骨が折られたのだ。

デブとチビは呆然としていた。

勿論、俺は隙を見逃しはしない。

デブに向かって走る。

「だな！……」

デブは俺に驚き、剣で斬ろうとするが……俺はその前に右の縦拳を
腹部に打ち込んだ。

「うっ……」

そして、引き戻して左の縦拳を腹部に打ち込む。

「はっ……」

また引き戻すと右の縦拳を腹部に打ち込んだ。

「あっ……」

俺はこうして右と左の縦拳の8連撃をデブの腹部に打ち込んだ。

そして、一旦俺は動きを止める。

「う……う……う……」

デブは痛みにより腹を抑えながら、後ずさる。

さあ、ここで必殺技だ。

俺はまた走ると、デブに近づく。

「昇○拳！」

俺は叫びながら跳躍して右のアップパーカートをデブの顎に打ち込んだ。

「だなあああああ」

手ごたえを感じた。デブは宙高く打ち上げられ、頭を下にして地面に叩きつけられる。

KOだ。

そして、身体をピクリとも動かさずに倒れた。

生きていたとしても顎を砕いたからな……無事ではなかっただろう。

さすがは有名な○ト○アイの技だな。

俺はそのままチビの元へ走り、目の前で右に回転する。

「な？」

チビはろくに反応できていない。

そして、そのまま回転の勢いを利用した右の蹴りをチビの頭部に炸裂させた。

チビは右に吹っ飛び、地面に叩きつけられた。

チビは右に顔を向けたまま、口から血を垂れ流していた。

チビも息絶えたようだ。

手ごたえで頭蓋骨と首の骨を折った事が分かった。

これでモブキャラは退場した。

「見事な腕前ですな……」

俺を呼び掛ける声が聞こえた。

俺は声の方向を向く。

声の主は、水色の髪に白い着物を着て、手にはロンギヌスのような槍をもった女性が現れた。

俺は雰囲気から確信した……。

メインキャラ キタアアアアアアア

俺は内心言ひながら、どう話すか考えていた。

「龍牙、恋姫世界に行っ きまあああああす」（後書き）

龍牙「やつほー読者（お前たち）、楽しんでるか？……俺は楽しむぜえ……だってゲームの世界に入るの初めてなんだもん……楽しまなきゃな」

作者「だから……ここに来るなよ……」

龍牙「だって、此処、居心地良いじゃん」

作者「そう言われても……お前は「さあ、次回はどうなるんだ？……」こらー次回の原稿読むなああ！」

次回 「メインキャラって最高です」

龍牙「これで決まりだ！」

作者「タイトル嘘ついてんじゃねええええ」

「メインキャラに遭遇と自己紹介と手合わせ え？武將が皆、女性？」（前書

前回のあらすじ

龍牙「昔々……やっぱめんどいから前話を参照してね」

作者「やるならちゃんとやれええええええ」

「メインキャラに遭遇と自己紹介と手合わせ　え？武将が皆、女性？」

よう、読者（お前たち）　おはよう、こんにちわ、こんばんわ。

読者（お前たち）の人気アイドル神崎龍牙だ。俺は今、何故か真・恋姫十無双の世界に居る。

今はモブキャラ（ヒゲ・デブ・チビ）に退場して貰って、この世界のメインキャラと思われる女性に会ったところだ。

以上、まともな報告^{あいらすじ}終わり。

作者もこれなら文句は無いはずだ。んじゃ……本編スタート。

「見事な腕前ですな……」

水色の髪に白い着物を着て、手にはロングヌスのような槍をもった女性は俺にそう話しかけてきた。

イメージ的にクールキャラだろう。

雰囲気からメインキャラだと思われる。

「いえーい、やっぱり人から褒められるのは悪い気がしないな。もっと褒めてくれ」

俺はハイテンションで言った。

やはり、人間は最初が肝心だからな。フレンドリーに行かないとな

「……しかし、何も殺すことは無かったのでは無いか？」

あれ？無視？……何か間違えたかなあ。

「ん？……襲いかかってきたのはあいつらだぜ？俺はただ命の危険から身を守っただけだ……それに武器を持つ以上、あいつらも殺される覚悟ぐらいあるだろう。それができないなら持つなって感じだな」

ある反逆の皇子は言いました。「撃つていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ」と、まあ、俺が言うなら「殺して良いのは殺される覚悟のあるやつだけだ」になるけどな。

何気に名言だよな……おまえたち読者はどう思う？

「それはそうだが……」

女性は納得していない顔で言う。

「じゃあ、俺とあんたの考えの違いだろうな。人間それぞれ自分の信念だか何だか持っているから、そこはしょうがないぜ……とまあ、難しい話はどうでもいいから……君の名前「星ちゃん」「星」」

俺が言い終える前にまた何者かの声が聞こえた。次は二人のようだ……ちくしょう、名前を聞こうと思ったのに邪魔をしゃがって……何処のどいつだ？

俺は声のした方を見る。

二人の女性だった。

一人は黒色の短髪に眼鏡をかけた緑色の服装をした女……イメージで言うなら理知的な女性だ。女教師が似合うだろう。

もう一人は、長い栗色の髪に頭にはまるで大〇の万〇にある太〇の塔のような人形を乗せた……よ……幼女だああああ……恋姫の世界最高うううう。

幼女って良いよな……見るだけで癒されるぜえ……恋姫の世界に来てよかった……もう、死んでも良い。

はっ！……オレロリコンジヤナイヨ？ホントウダヨ……シンジテヨ。

ゴホン……二人の女性は俺たちに近づく。

「誰かと思ったが、やはり風に凜か」

「そちらの方は誰でしょうか？」

「お兄さんの名を聞いてもよろしいでしょうか」

妙に間延びした声で幼女が問う。

ふっ……いいか読者（お前たち）よ。幼女に問われたら、すぐ答えるのが世の常だ。

「良くぞ聞いてくれた。ナレちゃん、カモン！」

俺は左手で指を鳴らすと後ろを向く。

ナレちゃんというのは、ナレーションの事な。

「地が呼ぶ、天が呼ぶ、山が呼ぶ、森が呼ぶ、海が呼ぶ」

『!?!』

三人の女性は突然目の前の男とは違う声が響いた事に驚く。辺りを見回しても誰も居なかった。

「世界を面白くすると轟き、叫ぶ……呼ばれりゃ、ジャジャーんと飛び出る男。そして、常に刺激を求め続けるその男の名は……」

ナレちゃん、ありがとう。

俺は外套を翻しながら振り返る。

「人生は楽しく過ごさなきゃ勿体ないを信条にして、猫探しから暗殺までどんな依頼でも金さえ貰えれば文句も言わずに引きつける何でも屋。皆の頼れる隣人。そして皆の救世主こと神崎龍牙でえええす。」

「宜しく」

俺は両手でピースをしながら笑顔で言う。

そして後ろで爆発が起きた。

つて、おい!

「おーい、効果違エフェクトうぞ。何やってんだ作者……やり直しだ、やり直し」

俺は作者に向かって怒鳴る。

「さっきから何をブツブツ言っているのだ？」

「まったく訳が分かりませんね」

「お兄さんは不思議なのです」

三人はさっきから上に向かって叫んでいる龍牙に混乱していた。

ナレちゃん……本当ありがとう。今度何か奢るよ。

じゃあ、僕にもっと出番ちょうだい（〃 ^ ^ 〃）

ごめん……それは無理なんだ。だって俺主人公だし、読者おまえたちだってその方がいいだろ？

フエエエン（T—T）

ナレちゃんは泣いて去って行った。

ごめんなナレちゃん……。

くそっ、作者のせいでカツコ良く決められなかった。

「まあ、というわけで俺は神崎龍牙だ……君は星って……」

俺がそう言った途端、二人の女性は顔が何かとんでもない事をした者を見るような感じで強張っていた。そして、俺が名前を呼んだ星と思われる女性から殺気を感じた。

俺に向かって槍が突き出される。

俺はイ○バウアーの如く身体を逸らしながら、両足を上げて槍を挟んで地面に両手を着けてそれをバネに飛び上がった。

そして、後転（いわゆるバク宙）しながら足で挟んだ槍を落として右手に掴んで、着地する。

俺は両手で槍を回転させながら鼻歌を歌う。

「ふーふーふーふーふーっふっふーふっふー」

ちなみに真○國○双での勝利BGMだ。

そのまま、右手や左手と片手で槍を回転させたり足を上げたり、槍を投げて、片手でキャッチしたり、跳躍しながら側転したりする。

「ふふふふふふふふふーん、ふーん」

そして右手で槍を掲げてキメ

やったー、決まったあああ。

俺は三人の女性を見る。

三人は俺の華麗なる槍の舞に見惚れていた。

違うよ、（。。。）な顔してるから呆然ってなってるんだよb y
ナレちゃん

あれ？ナレちゃんが何故突っ込みを？

こうした方が出番が増えると思って、作者にも許可取ってあるb y
ナレちゃん

ぬおおおおお、作者あああ一度ならず二度までもおおおお。

槍を返さないとな……。

俺は星らしき女性に槍を投げる。

しっかりとキヤッチした。

よし、後は……。

「いきなり、槍で突くとか危ないだろうがあ、死んだらどうして
くれる!」

俺は星らしき女性に向かって怒鳴った。いつもは温厚な俺だが……
さすがに堪忍袋の緒が切れた。

反応遅いよb yナレちゃん

え？正しいリアクションじゃね？……おまえたち読者もそう思うよな？

星らしき女性はハツとなると……。

「黙れ！、貴様こそ何のつもりだ、我が真名をいきなり呼ぶとは！」

「訂正してください！」

「訂正しなさい！」

えええええええつ！？怒られるの俺なの？……俺が悪いの？……いつもそうだ……何故か学校でも悪い事が起きたら俺のせいになれるんだよなあ、俺良い子なのに。

お前がそう思うならそうなんだろう……お前の中ではなboyナレちゃん

ナレちゃんが冷たくなってるううううう。

「真名って何だ？……異国の旅人だからここの風習が分からないんだ」

俺は気になった事を聞いてみた。

「な！……真名を知らないだと！」

三人は驚く。

「真名というのは、最も尊ぶべき神聖なる物です、親や己が認めたい者、親しい間柄しか呼ぶ事が許されない名の事です」

「そうではない人、知らない人が不躰に呼べば、手討ちにされても文句の言えぬ程のとんでもない屈辱になるんですよ」

な……何だって！

俺は途轍もないショックを受けて、脳内からオートーオーの運○が聞こえた。

「そんな……俺はとんでもない事を……」

龍牙は頂垂れると、身体を震わせた。

そして、突然大きく、跳躍し、バク宙するとそのまま……。

「誠に申し訳ございませんでしたああああ」

土下座で着地する。綺麗な土下座だった。

「本当にすみません……そんな大切な名を気やすく呼ぶなんて、俺って最低ですね……自分が情けないです……俺の馬鹿……馬鹿……馬鹿野郎ううううううう」

そして額を地面に叩きつけまくった。

「こんな俺なんか死んだ方が良いんだああああ」

地面からは血が流れ出していた。

「分かった……分かったから……誠意は伝わった……だからそこま

でしなくても良い」

星らしき女性は無理やり、龍牙の身体を立たせた。

「許してくれるのか？」

「今回だけは誠意に免じて多目に見よう」

「ありがとうございます」

龍牙は額から血を流しながら、礼を告げる。

「しかし、額は大丈夫なのか？」

「これ？全然大丈夫」

龍牙は右手で額を拭う。

傷跡は綺麗に消えていた。

「な！」

三人は呆然となる。

ナレちゃん、お疲れ。

俺って超高速治癒能力持つてるんだ……どんな怪我也即座に治るよ

羨ましいだろ。

「じゃあさ、真名が駄目なら何て呼べば良い？」

俺はとりあえず名前を聞くことにする。

立ち直りが早いboyナレちゃん

「あ……ああつ………そう言えばお主の名は性は神、名は崎、字は龍牙？だったか？」

字？……何それ？

「ちゃう、ちゃう………性が神埼で、名は龍牙………字なんてないし、ついでに真名も無いよ？」

「な！………真名が無いだと！」

三人はまた驚いた。

「強いて言うなら、龍牙が真名だな………俺の国では真名なんてのは無かったんだ………気にしなくて良いぞ？」

「それでは、初対面の我らに真名を預けたと言っのか………」

「これは予想外でしたねえ」

「確かに………」

三人は申し訳なさそうな顔になった。

「だから……別に気にする必要……無いのよ?……」

「嫌、そういうわけにもいくまい……私は趙雲、字は子龍……真名は星だ」

え?

「ゴメン、モウイツカイナマエイツテクレナイ?……ヨクキコエナカッタヨ」

「何を変な喋り方しておるのだ?……私の名は趙雲だ」

うん、聞き間違えじゃなかったな……そうか……趙雲かあ。

趙雲ねえ……趙雲なんだなあ……へえ、趙雲って言うんだあ……そうかそうか趙雲、趙雲……ハッハッハッ……趙雲とはなあ……アハハハハハ。

「何故、名で嘘を言う必要があるのだ？」

まじかよ！？……趙雲って言ったら三国志で有名な将じゃねえか……
…男だった筈なんだが……そうか、これが恋姫の世界なのか……。

恋姫最高————！！！！

黙れb yナレちゃん

「とりあえず、握手してください」

「う、うむ」

俺は趙雲と握手を交わす。

やったー、あの趙雲と握手したぞ。読者、おまえたち羨ましいだろ！

「私は戯志才です……真名はすみませんが言えません」

どう聞いても偽名です。ありがとうございました。

「良いよ、良いよ……別に強制した覚えはないし……気にしないで……
…戯っちゃん」

「戯っちゃんっ……」

何か落ち込んでる。

「風は程立……真名は風です……真名で呼んでください」

「良いの？」

「はい、お兄さんは面白いので」

「そっちの奴は？」

頭の変な人形を指差す。

「おうおう、俺っちは宝？ってんだ。よろしくな兄ちゃん」

え？包茎？ 可愛いそうに……。

字が違うb y ナレちゃん

俺は懐からモ〇ハ〇のア〇ルーにそっくりな人形を取り出して、頭に乗せる。

え？どうやって取り出したって？ こまかいことは良いの、良いの……。

「ニヤア……僕は猫猫^{ニヤンニヤン}、宝？とは良い友達になれそうニヤ、宜しくニヤ」

頭の上の人形が喋る。

「まさか……宝？に友達が出来るとは驚きなのです」

「俺っちも驚いたぜ……宜しくな猫猫」

「ニャア……嬉しいニャア……友達できたニャア」

良かったな、猫猫。

ちなみに俺の奥義？190「完全腹話術」を使って猫猫を演じている。

奥義？150「完全傀儡術」を使えば生き物のように動かす事も出来る。

今はちょっと道具が無いから無理だが……。

「龍牙殿、手合わせして貰えぬか？」

星が急に言い出した。

「何で？」

「武人ならば強い者と戦ってみたいと思つのは当たり前ではござらぬか」

なるほどね……軽い戦闘狂みたいなものか。

「分かった、やるうぜ」

「かたじけない」

そして、俺と星は互いに離れて、間合いを取る。

風と戯つちゃんは巻き込まれないようにかなり遠くに離れる。

さーて……どうしようかな？

「武器は出さないのですかな？」

「ああ、ちよつと待ってる」

俺は両手を振り上げると何かを掴み、下に降ろす。

両手には先の曲がった棒のようなものを持っている。

「な！……どこからそれを……」

ん？……お前らにも着いてるだろう？会話するたびにな。

「？……何の事ですか？」

いや、さっきから着いてるじゃん……」「……が。

『は』

星たちは首を傾げる。

いや、だから……これだって」「

『っっっ』

何で、分かんないんだよ……もうっ。

読者（お前たち）は分かるよな。これ」「

実は「」は武器にもなるんだぜ！

「」ってそういう奴じゃないからb yナレちゃん

俺は「」の曲がっている先を真っすぐに曲げる。

そして、二つを合体させて、長い棒になった。地面に叩きつける。

先から槍の穂先が出現する。

ほら、「」は武器になるだろう？

そんな事が出来るのはお前だけだb yナレちゃん

さあ、行くぞ星。

「」つむ、いぞ尋常「」

「勝負！」「

本当は『』になってるんだけど、今俺、「」使ってるから、『』にはならないんだ。

分かりづらくてすまん。

はあっ！

「くっ！」

俺は星の腹に向かって、突きを放つ。

星は槍で防ぐ。

俺は引き戻して、また突きを放つ。

肩、手、脇腹、胸、頭を狙って突きを放って、引き戻し、また放つ。

俺の連撃を星は槍で防ぎ、避けていく。

顔には冷や汗が出ていた。

どうした？こんなもんか？

「ふっ……見くびらないでいただきたい」

そうかい。

俺は突きを放ちながら左手を離して、前の方を持つとそのまま槍を振るって、穂先が無い方で星の首の右側面を狙う。

「なっ！」

星は後ろに下がるが、隙だらけだ。

俺は左の前蹴りを腹を狙って、繰り出した。

「ぐっ！」

前蹴りが炸裂して、星は吹っ飛ぶ。

当たる前に、なんとか避けて威力を殺したのか倒れる事は無かった。

俺は星に向かって走る。

「はあっ！」

星は槍でカウンターの突きを繰り出す。

甘いな。

俺は槍を横になるように持ち直して、それを振り上げ、星の槍の軌道は上へと変えた。

「っ！」

俺は左手を離しながら、左足の下段蹴りで、星の右足に繰り出す。

「くっっ！」

星は痛みにより、動きが止まる。

俺は左手で星の首の後ろを掴んで、引き寄せながら跳躍しながら、右膝を腹部に叩きつける。

「があっ！」

膝蹴りだ。星はその一撃により、吹っ飛んだ。

そして、倒れるが、すぐに起き上がる。

「はあ……はあ……はあ……」

まだ、やるか……。

俺は星に向かって、走る。

軽く腹部に、左拳を当てると開いて手を当てる。

はあっ！

そして全力を左掌に集中させて、思いつき押し出した。

密着した状態で衝撃を相手に伝え内部を破壊する技 発到だ。

「うっ！」

手加減したから、吹っ飛び、地面を引きずりながら俺から離れて行く。

そして、星の身体は止まる。

俺たちは又、間合いを取っていた。

「よもや、ここまでとは……」

どうする？止めるか？

「いや、続けさせてもらう」

そうか……。

俺は何となく後ろを見る。大岩があった。

「余所見とは、油断大敵ですぞ！」

星が俺に向かって、走る。

俺もすぐさま星に向かって走った。

そして、方向を変えて大岩に向かって、走る。

「ん？」

星は俺を追いかけてきた。

「自ら避けられない状況に陥るとは……はあっ！」

そして、星は俺に向かって槍を突き出す。

俺は大岩を斜めから右足で昇り、左足で上がる。

これで星の槍を避けた。

そして右足で大岩から跳ねて、そのまま星の顔の右側面に右足で回し蹴りを放つ。

「うあっ！」

回し蹴りは炸裂して、星は吹っ飛ぶ。

そして、倒れた。

三角跳びからの右回し蹴り。

カウンターとしては上々だろう。

星は再び起き上がった。

まだやるか……。

星は黙って槍を構える。

んじゃあ、俺もそろそろ必殺技を出すか。

俺は槍を上に掲げて両手で回していく。

その、心臓頂くぞ。

槍は高速回転していく。

そして、星が向かって来た。

俺は星を待つ。

くらえ、ブラディースクライボルグ。

俺は槍を降ろして、突きを放つ。遠心力を乗せた最速の突きだ。

そして、星の突きと……。

「星ちゃん、お開き見たいですよぉ〜」

俺と星はずっこけた。

さっきまでの雰囲気台無しじゃねえか、おい！

見渡してみると、砂埃が舞う中に曹の旗が見える。

「官軍か……」

「このままだと厄介な事になりそうですね……」

星は渋々といった表情で槍を下げる。

俺も槍にしていた」「を元に戻す。

「龍牙殿、いずれまた手合わせ願えますかな？」

「ん？ 勿論俺はいつでも引き受けるぜ。」

「そうですか……その日を楽しみにしておりますぞ」

俺たちは再び握手をする。

「さあ、急ぎますよ。風、星」

「うむ、それではまた……」

「また会いましょう不思議なお兄さん」

「じゃあな……兄ちゃん」

「おー、また会おうな……星、風、宝？、そして戯っちゃん」
俺は手を振りながら去っていく星たちを見送る。

「戯っちゃんは止めてください！」

戯っちゃんの叫びが響いた。

まったく照れ屋なんだから……。

問答無用で捕まる いろいろ聞かれたり、尋問される 俺 死刑

嫌だああああああああああああああああああああああああああああああ

いきなり、二話で死にたくなああああああああああああああああああああ

考えろ……考えるんだ……感じるんじゃない……考えろおお……
龍牙ああああ。

「話し合うか、でも、俺お喋りだからなあ……相手の気を損ねて即座に殺されるかもしれない……ぬおおおおおおおお」

ピン

ピン

ピン

ピン

オーキッ○レースのスタート前に鳴る音が脳内で響く。

「よし、逃げる！」

俺は星たちとは違う方向に走っていった。

はたして、恋姫の世界は俺にどんな出来事を用意してくれるのか。

楽しみで仕方が無い。

「読者（お前たち）も俺がどうなるか楽しみだろっ？ 俺の物語は
始まったばかりだ」

さあ、俺の物語が本当の意味で始まるぜ。

「興奮が止まらねえぜえええ……八八八八八八八八八八八八
八八八八八八八八」

俺は走りながら笑う。

しかし、俺はこの時にした決断を後悔することになる。

まさかあんな目に会うなんて……。

さすがの俺でもこのときは知る術など無かった。

「メインキャラに遭遇と自己紹介と手合わせ

え？武将が皆、女性？」

（後書

龍牙とナレちゃんによる相談 コーナー

作者「此処、そういう事やるところじゃねええええ！」

龍牙「細かい事は気にすんな」

ナレ「そうそう……」

作者「龍牙……お前については何も言わん……だが、ナレーション
連れてくんなああああ！」

龍牙「だって俺たち仲良しだもんな」

ナレ「うんっ」

作者「こいつらあああああああ！」

龍牙「さて、作者はほつといて、読者（お前たち）に聞きたい事がある。今から言う選択肢を見てくれ」

？ 魏ルート行っちゃえよお……。

？ 嫌々、呉ルートだろう……JK。

？ 蜀一択だろう。

？ きゃー、龍ちゃんあん、好き勝手にやっちゃって、そこに痺れ

るし、憧れちゃう。

龍牙「この四つの中から一つ選んで、名前、住所、電話番号を「聞いてどうすんだああああ！個人情報保護も何もねえだろうがあ！」

じゃあ、書かなくていいからこのaku「俺のメアド公開すんな

！」じゃあ感想蘭に書いていてくれ……一番多かった選択肢を採用

するかも
「

作者「かもかよおおおおお！」

龍牙&ナレ「それじゃあ、バイバーイ」

作者「こいつら……」

次回 「うわーい、未知の大陸楽しいや」

龍牙 「戦わなければ生き残れない！」

作者 「タイトル関係無いだろ！」

「俺の壮絶なる旅　まさかのできごと」（前書き）

龍牙「大変だ！……読者（お前たち）の期待に応える事が出来そうにない！」

作者「一体どうしたんだ！？」

龍牙&ナレ「その前にあらすじを見てね」

作者「引つ張るなああ！」

あらすじ

神埼龍牙は恋姫の世界に何故か降り立った。そして思案に暮れた頃に星、風、宝？、戯志才に出会う。彼女たちは神埼龍牙に頼む。

「この大陸を破壊しようとしている魔王を倒してほしい」と、龍牙は彼女たちと旅に出る。

魔王を倒す勇者としての使命を持って……。

作者「なんとというテンプレ異世界物語……じゃなくて！恋姫そういう話じゃねえだろおおおおお！嘘つくなああああああ！」

龍牙「んじゃ、ナレちゃん　いつくぞおおー！」

ナレ「うん！せーの……」

龍牙&ナレ「本編始まるよおおおおお」

作者「無視すんなああああ！」

「俺の壮絶なる旅　まさかのできごと」

よう、読者（お前たち）　おはよう、こんにちわ、こんばんわ。

読者（お前たち）の頼れる兄貴分の神埼龍牙だ。

前回の流れはこうだ。

星、風、戯っちゃんに会う　官軍来る　星、風、宝？、戯っちゃん
立ち去る　俺「あはよ、とっつああん」で星、風、宝？、戯っ
ちゃんとは違う方向に去る。

まあ、こうなっている。

んじゃあ、本編スタート。

「くっ……まずった！」

俺は今、ものすごい後悔をしていた。まさか……こんな事になるなんて……。

今の状況を言う前に、クイズ タイムうううううううう。

問題 俺は今、どういう状況になっているでしょうか？

さあ、この答えが分かるかな？ え？ ヒント？……何それ？ 食えるの？

なーんて、冗談だよおおおおお！

この俺が読者（お前たち）を蔑ろにするわけ無いじゃないか。

じゃあ、ナレちゃんカモン

はい、はい（*・・*）／ この作品のナレーションのナレち
やんでええす

読者、^{みんな}宜しくね（ノヽ・） キラッ

んじゃあ、ヒントは、龍牙にとって恋姫の世界は未知の世界って事
だよ

ありがとうな、ナレちゃん。頭の良い読者（お前たち）なら、これ
で分かったんじゃないか？

何？ 分からない？ よし、読者（お前たち）のために歌で説明してやるぞ。

BGM、カモン。

歌はデール〇ンのあれを思いだしてね byナレちゃん

俺は〜誰だ、誰だ、誰だ？ 俺は、龍牙 神埼いいい龍牙ああああ

小説の常識を〜破壊するために、生まれた男。

龍牙ハンドは「」掴み、龍牙イヤーはナレを聞く、龍牙アイなら
読者見て、龍牙パワーは壁破壊

第四の壁を〜破壊した〜常識破りの〜龍牙 龍牙あああ

御免……間違えた。テへ
こっちだ、こっち。

読者^{みんな}の知ってるあれだよ by ナレちゃん

迷子の、迷子の龍牙君、いったい村や街は何処？

歩いて いても 分からない 走って いても 分からない

グー グー グー グー グー

腹の 虫が 鳴り続け

神崎 龍牙は

餓死寸前で フラ フラ フラ フラ

いやあ、参った参った……まさか、迷うなんてなあ。

未知の大陸なのに、適当に歩くからだよ　byナレちゃん

ふっ……大陸が俺を呼んでいるからさ

格好つけても現実は何も変わらないよ　byナレちゃん

あーん、ナレちゃんが冷たいいいいいいい。

僕の出番を願っている人が居るからね、頑張るよ）（V

それは良い事だけどさあ……。

あゝあ、こんな事なら劉備たちと一緒に居るべきだったな……。

え？ 何で劉備を知っているかって？ふっ……それはだなあ……。

回想始まるよ byナレちゃん

ナレちゃんが俺を虐めるうううう……悔しい、ビ……馬鹿はほっ
といて良いよ byナレちゃん

うええん

（回想）

あれは十年前の事だった……マジメニヤッテ）（

はい……。

（本当の回想）

俺は歌を歌いながら歩いてた。

何故、何故、何故、恋姫の世界に来た

赤い外套 龍牙の証

皆の悩みを解決さ

皆の頼れる救世主

何故、何故、何故恋姫の世界に来た

龍牙自身も 分からない

BGMは黄○バツ○を流してねbyナレちゃん

「さて、これと龍牙の唄（さつき間違えて歌った奴）、どっちをOPにしようかな？ ナレちゃんはどっちが良い？」

これ、小説だからOPは聞けないよ byナレちゃん

.....
o

しまったああああああああああああああああああああ
!?

ううっ、せっかく考えたのに……。

でも、替え歌だよね　byナレちゃん

おう!

あーあ、鬱になっちまったぜえ……もうこの物語止めようかな……。

あそこに何かあるよbyナレちゃん

俺がナレちゃんの言うとおりに遠くを見ると、そこには……。

ああああああああああ！！

ふーんb yナレちゃん

皆、今行くからなああああああああああああああああああああああ
あああああああ！

俺は桜に向かって走った。

そこは大量に綺麗な桜が咲き誇っていた。

これほど綺麗な桜があるんだ。さぞや人もたくさんいるだろう。

そして、盛り上げながら皆から酒やご馳走を貰う。

うむ、いつも通りだ。

俺は歌を歌いながら歩く。

BGMはヒ○チのあれだよbyナレちゃん

この木 何の木 桜の木 とっても大きな木ですから

綺麗な花が咲いているのでしょ

この木 何の木 桜の木 たくさん生えているからね

凄く大量に 咲いているのでしょ

人もたくさん……俺は重大な事実に気づいてしまった。

ドンマイ byナレちゃん

くそう……何だよ、これじゃあ桜を見て一気にテンション上げた俺が馬鹿みたいじゃないか！

違うの？byナレちゃん

何が……桜だ……何が……花見だ……馬鹿にしゃがってええええええええええ！

被害妄想だよ byナレちゃん

おのれ！桜ああああああ！絶対に許さん……こうなったら、桜狩りだああああああああああああああああああ！

ただの八つ当たりだね byナレちゃん

俺は懐から巨大なビニール袋を出して、手に持つ。

そして、桜狩りを開始した。

桜狩りとは

説明しよう、桜狩りとは桜の花弁を一つ残らずビニール袋に回収し

て、持って帰ってしまっ

大迷惑な行為なのだbyナレちゃん

おおっ、ナレちゃん 某世界の破壊者に出てくるアポ〇ガイ〇トの
真似上手い。

へへっ(〃) (あっ(・。・。〇) (作者からナレーション
してと頼まれた。

行ってくるね byナレちゃん

行ってらっしゃーい、俺は桜狩りを続けていた。

俺を馬鹿にした事思い知らせてやるぜ

龍牙が桜狩りを続けている頃、とある三人の女性が歩いていった。

「この辺り、かなあ〜？」

「おかみから聞いた場所はこの辺りですね」

「きつと丘のむこうにある気がするのだ」

桃色の髪を二つに分けている女性と綺麗なポニーテールの黒髪を持つ女性と赤髪に虎のPATCHのようなものを着けている少女だった。

彼女たちは恐らく桃の木を見に来たのだろう……。。

龍牙が居る方へと向かって行った。

そして、彼女たちが見たのは眼下に広がる一面桃色の世界では無く……ただの干からびた木だった。

ナレちゃん、お疲れ。

俺も疲れたよ、まさかこんなにあるとは……。

俺は巨大なビニール袋の中を満たした桜……あれ？桜じゃなくて桃？を見ていた。

まあ、どっちでもいい……思い知ったか桜、あるいは桃よ。

どうやらナレちゃんが言うならそろそろ三人の女性が来るようだし

な……楽しみだ。

一人は幼女だしね

そして、三人の女性を見つけた。

皆、固まって、（。）。な顔をしていた。

俺は挨拶をしようとしたのだが、ポニーテールな女が俺と担いでいる袋を見て……。

「貴様かあああああああ！！！」

いきなり雑刀を持って、襲いかかってきた。

え？ 何で？……何か……俺、悪い事した？

ナレちゃんからのヒント 三国志、ここが桃の花咲き乱れる場所、三人

三国志で……桃の花……三人……あつ！

分かった？byナレちゃん

俺……やっちゃた？

うん byナレちゃん

もう俺、やっちゃん……とかやってる場合じゃねええええ！

俺は袋から手を離すと急いで、「」を手に取り、二つを合わせて盾にする。

これぞ、俺流ガード○ントだあああ！

そして、女が振り下ろした雑刀を防いだ。

金属音が鳴る。

「くっ！ どこからそれを……」

ふっ！ お前たちも持っているものさ。

「訳の分からない事を……」

それより……一度、話会わないか？

「話す余地など無い！」

うわぁ……めっちゃ怒ってる……やっぱこれじゃ、駄目か……なら……。

俺は女の後ろを見る。二人の女性が居た。

幼女を人質にするなど、愚か者のすることであり、許されざる禁断の行為だ。

ならば……。

俺は盾を持つ手に全力を込めて、おもいっきり押し出した。
発砲の応用だ。

「な！」

女は吹っ飛ぶが、体勢を立て直している。

「愛紗！」

「愛紗ちゃん！」

二人は女に声をかけた。

俺は盾にしていた「」を元に戻した。

女がまた向かってきていた。

俺は走りながら、右手の拳を顔の位置まで上げる。

「俺の右手が真っ赤に光る……悪を倒せと轟き、叫ぶ！」
悪は龍牙じゃない？ by ナレちゃん

良いんだよ、気分、気分。

俺の右手が光で輝いた。

そして、女とぶつかる前に跳躍しながら前転して着地する。

「何！？」

俺は後ろの桃色の髪の女に向かって走る。

「湯かず、飢えず、無に還れっ！……シャイニングウウウウウ
レムリア・フィンガアアインパクトオオオオ」

前もそうだったけど……ごちゃませだね byナレちゃん

俺は光り輝く拳を引いた後、手を開きながら女の顔面に向かって繰り出す。

「きゃあっ！」

そして、女の顔面を掴みながら走る。

「桃香様！」

「お姉ちゃん！」

二人が追ってきていた。俺はすぐさま女を掴みながら振り返って、雑刀を持っている女の前に突き出す。

「くっ！」

女の動きは止まった。

これぞ、脱獄囚直伝最強の盾（ガード○ント）

俺の視界にいた女が悪いのだ……。

いわゆる身代わりであるbynaレちゃん

「ここは冷静に話し合おうじゃないか？」

「く！甘く見ていたか……」

「お姉ちゃんを離すのだ！」

俺は女が薙刀を下げるのを見て、掴んでいる女を離す。

「悪かったな……こうするしかなかった……」

俺は女に謝る。

「いえ、謝ってくれましたし……」

どうやら許してくれたらしい。ポニーテールの女と幼女は怒っていないようだが……。

「何で、襲いかかって来たんだ？」

「貴様が桃園の地をめちゃくちやにしたからだろう！」

「それには理由があるんだ……」

「理由ですか？」

三人は俺の話の話を聞こうとする。

「実はな……イライラして、ついやっちゃたんだ」

「貴様ああああ！」

女が再び薙刀を構える。

「わあ、待て待て。直せばいいんだろう……直せば……」

「お前……直せるのか？」

幼女が俺に問う。

「ああ、俺に任せろ！」

なんせ、花咲かせ龍牙と言われているからな。

この酷い枯れ木たちに命を与えよう。

元凶は龍牙だよ byナレちゃん

俺は袋を持つと、木に向かって跳躍する。

そして、木の枝から枝へと飛び移りながら花をばら撒き始めた。

みるみる枯れ木が美しい桃に変化する。

これぞ俺の秘技？3「花咲かせ」

俺は桃園を完全に復活させた。

「で？……君たちは何しに来たの？」

「私たちは杯を交わそうと……」

「杯？……食べ物ある？」

「それは無いです……すみません」

女は謝る。

「ああ、良いよ良いよ……あつたら良いなぐらいに思ったただけだから……」

「ところでお前は誰だ？」

ポニーテールの女が言う。

「ふっ……良くぞ聞いてくれた……ナレちゃん、パート2で行くぞ！」

はい（*・・*）ノ

俺は後ろを向く。

「そこに居るのは男一人……彼は退屈が嫌いだった……」

『!?!』

三人は突然聞こえた声に驚く。

「だからこそ、彼は求める。自分を狂わすほどの刺激を……そんな男の名は……」

ナレちゃん交代だ。

「皆の悩みをズバツと愉快に解決……人生楽しく過ごさなきゃ損。猫探しから暗殺まで金さえあれば引き受けます。あなたの頼れる隣人で救世主の神埼龍牙たぁ……この俺だぁぁぁ!」

歌舞伎役者のようにして左手を前に突き出す。

『……………』

三人は黙っていたが、幼女は目をキラキラさせていた。

「んで？ あんたたちは？」

「私は劉備です」

桃色の女が言う。

「……………関羽だ」

ポニーテールの女が言う。

そついや、そつだな……何で逃げたんだろう W W W W W W W W W W

W W

俺は戻つた。

「劉備？」

桃色の髪の女を差す。

「はい」

「関羽？」

ポニーテールの女を差す。

「ああつ……」

「張飛？」

幼女を差す。

「そつなのだ」

「え？ 関羽はヒゲ無いの？」

「は？」

「あれ？美髯公って呼ばれてるんじゃないか？」

「何を訳の分からない事をさっきから言ってるんだ……」

「愛紗ちゃんは美髯公とは呼ばれてますけど……」

ふむ、髯期待してたんだが……まあ、女に髯があったらネタ的においしいだけかな……いじれないのはつまらんが……まあ、いいだろう

「確かに綺麗な髪だな……良く似合ってるぜ」

「はあ、一応ありがとうございます」

「おう、俺が人を褒めるのはいつもの事だから自信を持っていいぜ」

「何だか、不安になってきた……」

「で？ 張飛ちゃんだっけ？」

「うにゃ？」

張飛ちゃんは首を傾げている。

張飛……あのガチムチおやじがこんな……こんな……素晴らしいっ！

俺は張飛に背を向けると姿勢を低くした。

「さあ、肩車してあげるから乗ってくれ」

「乗ればいいのか？」

そして張飛を肩車して、俺は走りながら跳躍して前転や側転や後転などアクロバティックに動いていく。

「にゃあー」

張飛は楽しんでいるようだ。

そして、俺は張飛を降ろす。

「満足したかい？」

「楽しかったのだ」

良かった、良かった。

「それじゃあ、杯をゆっくり楽しむと良い……邪魔したな」

俺は立ち去ろうとするが……。

「あの……待ってください！」

「ん？……何？」

「もしかして、龍牙さんって天の御使いじゃないんですか？」

「桃香様！」

「お姉ちゃん？」

え？天のお使い…………俺、神様にお使いなんか任されてたかな…………。

字が違うよ、お話聞こうか byナレちゃん

「天の御使い？何それ？食えんの？」

「ええと…………天の御使いというのは…………」

劉備によると管路が、何かいかにも異世界物語にありがちな予言を
していたらしい。

まあ、100%当たりではある。天の御使いは俺だろう。

しかし…………俺は予言とかそういうのに従うのは御免である。

俺はいつでも自由だからな。読者（お前たち）もその方が良いだろ
う？

「残念だ…………俺は異国の旅人で…………天の御使いでは無い」

「そうですか…………」

劉備はがっかりしていた。関羽は安心したように息を吐いていた。

良し…………良い事思いついた…………ふふつ…………。

「あのつ…………宜しければ一緒に杯しませんか？」

「良いの?」

「はいっ……こうして巡り合ったのも何かの縁だと思っんです」

ラッキー

良かったね byナレちゃん

「じゃあ、参加させて貰おう」

「はいっ」

そして、俺たちは杯を持つ。

「三人一緒って事は何かやりたい事があったんじゃないの? 俺は良いから先にやってな」

「あの……良いんですか?」

「良いの、良いの……俺はおまけみたいなもんだし」

「それでは……我ら三人っ!」

関羽は叫ぶ

「姓は違えども姉妹の契りを結びしからは!」

劉備が言う。

「心を同じくして助け合い、みんなで力無き人々を救うのだ!」
張飛が言う。

「同年、同月、同日に生まれる事を得ずとも！」

「願わくば同年、同月、同日に死せんことを！」

そして、乾杯をする。

これが有名な桃園の誓いか……感動的だな……だが……それ以上は
駄目だよbyナレちゃん

それに台無しにするところだったよね？byナレちゃん

気にするな……。

「この桃園から三姉妹に祝福がある事を……」

俺は呟き、掲げた。

そして飲む。

「やはり、綺麗なところで飲む酒は違うな……」

「そうですね」

「そうなのだ……」

「その言葉には同感だ……」

俺たちは酒を飲み始める。

そして……俺は酒を持った。

「悪かったな……もう一杯どうだ？」

「……頂こう」

そして、関羽の杯に酒を入れる。

関羽はそれを飲むと……。

「げほっ……げほっ……」

酒を吐き出した。

「いえーい！ 引っ掛った、引っ掛った……俺に刃を向けといて……
……ただで済むと思うなよ」

俺は酒の中に懐から出した塩をたっぷり入れておいたのだ。

あー、スッキリした

さっきまでの雰囲気大 無し である byナレちゃん

そして、笑っていると……。

関羽がおもむろに立ち上がる。

「……」

「待てと言われて待つ馬鹿がいるかあああああ！」

俺はただひたすら逃げました。

(回想終了)

まさか……○アル鬼○っこをするハメになるとは……どうしてこうなった？

お前のせい byナレちゃん

あれから、歩き続けているのだが……街が見つからない。

もう一週間も何も食ってないのだ。

何故だ……「」でダウジングしているのに……！

これ、水探しじゃないかあああああああああ！

くそっ……どうして俺がこんな目に……。

(龍牙って作者の権限で良く酷い目に会っただよ (byナレちゃん

何?……そうか、そうか……もう許さん。

おのれえええええ、作者あああああ。

俺は跳躍した。そして上へと飛び上がる。

パソコンの画面を突き破った。

作者「え？今、本編……」

龍牙「残念だったな……」

龍牙は懐からデザートイーグルを取り出した。

そして、作者の額に向ける。

「お……お前……」

「問題だ……俺はこの後、何と言っかな？」

「撃つていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ？」

「jack pot（大当たり）」

龍牙は引き金を引いた。

轟音が響いた。

龍牙は画面の中へと戻って行く。

悪は滅びた……これで、なんとかなるはずだ。

俺は歩き続けると……人の騒ぐ声が聞こえた。

間違いない……祭りだあああああああ！

どうして？byナレちゃん

街の中で祭りが行われてるから騒がしいんだ……そうに違いない。

今度こそ……俺は祭り盛り上げ大皇帝になれる。

俺は走って行った。

どっかの軍と賊だと思われる集団が戦っていました

黄色い布だから黄巾党だろう。

人が腹を空かせて死にそうなのに……騒ぎやがってえええええええええええ！

おのれ、黄巾党！……許さん！

「俺は怒ったぞー！ 黄巾党ううううううううううう！」

今の俺は多分、伝説の戦闘民族のように金髪で金に輝いているだろう。

そして、戦場に向かって行った。

龍牙が戦場へと向かって、戦う様子を見ているものたちがいた。

旗には孫の字があった。

ちなみに龍牙は普通の姿だよb yナレちゃん

「あれは何？」

ピンクの長髪を後ろで纏めている褐色の女が言う。

龍牙は、拳、蹴り、投げ、手刀、肘打ち、膝蹴り、回し蹴りなど様々な格闘技で黄巾党を吹っ飛ばしている。大体は破壊され、死亡しているが……。

「良く、分からんが……火矢を放てー」

黒い長髪で眼鏡をかけた女が言う。

戦場に火矢が放たれた。

火矢は次々と刺さって行き、やがて大きな炎となっ

て行く。
「燃えろよ、燃えろよ」

龍牙も燃えるbyナレちゃん

そして、火は俺の赤い外套に燃え移る。

「アーチィチィ、アーチィ 燃えてるんだろっか」

現在燃えてるよ byナレちゃん

ふっ……心頭滅却すれば火も又涼しい……やっぱ熱iiiiiiiiiiii
iiiiiiiiiiii!

俺の身体で激しく燃える。

俺はゴロゴロと戦場を転がって行き、火をなんとか消した。

赤い外套は、俺の超高速治癒能力とリンクしてるから無事なんだ。

危なかった……もうちょっとで弱肉強食が座右の銘なぐるぐる包帯男になっちまうところだったぜ。

暴れたから腹が減っている。

俺は歩き出すと……。

「ちょっと待ってくれるかしら？」

俺は呼び止められた。周囲は槍を持った兵や弓を持った兵に囲まれる。

ピンクの髪の女がいた。

黒髪の眼鏡の女も居る。

ああ、あと白髪で後ろで髪を括っている人も居るなあ……ついでに

眼鏡をかけたほんわかとした緑髪の女も居る。

「何？……孫策・伯符に周瑜・公瑾に黄蓋・公覆……」

『！？』

自分たちの名前を言われて驚く。

ここまで来るとだいたい予想がつく。

それに不思議な人とか訳の分からないものとかになること自体は好きなんだ

「私の名前は分かりますか？」

ほんわか女が言う。

「分かんない」

「私は陸遜ですよ」

「どうも……」

なるほど……時代がごちゃまぜか……。

「あなた、何者なの？」

孫策が俺に訪ねてきた。

「ふっ……人を火計に巻き込むような奴らに……俺が……たとえ、

俺は退屈を嫌い、常に自分が狂うほどの刺激を求めている、人生は楽しく過ごさなきゃ勿体ないを信条にして、猫探しから暗殺までどんな依頼でも金さえ貰えれば文句も言わずに引きつける何でも屋。皆の頼れる隣人。そして皆の救世主こと神崎龍牙でえええす　そして、管路の言つとおり多分天の御使いで、お前たちの時代よりはあるか未来から来ていて、お前たちの名が本などに記録として残っているが……そこでは男として記録されているから此処は恐らく異世界で、俺の状況を例えるならお前たちが突然項羽と劉邦にあったような状況だという事など……口が滑っても言っわけないだろおおおおおおおおおおおおお！」

『あれ!?!』

うわーい！俺ってとってもお喋りさん

語るに落ちたとか言うレベルじゃないb y ナレちゃん

「詳しい話を聞かせて貰うとするか……」

「一緒に来てくれるわよね？」

にっこりと孫策が微笑む。

「俺がただでついていくとでも？……」

俺は殺気を放つ。

『！？』

全員が震え、動きを止める。

「くっくっくっくっ……」

俺は不敵に笑う。

「あー！あれは何だ！？」

「え？ 何？」

俺が適当に指を差すと、孫策たちは一斉にそちらを向く。

今だ！ トライオール マキシмумドラ○ブ

「それでは、皆さんさようならあああああああ！」

俺は走って去って行く。

これぞ戦力的撤退だ。

ただの逃亡であるbyナレちゃん

しかし、逃げきれなかった。

しまった！……腹が減っていて、力が……ジャ〇おじ〇ん、新しい〇を……。

俺は倒れる。

自爆であるb y ナレちゃん

「なんだか良く分からないけど……連れて行きましようか……」

その声を最後に俺は目を閉じて行く。

読者（お前たち）、ナレちゃん……俺はもう疲れたよ……。

おおっ、龍牙よ……死んでしまつとは情けないb y ナレちゃん

終わって無いよ……俺の人生コンテンツコインがたっぷりだから
な。

「俺の壮絶なる旅　まさかのできごと」(後書き)

作者「ふう、一回殺されるとはな……」

ズダン

作者「ぐはっ！」

バタン

龍牙とナレちゃんの後がきコーナー

龍牙&ナレ「読者^{みんな}、今回どうだった？」

ナレ「僕は出番増えるし」

龍牙「俺はいつでもフリーダム」

龍牙&ナレ「次回も楽しもう！バイバーイ」

龍牙「ちなみに俺は、三国全部のルート行ってやるぜ　だって俺

はフリーダムだからな そのほうが楽しめるし」

龍牙&ナレ「豪華景品は僕らを使ってもいいってことだよ、それと
いろいろ質問とかしてもいいよ」

次回「腹が減っては戦はできぬ！」

龍牙「目覚めろ、その魂」

作者「（死んでるので、突っ込めない）」

「呉の人たちにゴチになります 俺様大復活！そして呉の御使いに……」(前)

龍牙&ナレ「好評のあらすじ タイム」

作者「まじめにやってくれよ」

あらすじ

平成50年 世界は核の恐怖に脅かされていた……

作者「もはや恋姫関係無いだろうがあああああああ！」

龍牙&ナレ「本編始まるよおおお！」

作者「こいつらは本当に……」

「呉の人たちにゴチになります 俺様大復活！そして呉の御使いに……」

よう、読者（お前たち） おはよう、こんにちわ、こんばんわ。

そろそろ俺の事が分かってきたか？

え？ 自由すぎるって？ 良いの、良いの。

俺は現代の自由の女神と言われているからな

そんじゃあ、あらずじ始め。

分かりやすいあらずじ

？旅に出て、道に迷う。

？桃園で劉備、関羽、張飛ちゃんに会う。

？交流して、関羽と遊ぶ（鬼ごっこ）

？戦場で、呉の人たちとキャンプファイヤー

？意気投合して南陽へと一緒に行動。（連行される）

読者（お前たち） 本当あらずじ分かりやすいだろ

じゃあ、本編はじまり、はじまり〜

知らない天井だ……目が覚めると俺はまったく見覚えが無い部屋にいた。

布団から身を起す。

「ここはどこだ……そして、俺は誰なんだ？」

何かを思い出そうとするが……頭痛がして思い出せない。

「俺はいつたい誰なんだあああああああ！」

俺は訳が分からず混乱して叫んだ。

なーんて、嘘ぴよおおおおおおおおおん

もう、気は済んだ？byナレちゃん

うん

いやー、記憶喪失ネタはやっぱりこういう状況で使ってこそだなあ。

読者（お前たち）も騙されたる？

まあ、この部屋を知っていないのは本当だけど

さあて、大体の小説やゲームならそろそろ誰か来るな。

俺がそう思っていると、扉が開かれた。

「おお、起きたか「飯、ください！」「」

俺は即座に布団から飛び上がって、土下座をする。

床に額を打ちつけたから痛いぜ。

「まさか、店の食糧全部食べるとは……」

「ゴックン」

孫策、黄蓋、周瑜が何か言ってるが、俺は今食べるのに忙しいんだ！
邪魔をしないでくれ！

まったく、人の食事を邪魔するなんて……親に食事中は話しかけないという事を習わなかったのか？

これだから、常識の無いやつは……。

常識がないのは龍牙だと思うよ byナレちゃん

え？そう？……いやあ、照れるなあ。

「きゅっぷい……美味かったああああああああ」

俺は立ち上がって、両手を上げて叫ぶ。

元氣百倍、龍牙だああああああ。

今なら、メ〇ガ〇リユームみたいに口から〇ト〇インドゥー〇が出せるだろう。

わーい、俺様完全 大 復活。

そして、死の淵から蘇ったからテンションパワーアップウウウウ

ウ！

うわー、無法地帯人間が禁断地帯人間になっちゃった b y ナレちゃん

おう、もっと褒めてくれ

褒めてないけどね b y ナレちゃん

「それでは、話を……」「ごちそうさん。美味かったぜ……それじゃあ、バイバイ」「」

「ええ、またね」

周瑜が何か言ったけど、俺は手を振ると、孫策が手を振ってくれた……。

そして、俺は店を……。

「って違うじゃない！ 帰らないでよ！」

孫策が叫んだので振り返る。

「ん？何か用？」

「何か用って……」

「雪蓮以上に自由奔放だな……」

「いつそ清々しいのう……」

皆、呆然としてるけど……何か褒められてんね 嬉しいぜ。

違うと思うよ byナレちゃん

「あなた、天の御使いって言ってたわよね？」

孫策が俺に問いかける。

「え？ 言ったけ？」

『は？』

うーん、会話が噛み合わんぜ……面白いからこのまま会話のドツチ
ボールを続けよう

さっさと話を進めようよ) . (

そうだね

「ちよっと待ってな……確認するから」

俺は床を捲ると前話の台詞を読む。

そして、見つけた。

「ふっ……人を火計に巻き込むような奴らに……俺が……たとえば、俺は退屈を嫌い、常に自分が狂うほどの刺激を求めていて、人生は楽しく過ごさなきゃ勿体ないを信条にして、猫探しから暗殺までど

んな依頼でも金さえ貰えれば文句も言わずに引きつける何でも屋。皆の頼れる隣人。そして皆の救世主こと神崎龍牙でえええす。そして、管路の言うとおり多分「天の御使い」で、お前たちの時代よりはるか未来から来ていて、お前たちの名が本などに記録として残っているが……そこでは男として記録されているから此処は恐らく異世界で、俺の状況を例えるならお前たちが突然項羽と劉邦にあつたような状況だという事など……口が滑っても言うわけないだろおおおおおおおおおおおおおおおお！」

おう、言ってるな 把握した。

「あなた、さつきから床に手を当ててたけど……何してたの？」

「何って……前話を読んだだけだぜ」

『はあ？』

孫策たちは首を傾げる。

「まあ、気にするな……で？確かに俺は天の御使いと言ったが？」

「え？……ええつ、それを証明する証拠はあるの？」

「んじゃあ、選択肢。？俺の住む国の道具を見せる。？俺の持つ2000の奥義と5000の秘技を披露する。どっちが良い？」

「じゃあ、「？」を頼む」ちよつと冥林！」

「頼むから黙ってくれ」

孫策が言う前に周瑜が言った。

「分かった……？だな？……じゃあ、これを見ててくれ」

俺は布を取り出して、右の掌の上に被せる。

孫策たちはじっと見る。

「1……2……3……ハイ！」

俺が布を上げると、携帯とメモ帳とボールペンが現れた。

他の客も見ていたのか、全員から拍手が送られた。

「皆さん、ありがとうございます……お代はこちらに」

俺はお辞儀をしながら、懐から籠を出す。

そして、金が入っていく。

マジック 大成功

歓声って良いね

「一体、どうやったの？」

「内緒」

「ええー、良いじゃない」

孫策は頬を膨らまして抗議する。

「で？ それは何だ？」

周瑜が俺に問いかけてきた。

「ん？ ボールペンとメモと携帯だが……」

そして、説明をした。

「えーと。神崎龍牙の2000の奥義と5000の秘技集……へえ、面白そうじゃない」

「そっち違う！ こっちだ、こっち……」

「ちょっと取らないでよー」

とかいうやり取りがあったのは内緒にしておこう。

ただ漏れだよ byナレちゃん

うわお、俺って隠し事できないや

「確かに、ボールペンとメモは便利だな……だが、携帯は使えないのか？」

「通話は出来ないけど、カメラは使えるな……何なら、撮ってみる？」

『カメラ？』

「そつ、まあやった方が早いだろう……笑って笑って……はい、1+1はチーズと見せかけて2！」

「え？ ちよつと……」

孫策たちは焦る。

おいしい画像をありがとう

「んで、これがカメラで取ったお前たちだ。まあ、害とかは無いよ」

「すごい、私たちそっくり！」

「見事だな……」

「驚いたのう……」

「んで？ どうすんの？」

「そうだな……確かに天の御使いと言えるだけの証拠も手段も持っているようだ……性格に関しては問題があるようだが、悪人ではなさそうだし……雪蓮の好きにすれば良いわ。」

「ありがとう、冥林」

ん？ 何？……何の話？

「ねえ、あなた……私たちの……孫呉としての天の御使いにならない？」

孫策が言う。

「は？」

俺は混乱した。

「あなた……腹を空かしていったってことは迷ったってことでしょ？ だから私たちと一緒にいれば生活とか世話してあげるって言うてるんだけど」

「取引か？……条件は？」

「まあ、そうね……一つはあなたの知恵と力を呉のために役立てること、そして、もう一つは私に仕えている武将たちと、あなたから率先して交流を持つこと」

「一つ目は分かったけど、二つ目はどういう事？」

「よつするに口説いてまぐわってって事よ」

え？……は？……んん？

「あなたの胤を呉に入れるの。そうすれば呉に天の御遣いの血が入ったってことを喧伝できるでしょ？」

ナニコレ、ワケガワカラナイヨ。

お母さん、このお姉さんはさっきから何て言ってるの？

呉の女の子とリア充になって○ツク○しろって言うてるよbyナレちゃん

つまり、どういう事？

種馬になれってことだよ　でも、龍牙は精神年齢5歳だからまだ、早いね……お家に帰って寝なさいbyナレちゃん

うん、分かった。

俺は店から立ち去る。

「え？ ちょっと……」

そして、街を出た。

さて、もういいかな？

良いと思うよb y ナレちゃん

俺は店に戻る。

そして、口を開くと……。

「まじでえええええええええええええええええええええええ！？」

「え……ええっ……」

「嘘じゃないよな!?!……エイプリルフルとかでもないか!?!……ドッキリとかやめてくれよ!?!」

「何言ってるか分かんないけど……嘘じゃないわよ?」

「言っただな?……言質とつたぞ?」

「だから、嘘じゃないわよ」

「いよっしゃああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

種馬かぁ……つまり酒池肉林できるじゃん 俺の欲望を解放しろ
って事だろ?

男に生まれて良かった……天の御使いで良かったああああああああああ!!

「随分、嬉しそうね……じゃあ……」

「おう、俺は孫呉の御使いに……」

孫策たちは俺が黙ったことで続きを聞こうとする。

「ならないよ」

その瞬間、孫策たちはずっとこけた。おおう、見事だぜ

「えー、どうしてよ……めちゃくちや乗り気だったじゃない……まあ、嫌がる女の子にするのはダメで、女の子が良いって言うまでは駄目って言おうとしたけど……」

「それは当たり前だろ……まあ、あれだ……俺は自由でいたいから、

誰かに仕えたりするのはちょっと……つつか嫌だ!」

「道に迷ったのに?」

「それでもだ……」

「冥林ー、何とかしてよー」

「すまん……私もこいつが理解できない……」

俺って人から理解されないのよね……。

さすが、禁断地帯人間であるbyナレちゃん

「まあ、何でも屋としてなら一緒に居ても良いよ 金さえくれれば……」

「じゃあ、ここの食費はどうするの?」

「とりあえず立て替えとして……3日で返すから」

「それは信用できるの?」

「俺は嘘をつかない……契約に関してはね」

「でも、ねえ……」

「なら、俺に此処がずっと一緒に居たい場所だと思わせる事だ……
ようはとりあえず客将にしてって事だよ」

「一応は一緒に居るのだな？」

「ある程度はね 食事の恩もあるし……」

「分かった……」

「冥林！」

「とりあえずは一緒になってくれるのだ……そこから先は頑張るしかないだろう」

「うー、私はあきらめないわよ」

「ああ、頑張ってくれ……んじゃ、自己紹介だな」

「さあ、ナレちゃん……」。

ナレちゃん!?

一回言っちゃったじゃんbYナレちゃん

しょうがない……。

「俺は神埼龍牙……真名は無いから 龍牙って呼んでくれ。何でも

屋だ。一緒に居る間は好きに使ってくれ……」

「私は孫策、真名は雪蓮……宜しくね」

俺と雪蓮は握手する。

「真名だろ？ いいのか？」

「ええっ、あなたの事は気にいったしね」

「ほう、真名を……私は周瑜、真名は冥林だ……お前の力使わせてもらっぞ……」

「ああっ、構わんさ……金は貰っぞ？」

食費を返してくれたらなんと冥林は笑いながら言った。

「二人が預けるなら……わしは黄蓋、真名は祭……頼りにするぞ」

「任せろ、仕事に関してはプロだ」

祭はそうかそうかと笑いながら俺の背中を叩く。

「じゃあ、城に戻りましょう。おばあちゃん、おじいちゃん、今日はありがとうね」

「良いんだよ、私たちの料理はあんな美味しそうに食べるなんて……」

「いい食いつぶりだったぜ、兄ちゃん」

「ああ、美味かったよ、又来るな！」

「いつでも大歓迎だぜ」

「また、おいだよ」

おじちゃん、おばちゃん良い人だわー。

「そつだ……ねえ、カメラとか言うやつで写真撮ってあげたら？」

「もう、電池ないから無理だわ」

「ええー、ブーブー」

孫策は頬を膨らませるが……。

「あっ……」

俺は孫策の頭を撫でてやる。

「まあ、そう言うな……かわりに絵を書いてやる」

孫策はくすぐったそうに頭を撫でられていた。

「ほう……」

「これは中々……」

冥林と祭が興味深そうに見てきた。

うーん、どうしても女性に恋愛フラグ立ててしまつな……俺は愛として的好意に応えられないのに……。

龍牙…… byナレちゃん

まあ、ここからは設定の話になつちゃうし……本調子に戻るよ

「いくぜ、奥義？100完全模写だ。」

俺はメモ帳とカラーペンを数本出した。

そして、書き始める。

「はい、終わり」

俺は絵を見せる。

「凄いわね……そっくりじゃない！」

「芸術だな……」

「お主は何者なんじゃ？」

「まあ、何でも屋だからね……はい、おじちゃん、おばちゃん」

俺は絵を書いたメモを渡す。

ありがとうと礼を言われた。

そして、城に戻ろうとすると……。

「孫策様！……大変です、賊が……」

兵が言い終える前に孫策は走り出した。

「策殿！」

「雪蓮！」

二人も後を追う。

俺は……。

かて、毎寝しよつか

かつかと行いじよみ びんしちゃん

うん。

賊の集団が少女やその家族と思われる男と女を人質にしていた。

孫策は剣を抜きながらも、動けないでいる。

少女……許さん！

俺は隠れて様子を見ている祭と冥林二人に合流した。

「今、どういう状況なん？」

「ああ、どうやら……街中に潜んでいた残党共を警備兵が見つけ、ひっ捕らえようとしたのだが、

残党共は捕まるくらいならと自棄になって人質を取ったらしい」

冥林が説明してくれた。

「なるほど……じゃあ、俺の出番だな……」

「この状況を何とかできるのか？」

「ああ、任せろ……頼りになるところを見せてやる」

俺は孫策の側まで歩く。

「龍牙？」

「よう」

「何だてめえは！」

賊が叫ぶが……。

「何、通りすがりの何でも屋だ……お前たちモブキャラに名乗る名などないからな」

「何を訳の分からない事を……」

「雪蓮、良いもん見せてやるよ」

「？」

俺は左手を鳴らす。

パチ、パチパチと不規則に……。

そして、指を鳴らしながら歌う。

「とりあえず、剣を自分の首に突きつけて」

「な……何だ!？」

「身体が勝手に!……」

男たちは人質を解放しながら、剣を自分の首に向ける。

「さあ、自殺タイムの始まりだ」

「う……うわあああ！」

「い……いやだあああ！」

そして抗いながらも、男たちは剣を……。

「はい、終わり」

男たちは自分の首に剣を一齐に突き刺した。

そして、倒れる。

俺が作曲、作詞の自殺しましょうの歌だよ。どうだった？ 読者（お前たち）

とりあえず人前では歌わない方がよいよbyナレちゃん

えー、気に入ってるのに……。

「龍牙……何したの？」

「ん？ 歌と音で操ったただだが……ああ、妖術に見えちまつか……どうする？ 俺をこのまま殺す？」

秘技？「音操り」音を聞かせながら脳を混乱させて、歌にひそかに命令を混ぜて相手を操る。

まあ、発想は音使いからだけだな 実際音の方が催眠術かけるとき

も楽だ。

「馬鹿にしないで！」

孫策は叫ぶ。

「私の家族ともいえる呉の民を救ってくれたのよ……そんなあなたを殺すわけないじゃない！」

「そうか……すまないな」

「お兄ちゃん……」

俺の所に少女が寄ってきた。

「ん？ なんだい？」

「助けてくれてありがとう」

「ああ、大丈夫か？」

「うん」

少女は頷くと、両親の元へ帰って行った。

両親も遠くから頭を下げる。

俺はそれに手で応じた。

「龍牙……あれがお前の力か？」

冥林が言う。

「そうだ……他にもいろいろあるがな」

「まだ、ああいうのがあるじゃと………凄いのう」

「まあ、これから宜しく頼む」

そして俺たちは城に帰って行った。

さて、これからどうなるか楽しみだぜ

まっただね byナレちゃん

「呉の人たちにゴチになります 俺様大復活！そして呉の御使いに……」(後

龍牙&ナレ「読者、みんな今回も読んでくれてありがとう」

作者「次は拠点だな……」

龍牙&ナレ「番外だから少し文は短くなるかも……」

作者「まあ、頑張ります」

次回予告「番外だから、なし」

作者「おiiiiiiiiiii!」

番外編 呉の人たちとの交流 孫策編（前書き）

龍牙&ナレ「拠点話だよ あらすじもパスするね」

作者「次の本編ではつちやけるなよ？」

龍牙&ナレ「ぜつたいに嫌」

作者「ぬおおおおおおお！」

番外編 呉の人たちとの交流 孫策編

よう、読者（お前たち） おはよう、こんにちわ、こんばんわ。

今回は番外と言う事で短編的なもんになってるがぜひ、楽しんで行
つてくれ。

それじゃあ、スタート

俺は今、ギターを持って、ライブをしている。

「○艶○義○エン○チカイ」と「恋○大○」を歌い終えたところだ。

皆、盛り上がっている。

「それじゃあ、最後に○n y t h i n g ○ o e s ! いくぞ……俺が合図したら○ーズって言うてくれ。」

歓声が起こった。

俺は仮○ラ○ダー○ーズのオープニングを歌う。

そしてサビに入り、巻き起こる○ーズコール

そして、歌は終わった。

いやー、読者（お前たち）に美声を聞かせられなくて、残念だぜ

「今日は皆、ありがとう また聞いてくれるか？」

『いえーいー…』

そして、籠に金が置かれていく。

わーい、お金がたまっていくなよ

「それじゃあ、さようなら」

そして、俺は街から去って、山に行った。

山には俺の工房がある。

奥義？1580「完全建築術」でわずかな材料から作ったのだ。

そこには、俺の鍛冶場がある。

「」を使うのも良いが、切り札にした方がかつこいいしね

それに好きな武器作りたいし

まあ、いろいろ作ってたら……メ○ジャ○バーにリ○ルケ○ン、プ
リ○ム○ツカー、サタ○サー○ル、キン○ラ○ザーといった昭和と
平成の全○イダー武器とかリ○リ○ンとか○オ○ルフとか全○ビ○
メイ○ライの武器などいろんな作品の武器ができちゃったけど、こ
れって使った方が良いのかな？ 読者（お前たち）はどう思う？

普通の武器も作ってあるけど……。

その前に何で作れたの？byナレちゃん

何かノリで……。

わお、不思議な事が起こったんだねb yナレちゃん

そうだね……○具が出来たのは驚いたよ。

英霊は涙目だね b yナレちゃん

まあ、とりあえず赤い外套の中に入れとくか……奥義？135「超収納術」を使つて、赤い外套の中に入れた。

さて、また作るか。

「さあさ、武器を作りましょう。カンカンカン カンカンカン
鉄を叩きましょうカンカンカン カンカンカンカン」

手を叩きましょうのリズムだぜ

さて、歌が終わる前に説明しておかないとな。

俺は今、呉の土地にいる。

そこで客将になったのだが、俺は暇なので働くことにした。

今、俺の仕事は洋服屋のデザイン提供&制作、料理屋のメニューと料理制作、紙芝居屋、アーティスト、酒屋、家具屋 e t c , e t c
……。

ちなみに鍛冶は趣味だよ。

何か、仕事多いけど大丈夫？byナレちゃん

大丈夫、大丈夫 俺、一年間ぐらいずっと喋っていられるぐらいだから体力有り余ってるのよ……寝なくても平気だし。

食費は二日で返したかな。

孫策たち啞然としてたわ。

「ああ、楽しすぎる。上手に出来ました」

とりあえず、又できた。

交鉄剣だ。

普通の剣よりでかいぐらいだが……こいつには仕掛けがしてある。

「試し切りしようか……どうだ？雪蓮」

「分かってたの？」

「ああっ、俺が歌を歌う前に紙芝居をしたぐらいからな」

「そんな前から……」

じゃあ、雪蓮の回想スタート

私は冥林の魔の手から抜け出すと、街を歩いていた。

すると……。

「こうして……大きな豆の木の上にある神の神殿から神の小槌を盗み出し、巨大化して自分を迫害した人たちに復讐するため暴れまわった一寸法師は、かつて仲間だった熊と、熊と戦ったことで友情が芽生えた金太郎の捨て身の攻撃でやられました。そして、金太郎たちの覚悟により発動した神の小槌の真の力によつて金太郎と熊が蘇り、熊は蘇った時に本来の姿（美女な姫）の姿を取り戻して金太郎と幸せにくらしましたとさ　めでたし、めでたし」

「英雄つてつらいんだね……」

「そつだよね……自分たちを苦しめた鬼を退治してくれた一寸法師を自分たちとは違つというだけで恐れて迫害するなんて……」

「一寸法師がかわいそつだよ……」

「でも、一寸法師の呪いで熊にされた姫さまが金太郎と勝負しているうちに心を取り戻すのは良かったなあ……」

「一寸法師も死ぬ前に愛していた幼馴染と会えたしね」

「いろいろ考えさせられる内容だったね」

『龍牙兄ちゃん、ありがとう！』

龍牙が紙芝居だったけ？を読んでいたようだけど……子供たちがあんな感想を言うなんて、一体どういう内容だったの！？

「楽しんでもらえて何よりだ……じゃあ、次は歌を歌つからお父さんやお母さんと一緒においで」

『うん』

子供たちは去って行く。

私は様子を見ることにした。

龍牙の唄は凄かった。正直魅了されたし 盛り上がったもん。

歌が終わると、龍牙は何処かへと向かった。

私はこっそりついていく。

山だった。そこには建物があつた。

いつの間に作つたんだろう？

そして龍牙は何も居ないのに、誰かと会話してから歌いながら武器を作っていた。

それが終わると、私の方を見てきた。

雪蓮回想終わりだ。

「ってことだ……分かったかな？ 読者（お前たち）」

「何処を向いて言ってるの？」

「気にするな……」

そして、俺たちは森へと移動する。

「ここらで良いか……」

「そうね……龍牙とは勝負を試みたいと思っていたし……後をつけて正解だったかも」

「あまり褒められた事じゃないけど……冥林は怒ってるだろうしな……」

「う……」

そして、俺と雪蓮は剣を構える。

しばらくの静寂。

「はあっ！」

「ふっ！」

俺と雪蓮は剣を振る。激突して金属音が鳴り、鏝迫り合いとなる。

俺は右足で前蹴りを狙うが、孫策は跳び下がって避ける。

俺は走って孫策の方へ向かう。

「はっ！」

孫策は俺の首を狙って剣を振るが……俺は跳躍しながら前転して避けて、孫策の後ろに着地する。

「え？」

俺は走って、隙だらけな背中を右足で蹴る。

「きゃあ！」

孫策は吹っ飛び、倒れた。

すぐに身を起こす。

俺はその前に走っていた。

そして跳躍して左に回転しながら首を狙って剣を振る。

孫策は急いで剣で防いだ。

孫策は力に耐えきれず又吹っ飛んだ。

「やるじゃない……」

「それほどでもあるよ」

「余裕たっぷりね」

それが俺だしね

「次はこの剣の本領を見せてやるっ」

「へえ、それは楽しみね……はっ！」

孫策は俺に向かってきた。そして剣を振る。

俺は孫策の剣を防いだ。

再び響く、金属音。

鏝迫り合いが起きるが……。

「はい、分離」

「え？」

俺は剣を分離させ、剣を二本にする。

交鉄剣って合体剣なんだぜ

そして、左の剣で鏝迫り合いを続けながら、空いている右の剣で首を狙って振る。

「ちょっと……」

「俺のターンはまだ終わってないよ」

そして、手や足や腹や胸など身体全体を狙って、左右の剣で連撃を繰り返す。

孫策は必死に避けたり、剣で防ぐ。

「イヤッホオオオオオ、楽しいぜえええええええええ」

「私は楽しくないんだけど……」

右の剣で首を狙って振る。孫策は防いだ。

俺は身を沈めながら足を狙って左の剣を振る。

孫策は後ろに跳び下がって避けたが……。

「はい、隙あり」

俺は身体を起こしながら、すぐさま右の肘を腹に叩きつける。

「くうっ！」

孫策は吹っ飛び、倒れた。

「大丈夫か？」

「もう、二本に分かれるとか卑怯じゃない！」

「これがこの剣の特性だからな」

「ぶーぶー」

頬を膨らませて怒る雪蓮。

「分かった、分かった……後で酒を奢ってやるから機嫌を直してくれ」

俺は雪蓮の頭を撫でる。

「ん……約束だからね」

雪蓮はくすぐったそうにしながらもそう言った。

「ああっ……」

そして、俺はふと思いついて木に向かっていく。

「龍牙？」

「ちょっとやってみたい事があったな」

俺は二本の剣を構えると……。

「龍牙流二刀術奥義「百頭蛇閃」ヤマタノオロチ」

俺は剣をあらゆる方向に振った。

そして、木は粉々になった。

雪蓮を見ると……（。。。）な顔をしていた。

そしてハッとすると……。

「今の何？……え？ 何か見えなかったけど……景色が何回か歪ん

だと思つたら木が粉々に……龍牙……私と戦つてる時、手を抜いていたの?……」

「本気出したら、多分死んじゃうだろうしな……相手が……」

それにしても○重次○屈○現○を50回しか起こせなかつたか……後の50は早く振つただけだからな……まだまだ、修行が足りないぜ。

龍牙は何を目指してるの?byナレちゃん

とりあえず百の斬撃を完全に一撃で出せるようになりたいな。

「龍牙ってどうしてそんなにいるんな才能を持っているの?」

「まあ、一番はそのほうがいろいろ楽しめるからだな……」

「ふーん」

「さあ、冥林の居る所に戻ろうか……きつと怒りすぎて鬼になってるぞ」

「ちょっと、他人事みたいに言わないでよ!」

「だって他人事だもん」

「ううー、絶対巻き込んでやる」

「はっはっは……無理だ」

そして、俺は雪蓮とともに城に戻る。

そして、冥林の怒声と雪蓮の悲鳴が聞こえた。

俺？ 俺は冥林を見た瞬間に逃げました

番外編 呉の人たちとの交流 孫策編（後書き）

作者「お前って一体……」

龍牙「いろんな常識破ってるだけだよ」

番外編 呉の人たちとの交流

周瑜編（前書き）

龍牙「次は周瑜編だけ」

番外編 呉の人たちとの交流 周瑜編

冥林は驚いていた。

龍牙の知能を見るために暮を打っているのだが……勝てないのだ……。

まるで心を読まれているかのように、こちらにとって悪い手を打ってくる。

「（ここまでとは……）」

そして、龍牙が打つ。

「ほい、終わり」

「参った」

五戦中〇勝5敗。

冥林は自分に勝った龍牙に恐怖を覚えた。

「んじゃあ、約束守ってね」

「ああっ……当然だ」

やったー、1週間フリーだあああああああ！

休日を賭けにして、冥林と碁を打ってました。

龍牙って知能高かったけ？byナレちゃん

え？……うん、そ……そうだよ……。

本当に？byナレちゃん

そんなこと無いよ さっきも心理描写を読んだだけだよ

やっぱりそう言うことだったんだね b y ナレちゃん

心理描写を読む……これが本当の……せーの……。

読心術うううううううううううう。

これがやりたかっただけ？b y ナレちゃん

うん どうだ？ 読者（お前たち）も俺って上手い事言っただろ？

龍牙って本当反則だよねb y ナレちゃん

はっはっはっ、勝てばよかるうなのだ！

「ところで冥林……お前病気だろ……顔色悪いぞ？」

「何故分かった!？」

心理描写読んだからな。

「まあ、記録にあったのさ……病気で死亡するというのが……」

「そうか……」

「今は軽いようだが、ほつとくと死ぬぞ？」

「構わんさ……雪蓮が天下を治めるのを見れるならな」

「そんなあなたに大チャアアアアアンス」

「な……何だ？」

「ここにあるのはエ〇クサー、どんな病気でも治るよ」

俺は懐から薬を取り出す。

「それは……本当なのか？」

「本当だよ、どうする？ 飲む？」

「ああ、もし治るのなら……」

そして、冥林はエ〇クサー 俺の血と高価な薬草を混ぜた薬を飲んだ。

俺の超高速治癒能力は血を飲んだ人にも一瞬だが効力を発揮する。

どんな病気でも一瞬で治ってしまうのだ……。

「身体が軽くなったような気がする……」

「良かったね これぞ治ったよ……そしてアフターサービス始めるね」

「アフターサービス？」

「あっ……くじっ……はっ……じっ……」

冥林は喘ぐ。

「気持ちいい？」

「うっ……はっ……はあっ……」

「ここか……ここが良いのんけ？」

「はっ……ああああああっ」

冥林は叫びながら意識を失った。

「どう？俺のマッサージって気持ち良いだろ」

「ああっ、身体が完全に軽くなった。」

はい、おまえたち読者は何を想像した？

俺はただ、奥義？195「超快楽マッサージ」をしていたただけだよ？

俺が○ツク○をと思った？　まだまだしないよ

まあ、これぐらいしたら秘技？700「読心術」使ったの許されるかな？

「まあ、これからしてほしいなら言ってくれ、安くするからさ」

「そつだな……感謝する龍牙」

「ああ、といわけで明日から1週間の休日楽しむぜえええええええええええ
ええ」

俺は冥林の部屋から出た。

「まったく、不思議な奴だ」

そんな声が聞こえた。

番外編 呉の人たちとの交流 周瑜編（後書き）

龍牙「次は孫策&周瑜と言つ名のおまけだよ」

番外編 呉の人たちとの交流 孫策&周瑜編(前書き)

龍牙「これはおまけみたいなものだよ」

番外編 呉の人たちとの交流

孫策&周瑜編

私は久々に冥林と一緒に街に出ていた……そこまでは良かったんだけど……。

「あら？ 雪蓮ちゃん？……さっき食べてたわよね？」

「え？」

おばあちゃんのところまで食べようとしたらそう言われた。

「ねえ、お姉ちゃん……また綺麗な歌を歌ってよ」

「歌？」

子供たちにそう言われた。

「どついう事なの？ 冥林？」

「私に聞かないでくれ……」

私も混乱したけど、冥林も混乱していた。

そして、しばらく歩いていたら……。

『あれ!？』

私の目の前には私^がいた。

「ちょっと、あなた誰よ！」

「私は孫策よ……あなたこそ誰よ？」

「私が孫策よ……冥林なんとかして」

冥林は……。

「ああ、お前は誰だ？」

私の目の前の私を指さして言った。

あつちやく　これからお決まりのネタになると思ったんだけどな
……。

さすが断金の変わりだ。

「ばれてはしかたあるまい……ド〇スアツ〇」

そして、孫策の偽物は服を脱ぎ捨てた。それは偽物の身体を覆い隠す。

バキバキ、メリメリ、ゴキゴキなど明らかに魔法少女が変身するよ
うな音ではなく生々しい音が鳴った。

そして……。

「じゃああああああん　　正体は龍牙でした」

『!?!?』

孫策と冥林は驚く。

読者（お前たち）も驚いただろ

「龍牙はどうやって……」

「ん？　奥義？110と115と118と119の顔変化に筋肉変化に骨格変化に声質変化を使ったんだよ……実践してあげよう」

そして、龍牙は顔を隠し、身体が不気味に動く。　生々しい音が鳴った後、冥林になっていた。

「まあ、こんな感じに……」

冥林の声で言う。

そして、また顔を隠すと身体が不気味に動いて、龍牙に戻る。

「やったんだよ」

雪蓮と冥林は（。。。）な顔をしていた。

「何で私に？」

「何となくだが？」

「何となく……」

雪蓮が呆然としていた。

「お前は本当に人間か？」

冥林が問う。

「……」

「人間だぞ？」

「何で長い沈黙をしたんだ……そして疑問形とは……」

冥林は頭を抱えて、溜息を吐いていた。

俺って人間だよな？ ナレちゃん、読者（お前たち）

僕には分からないや byナレちゃん

あーん、ナレちゃあああああん

番外編 呉の人たちとの交流

孫策&周瑜編（後書き）

作者「お前って……」

龍牙「人間だと思っただがな？」

番外編 呉の人たちとの交流 黄蓋編

俺は庭でのを並べて、矢を放っていた。

いえーい、クリーンヒット！

見事、真ん中に突き刺さる。

今は200Mだから、次は1000Mでいこうかな？

「なんじゃ、龍牙。弓が使えたのか？」

「祭じゃん……どうしたの？」

「いや……わしは仕事が終わって休憩しようと思ったのじゃが……面白そうな事をしとるのぉ」

「ええ、そう？ 俺はただ何となく、どごその正義の味方のなれの果てになるうとしてやってただけ……」

「何を言っとするのか分らんが、勝負せんか？」

「勝負？」

「そうじゃ……わしが勝ったらお主の酒屋の酒を一カ月分貰おうかの……」

「じゃあ、俺が勝ったら一カ月昼飯奢って」

「良からるつ」

さあて、普通にしてみつまらないし……どつしよつかな？

わしは自分の弓の腕に自信を持っていた……だから、賭けをしたの
じゃが……わしはこの時まだ龍牙の恐ろしさを分かっていなかった。

俺と祭は的から500メートル離れて弓を射ることにした。

「まずは、わしからじゃ……はっ！」

祭は矢を放つ。

見事真ん中に命中。

「じゃあ、次は俺だな……必殺カーブ撃ち！」

俺は弓を左右に振りながら、矢を放つ。

矢は曲がると祭の矢を押し出して、突き刺さる。

「……次はわしじゃな」

しばらく固まっていたが、矢を放つ。

また見事に刺さっていた。

「よおおおし　ダツシュ撃ち！」

俺は走りながら、矢を放つ。

祭の矢を押し出して、刺さった。

以下、龍牙の奇射と祭の悲鳴になります。

「スライディング撃ち！」

スライディングして放つ。

「何と！」

「ジャンプ撃ち・ダイビング撃ち！」

ジャンプして放つ。後ろの木に登って飛び降りながら放つ。

「そんな！」

「不貞寝、仰向け、寝転がり撃ち！」

「どれもできちゃいかんじやる！」

「回転・回転ジャンプ撃ち！」

「だから嘘じゃろ！」

「前転、後転、側転撃ち！」

「ぬがあああああ！」

「足撃ち」

足で弓を撃つ。

「はあ……はあ……」

「（口撃ち）」

手で持って、口で放つ。

汚いよ bynaレちゃん

「もう、わしの負けじゃ……」

ええ、この後ダツシユジャンプ撃ちとかやるつもりだったのに……。

「頼むから普通に撃つてくれ！」

つまんないぜ

「じゃあ、普通に撃つからさあ……一緒に来てくんない？」

「何でじゃ？」

「良いから、良いから」

俺と祭は城の食堂に行く。

「もしかして、お主^ここから撃つのか？」

「そうだよ？」

「はははっ………冗談じゃろ？」

さあて、10KMぐらいあるかな？

俺は食堂の窓から良く目を凝らす。

おっ！ 的が見えた。

俺は弓を引いた。

「狙い撃つぜ！」

そして、放つ。

「さあて、見に行こう」

「頼む……嘘じゃと言っとくれ」

俺と祭は庭に戻る。

「いえーい、クリーンヒットだああああああああああああああああ
！ やったね」

「……………」

矢は見事、的に刺さっていた。

祭は（。。。）な顔をしていた。

最近、見る事多いけど何で？

龍牙のせい boyナレちゃん

「お主……本当に何者なんじゃ？」

「何でも屋」

「答えになつておらんじゃろ……」

「そう？　ところでこれ、飲んでみない？」
俺は懐から小型の酒を出す。

「良いのか？」

「うん」

祭は酒を飲んだ。

一瞬で顔が赤くなる。

「げほっ……げほっ……何じゃ、これは？」

「ん？ 自分用の酒」

「お主、これ飲んで平気なのか……」

純100%アルコールのお酒だよ

え？ 未成年？

ここは三^{むかし}国志だから、大丈夫

「昼飯の件は貸しにしとくな」

「何故じゃ？」

「勝負、楽しかったしね 次からは祭が店に来たら半額にしとく」

「本当か！」

「俺は嘘つかないよ」

「そうか……すまぬな」

「別に良いよ」

そして祭と俺は自分たちの部屋に戻った。

番外編 呉の人たちとの交流

黄蓋編（後書き）

龍牙「弓って楽しいね」

作者「お前、全ての弓使いさんたちに謝れ！」

龍牙「御免なさい？」

番外編 呉の人たちとの交流

陸遜編（前書き）

龍牙「これで番外編終了だよ」

番外編 呉の人たちとの交流 陸遜編

俺は今、自分の部屋に居た。

「暇だああああああああああああああああああ！」

そう、俺は今、暇なのだ！

何故か店員たちが休めと煩かったし、冥林もゆっくりしてると言うてたしね。

俺、1年寝ないで働けるのに……。

どうしようかな？ 雪蓮と祭は冥林に捕まって、仕事させられてるしなあ。

「そういえば、本見てないな」

この世界の本を俺はまだ読んでない。

よし、読むぞおおおおおおお！

俺は冥林に聞くために部屋に行く。

「冥林、本ってある？」

「それなら、書庫に」ありがとぅぅぅぅぅ！」「

俺は書庫に向かった……。

「あれ？」

俺は冥林の部屋に戻る。

「冥林、書庫って何処？」

「はあ、あっちだ……」

「ありがとう……」

俺は冥林の言う通りに書庫に向かった。

そして、一つの本を手取る。

本を開く。

「ん？」

俺は又、冥林の部屋に戻る。

「冥林！ 大変だ！」

「一体、どうした？」

「実は……」

「実は？」

「俺、字が読めない」

冥林はずっこけた。

「私は忙しいから、穩に教わってくれ」

「分かった」

読者（お前たち）に言っておくけど、穩には真名を許してもらっている。

そして、穩に文字を教えてもらっているんだけど……。

「良いですかあ、これがこうでえ……これがこうですう……はあっ
……はあっ……」

穩が本を開くたびに喘ぎ出す。俺に身体密着させてるし……。

そう、言ってしまうえば穩は……。

変態だあああああああああ！

龍牙も十分変態だけどね byナレちゃん

ええっ……。

しかし、このままじゃあ教わる事が出来そうにない。

「お前の欲望を封印しろ！」

「きゃあっ……」

俺は奥義？134「ツボ押し」で穩の高ぶりを抑え込んだ。

「あれ、疼きが消えちゃってますっ」

「さあ、続きを始めよう」

「は……はい……」

そして俺は穩に文字を教わった。

「凄いですうゝ まさかもう文字が全部読めるようになるなんて…」

「はっはっはっ……もっと褒めて」

俺は奥義の応用で脳をいじって記憶力などを上げた。

いやー、学校のテストとか楽だったぜ

「あれ？……身体が熱くなってきましたうゝ」

え？ 欲望封印したのに？ これならメダルの化け物たちも消せるのに？

「しょうがない……文字を教えてくれた礼だ！」

天国を呼ぶ指フロムヘブンフィンガーを持つ男といわれた俺がお前の欲望を解消しよう。

「奥義？999「パラダイス・ヘブン」！」

あまりに凄まじいので描写はカット。

穏は眠っていた。

「良く眠れよ」

俺は部屋を立ち去る。

おまけ

男はきよろきよろと辺りを見回し、店に入る。

店では一人の男が座っていた。

この店の店主だろう……。

「あの、黒の4をお願いします。」

「良いだろう……」

店主は四と刻まれた黒い箱を取り出した。

「さあ、その欲望で手を伸ばせ！」

「はい！」

男は金を払い、黒い箱を取ると店から立ち去った。

「いやあ、欲望って凄いな……そう思わないか？ 読者（お前たち）」

俺はまた新しい仕事を始めた。

え？ 何してるかって？ それはだなあ……。

雪蓮たちをモデルにした18禁の絵や漫画や小説書いて売っている
だけだよ

最低 である byナレちゃん

ちなみに漫画や小説はレ○物でええええええす。

男たちに大好評で、女の人もたまに買っていていってるな。

欲望（金）が一杯溜まっている。 今度欲望の王たちにもこの方法
教えてあげるかな？

性欲が一番強いって事。

虫の王が言ってたね、欲望（○ルメダル）も集まれば富（○アメダ
ル）に匹敵するって……。

おかげで大儲けだよ。

やったぜえええええええええええええええええええええええ

え？ 読者（お前たち）も欲しい？

さあ、その欲望で手を伸ばせ！

番外編終わり。

番外編 呉の人たちとの交流

陸遜編（後書き）

龍牙「ああ、俺ってお金持ち」

ナレ「やったね」

作者「お前は本当に……」

龍牙&ナレ「次回（本編）もよろしくね」

作者「はあっ……」

次回 「お前は一体何なんだ!？」

龍牙「ダリナンダア!？ アンタハ」

作者「もう、良いよ……」

「今話の俺は一味違っぜ」（前書き）

龍牙「今回の俺は真面目だぜ」

作者「急にどうした？」

龍牙「心を入れ替えたのさ」

作者「本当かよ……」

龍牙&ナレ「それじゃあ、あらすじ始め」

あらすじ

? 孫策たちに飯を奢ってもらっ

? 恩返しに客将になる

? 平穏な日常を楽しむ

作者「おいーって……あれ？」

龍牙&ナレ「本編始まるよー」

「今話の俺は一味違っぜ」

よう、読者（お前たち） おはよう、こんにちわ、こんばんわ。

読者（お前たち）の頼れる兄貴分の神埼龍牙だ。

今話の俺は真面目である。

まあ、本編を見れば分かる。さあ、始まりだ。

俺は今、南陽の街にいる。飯の恩があるために客将になっているのだ。(ちなみに飯代自体はすでに返してある)

はあー、ようやくテンション落ち着いてきたかな？

番外では口調変わってたね byナレちゃん

まあね

「まあ、金はたっぷりあるし、生活には何ら問題は無いな……」

ふっふっふ……さすがは商売王と言われた俺だ。

一番儲かったのは最低な手段だったけどね byナレちゃん

ああ、欲望の凄さを改めて知ったよ。

「ああ、しかし暇だな……面白い事は無いかな？」

俺はとりあえず部屋を出て、歩き出した。

「それじゃあ、行って来るわね」

「ああ」

「気をつけての」

「いってらっしゃいです〜」

「はあ、また袁術に何言われるのかしら……」

庭の方で今にも何処かへ行きそうな雪蓮を発見する。

「おーい、雪蓮 何処行くんだ？」

俺は雪蓮に声をかけた。

「あつ、龍牙 前に言った袁術の所に行くのよ」

そういえば袁術の客将になってるって言ってたな……。

独立する気満々だが……。

「よし、俺も行っていいか？」

「いや、お前の事は袁術には秘密にしたいからな。駄目だ……前に
もそう言ったがな」

「大丈夫、大丈夫 俺にはこれがある」

俺は懐から鏡を取り出す。

「テ○マクマ○コン、テ○マクマ○コン、冥林になあれ……ム ○
ミラ○ルパワーメイ○アツ○！」

俺は鏡を見ながらそう叫ぶ。

するとあら不思議！ 冥林になりました

服から体まで、当然同じだよ

ちなみに変身は鏡を一瞬で仕舞いながら、生々しい音を響かせて変
身したよ byナレちゃん

「……あはは」

「そういえばそうだったな……」

「これはまた……」

「龍牙さん凄いです」

俺の変身を見た事がある雪蓮と冥林は渴いた笑みを浮かべ、祭は呆然、穩は目を輝かせていた。

「というわけで、早く行こうぜ」

「そうね……」

俺と雪蓮は袁術の城へと向かった。

さて、袁術の城へ着くまでに数日前にあった事でも回想するか……。

「報告、黄巾党と所属不明の軍がこちらに向かってきています」

兵士の一人が言った。

「黄巾党は分かるけど……所属不明の軍か……とりあえず会ってみないとね」

雪蓮が立ち上がり、出かける準備をする。

「俺も行って良い？」

俺は聞いたのだが……。

「お前の事は秘密にしておきたいんだ……だから大人しく此処に居

てくれ」

冥林に止められた。

「それに私たちだけで十分よ」

「そうじゃ」

「ええー、何か面白そうなのに……良いじゃん、遠くから一目でも所属不明な軍を見るだけだから」

「それでもな……」

くそ……仕方ない。

「変わってあげた十日分の仕事」

俺はボソツと呟いた。

雪連の身体が強張る。

「半額にしている酒代と二カ月分の借金
祭が身体を強張る。」

「俺の世界の知識を纏めた本三年分とマッサージ三か月無料」

冥林と穩の耳が動く。

「そつね……遠くから見ただけなら良いんじゃないかしら」

「そうだな……」

「わしも賛成じゃ」

「そうですね……良いと思います」

話分かる人たちが良かった。

これって脅しと交渉だよね　byナレちゃん

話し合いの基本だよ？

というわけで俺たちは所属不明の軍に会うために外に出た。

俺は雪蓮と祭から5KM離れたところに居る。

二人より先に謎の軍を見つける。

一人は長髪の黒髪の女性、そしてもう一人は桃色のおさげをした髪
の……。

よ……幼女だああああああああああああああああああああ
ああ！

ひゃあ、もう我慢できない。俺は会いに行くぜ

駄目だ、コイツ早くなんとかしないと……b y ナレちゃん

はっ……危ない危ない……俺は約束は守るからな……ぶっ……。

俺は弓を構えると、黒髪の女性に向かって放つ。

矢は女の足元に突き刺さる。これぞフォーク撃ちだ。

矢ってそう撃つんじゃないよね？bynaレちゃん

「誰だ！？ 出てこい！」

女は叫びながらあたりを見回す。幼女も一緒に探していた。

「その部隊！ 所属と名を名乗れ！」

雪蓮が叫ぶ。

二人の女は雪蓮の方を見る。

「春蘭さまぁ……」

「くっ……仕方ない。私は夏侯惇。こちらは許緒。陳留州牧、曹猛徳のもとで將軍を務めているものだ!」

わおっ! 魏の将じゃん……。

以下、原作を見てねと言う名の省略。

作者の手抜き by ナレちゃん

ただ様子を見るに夏侯惇が馬鹿と言つのは何となく分かった。

俺は秘技? 15「心話」を使った。

「雪蓮、黄巾党探しに言つて来るな」

雪蓮は一瞬、辺りを見回す。

「え? 龍牙? あなた何処から……」

雪蓮は俺に問いかけた。もちろん声には出していない。

「心に話しかけてるんだ。それじゃあ言つて来る」

俺はその場から立ち去り、黄巾党を探しに向かった。

すぐに見つかった……さすがモブキャラ、姿は一話で会った奴らの使い回しだった。

俺は雪蓮に場所を伝えると、黄巾党から20KM離れた場所から様子を見る。

今日の俺は狙撃手だけ

しばらくすると、雪蓮と祭に先ほどの夏侯惇に許緒が来た。

協力することにしたようだな……。

俺は開戦の合図代わりに黄巾党に向かって矢を放つ。

見事額を貫いた。

そして、雪蓮たちを援護していく。

「おい、さっきから矢は誰が撃っているのだ？ 黄蓋も弓使いのよ
うだが、さらに遠くから放たれているようなんだが……」

夏侯惇は孫策に尋ねる。

「私の将よ……名はあかせないけどね」

「そうか……しかし、凄い腕だな」

「ええ……本当頼りになるわ」

飽きたあ、矢をチマチマ撃つのは生に合っていない……そうだ、この前作ったあれを試すか！

「龍牙の秘密兵器？ 4 デストロイヤー」

俺は弓を仕舞って、某ネコ型ロボットのように言いながら懐からアンチマテリアルライフルを取り出す。

うわー、時代無視のオーバーテクノロジーキタアアアアア……
ところで龍牙って○次元○ツケット持ってたんだbyナレちゃん

さあ、どうだろうね？

俺はデストロイヤーを構える。

「頼むぜ、デストロイヤー」

読者（お前たち）に解説しよう。

俺が今持っているデストロイヤーは、射程は50KM先にいる標的を狙い撃つことができ、連射機能を搭載して装弾数は30発という高性能な俺の頼れる相棒予定の銃である。

元々はアンチマテリアルライフルのバレットM82だった。

それを改造しすぎて、高性能な銃にはなったが代わりに俺以外誰も持つ事ができない重さになってしまった。

これ、ゾウ十頭分だしね

もう魔改造とかいうレベルじゃないよね byナレちゃん

俺は改造好きだからな。

スコープを覗く。（これも50KM先を覗ける高性能になっている）

そして、安全装置を外してセレクターレバーをフルオートにセット。

「雪蓮、そこから急いで引き上げて」

俺は心話を使う。

「え？ 何で？」

「良いから、良いから」

雪蓮たちは引き上げ始めた。

「さあ、デストロイヤー……お前の力を見せる ファイヤー！」

俺は引き金を引く。

凄まじき轟音が響き、弾丸が放たれる。

弾丸は黄巾党の頭を、手を、足を、身体のあらゆるところを破壊していく。

気がつけば破壊された死体が溢れた凄惨な場所になっていた。

うわー、凄くスプラッターだー。

雪蓮たちも固まってるしな……。

「おい、何だ！？……あれは！？」

「私も知らないわよ……」

孫策と夏侯惇はあまりの事態に呆然としていた。

「俺、先に帰ってるな……お疲れ」

龍牙の声がただ聞こえた。

……とまあ、こんな感じだ。

おっ……袁術の城が見えてきた。

さあて、袁術はどんな奴なのか……。

俺と雪蓮は城に入って行った。

「今話の俺は一味違っぜ」（後書き）

作者「真面目？」

龍牙「俺にとっては真面目だと思うんだが……」

ナレちゃん「どうなんだろうね？」

龍牙&ナレ「次回も見てね」

次回「ロリ最高うううう」

龍牙「その手で明日を掴め！」

作者「お前、やっぱり真面目じゃないな」

「龍牙、黄巾党退治に行く」(前書き)

龍牙「よっしゃああ、はっちゃけるぜ」

ナレ「うわああああい」

作者「何か急にテンション上がってるんだけど……」

龍牙&ナレ「それじゃあ本編スタート」

作者「あらすじは？」

「龍牙、黄巾党退治に行く」

よう、読者（お前たち） おはよう、こんにちわ、こんばんわ。

毎度お馴染み、神崎龍牙だ。

俺は今、冥林の姿で雪蓮とともに袁術の城に居る。

んじゃ、本編スタート

「あれ？ 何で周瑜さんが居るんですか？ 孫策さんだけを呼んだのに」

青い短髪の女が言う。

「大事な話のようだから………つつい気になって、来てしまった………駄目だったか？」

「いえ、孫策さんと周瑜さんの仲は知っていますし、確かに重要な話ではあるので別に良いですよ」

「それはありがたい」

俺は冥林を演じる。

青い短髪の女は確か張勳と言ったか………雪蓮から幾つか聞いているから分かるが………。

そして、張勳の隣には………。

金髪の長髪な………。

よ……幼女だああああああああああああああああああああああああ
ああああ

ジュルリ……ハア、ハア、ハア。

って違う、違う……オレホントウニロリコンジャナイヨ？

読^{みんな}者は信じないと思うよ byナレちゃん

えー、違つと思つのに……。

冥林をとにかく演じないとな。

「で？ 話つていふのは何かしら？」

雪蓮が問いかけた。

「うむ、それはじゃなあ……」

袁術が答える。

袁術は雪蓮に命令をした。

黄巾党の本隊を討伐しろという命令を……。

「ふむ、随分と無茶な事を言ってくれるな？」

俺は冥林を演じて言つ。

「なんじゃ、出来ないと言つのかの？」

「ええっ……そうよ」

雪蓮が答えた。

「なんと……最近民たちに英雄と祭り上げられているようじゃが、その期待を裏切るつもりかの？」

「そついうことを言つてるんじゃない、兵数が足りないから無理だつて言つてるのよ」

「ぐふっ！」

元の姿に戻った俺は倒れる。

「どうしたの！？ 龍牙！」

「久々に真面目モードだったから、反動が来た。十日は動けない…」

「え？」

「というわけで、俺は部屋に戻って寝る。」

そして、俺は十日をただ寝込んで過ごした。

雪蓮たちはその間に陣準備を整えていた。

そして黄巾党の本隊が居る冀州へと俺と雪蓮たちは出陣する。

俺は馬に乗っているのだが……。

「やっぱり、馬に乗るのは初心者俺には難しいぜ……なあ、雪蓮？」

「そ……そうね……」

「祭はコツとか知らない？ バランスとるのに苦労するんだ。揺れまくってな……」

「……」

「穏も馬に乗るの上手いな……尊敬するぜ」

「……そうでしょうか？」

「というわけで、馬の乗り方を教えてくれない？ 冥林」

「頼むから普通に乗ってくれ……」

「おう、分かった」

俺は馬の背中に指を一本だけ着け、それを支えに逆立ちして左足を横に折り曲げてから右足を真っすぐ伸ばしてその上に球を乗せた状態から普通の乗り方をする。

何で、そんな乗り方を？byナレちゃん

暇だったし、馬乗り曲芸人と言われた血が騒いだからだ。

「穩。蓮華達はいつ合流するって?」
軍議が始まった。

「兵を集めてから合流するらしく、少し時間が掛かるとのことでした。」

「そう……。ならば初戦は私達だけね。」

「連れてきた兵は多くない……いきなり敵本隊と戦うことは出来ぬのお。」

祭が呟く。

「頼まれれば全滅させてやるぞ?」

デストロイヤーとアルマゲドン（改造RPG）とエンド・オブ・ワールド（改造手榴弾）を使えば終わりだぜ

恐るべき現代兵器の力だね byナレちゃん

「敵本拠地の周辺では、諸侯の軍も動いています。まずは出城に籠っている黄巾党を処理しましょう」

「その後、諸侯の軍と足並みを揃えて本拠地に迫れば、この兵数でも何とか出来ると思いますよ」

「そんなことしなくても金さえくれたら全滅……」

「頼むから暴れないでくれ」

冥林がそう言った。

「えー、そんなの退屈じゃないか」

「……頼む」

冥林がため息を吐きながら言った。

「えーっと、方針はさっきの冥林と穩の意見で行くわ」

「了解した」

「はい」

「では、そろそろ軍を止めて昼にしようかの」

「わーい、お昼お昼」

「よっしゃあ、ピクニックだぜえええええ」

俺は懐から箱を出す。

「さあ、皆、俺の特性料理だ。食べてくれ」

「わあ、龍牙さんの料理美味しいからどんなのが楽しみですよ」

「まあ、そつだな」

「確かにの……」

「じゃあ、龍牙……一緒に食べましょうか」
俺は雪蓮に手を引かれる。

「ん？、ああ」

俺は雪蓮と一緒に何処かへと向かった。

俺と雪蓮は澄み切った青空の元、俺の特製弁当（おにぎりやサンドイッチ、玉子焼き、ウインナー、鳥の唐揚げなど基本だが腕をかけて作った料理だ）を食べた。

「おいしい、龍牙って本当に何でもできるのね」

「ははっ、もっと褒めてくれ」

「龍牙は何食べてるの？」

「チョコレートパフェっていう甘いお菓子みたいなものだ」

「おいしそうね……ちょうだい」
孫策が笑いながら言う。

「イヤだ」

「良いじゃない、くれたって……」

雪蓮が不機嫌になる。

俺は頭を撫でた。

「ん」

雪蓮は気持ちよさそうな顔をする。

「この戦が終われば作ってやるよ」

「本当に？ 約束よ」

「ああ」

「ところで、誰かここに来るのか？ 何か話したい事ありそうだが？」

俺は雪蓮に尋ねた。

「え？ ええ、そうね……もう少ししたら私の妹が合流するんだけど……」

「妹？……それって孫権か？」

「そ……あれ？説明したっけ？」

「俺は何でも知っているからな……」

「ふーん、それでね。妹の事なんだけど……ちょっと真面目過ぎだし、カタブツっぽいところもあるけど、とっても良い娘よ。可愛いし、おっぱいも大きいし、お尻の形も最高だし」

「待て……俺が客将だという事忘れてないか？」

「え？」

「正式に孫呉にとっての天の御使いになれば種馬をしなければいけないだろうが……あいにくと客将だからな……魅力的な紹介されても困る」

「ええー、街じゃ楽しそうに暮らしてるし、私たちと居るのも嫌じゃないんでしょ？」

「まあな……だが、お前の誘いには答えられない」

「どうして？」

「秘密だ……いずれ話してやるよ」

「むー、交流くらいはしてよね」

「ああっ、勿論だ」

「絶対に龍牙を孫呉の御使いにするから」

そういって走り出して去って行った。

食事を終えた俺たちは再び行軍を始めた。

「なあ、冥林……俺って戦場に出ちゃダメなの？」

「そうだな……先ほどから考えていたのだが……出ても良いかもしれん……お前はまだ客将なのだろう？」

「ああっ、俺はそのつもりだ……天の御使いなんて名乗るつもりもないしな」

「そうか……てっきり、孫呉の御使いになってくれるものだと思っていたのだが……客将なら心配は無いだろう。その力存分に使わせてもらうぞ」

「ああっ、任せろ……それと悪いな……」

「いや、気にする必要は無い」

「そうか……お詫びに冥林には話すとしよう……実はな……」

俺はある事を語った。

「な！？ それは本当なのか！？」

「ああっ……」

「雪蓮には言ったのか？」

「いずれは話すと」

「分かった……確かにそれならば雪蓮の誘いに応じないのも納得がいく。」

「本当に悪い」

「ああ……だが、辛くは無いか？」

「どうだかな……気にかけてくれてありがとうよ」

「……そろそろ斥候が戻ってくる。戦闘準備に取り掛かるうか」

そして俺たちは斥候を待った。

斥候が戻ってきて、俺たちに報告する。

「前方に黄巾党の分隊を発見しました！ 向こうもこちらに気付いているようで、城を出て布陣するつもりなのですが、孫策様が……！」

「孫策がどうした？」

「前線部隊を率いて先行してしまって……！」

「何っ！？」

「わお 総大将が先行とか、まるで数日前に黄巾党に釣られクマーしたどっかの猪武者みたいだな」

「まったくだ……世話の焼ける……！」

「ねえねえ、おしおきしてごようか？」

「何？……ほどほどにな……」

「了解」

そして、俺は走った。

目の前に雪蓮の牙門旗を発見した。

雪蓮は黄巾党と戦っている。

さあて、どんなおしおきしようかな？

俺はそれを見ていたが……ある事実を思い出した。

「そついや、あのときの借りは返してなかった……忘れてたわ」

俺は右手に黒い手袋を着ける。

これには○弦系以上の切れ味の鉄鋼糸を数千本仕込んである。

「糸、張り張り、糸、張り張り」

伸ばして伸ばして張りましょう」

俺は歌いながら、糸を伸ばして周りに展開していく。

「ようし、できた」

そして、指を動かして糸を思いっきり引っ張った。

その瞬間、戦場に居た黄巾党の身体は見事に分断された。

「わーい、またスプラッターだ」

雪蓮の動きが止まって、辺りを見回す。

俺はライターを懐から取り出す。

実は糸には油が塗ってあるんだ。かなり強力な奴……。

何かすごい嫌な予感がするよ byナレちゃん

「雪蓮！ 10数えるから早く戻ってきてね」

雪蓮は急いでこっちに向かって来た。

「10……ひゃあ、もう我慢できない、○物は消毒だあああああ
あああああ」

俺はライターで糸に火を着ける。

ちなみに糸は手袋から外したよ。

火は一気に燃え広がって黄巾党の血と死体を燃やす。

「ちよつとー!?!」

雪蓮は燃え広がる炎の中を突っ走る。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

雪蓮は息を切らしていた。

「これで俺の気持ちがあつただらう？ どうだった？ 戦ってたら火計に巻き込まれた気分は？」

「え？……あなたまさか……」

「まだあのときの事謝られてなかったな……」

「でも、それは……」

「謝って」

「謝ってほしいのは私の方……」

「謝って」

「あれは冥林の策で……」

「うん、分かってる。謝って」

俺は手袋から糸を出し、ライターを見せる。

「謝って」

俺は笑顔で言った。

「御免なさい」

雪蓮は深く頭を下げ、謝る。

「うん、許す」

俺は手袋とライターを懐に入れた。

鬼畜外道だね byナレちゃん

え？ そう……もつと褒めて。

もつ、何も言えないやbyナレちゃん

さて、炎の処理しないと……。

俺は炎に向かって歩き出す。

「龍牙!？」

秘技?100「熱エネルギー吸収」を発動。

炎は俺の元へ集まってきた。

両手でそれを抱えるようにして、大きい火の球となる。

それを俺は飲み込んだ。

「ふむ、なかなかだな」

「そんな事が出来るのなら、何であの時もそれをしなかったの?」
雪蓮が俺に問う。

「え?……あつ!」

「まさかとは思っけど……」

「まあ、腹が減っていたのもあって存在を忘れていたよ」

「あはは……もう良いわ」

しばらくすると、冥林たちがやって来た。

「冥林ー 龍牙が私を虐めるー」

「諦める……私には止められん」

違うな……俺はだれにも止められない。

自分で言つてごじやないよね　りりちゃん

「そして、雪蓮よ……お前には言わなければならぬ事があったな
?」

「もしかして……」

「ふふっ……」

そして雪蓮は冥林にお　し　お　きならぬお　は　な　しをされた。

ちなみに祭もである。

俺？　俺はそれを見て笑つたよ。

人の不幸は蜜の味ってね

うわお、とことん酷いやりりちゃん

「龍牙、黄巾党退治に行く」(後書き)

龍牙「今回はスッキリしたぜ」

ナレちゃん「良かったね」

作者「お前と言う奴は……」

龍牙&ナレ「次回もよろしく」

次回予告 「私とあなたでシャルウィーダンス」

龍牙「イエス、フォーリンラブ」

作者「ははっ……」

「初対面は印象が大事」（前書き）

龍牙「今回はどんな話かな？」

ナレ「楽しみだね」

作者「どうなるんだよ……これから……」

龍牙&ナレ「さあね、本編の始まり、始まり」

「初対面は印象が大事」

よう、読者（お前たち） おはよう、こんにちわ、こんばんわ。

今、俺は黄巾党退治をしに冀州に居る。

それじゃあ本編はっじまるよー

俺たちは今、孫権との合流を待っていた。

おっと、砂塵が見えてきたな。

「後方に砂塵あり、ですー。どうやら蓮華様達がやってきたみたいですよー」

「さすが蓮華様だ。蒼天中央に日輪が至る刻に……という合流時間をしっかりと守ってくれているな」

「そういう融通の効かなさが、心配ではあるんだけどねえ……。」

「ほう、要するに規則正しいんだな……それって本当に雪蓮の妹なのか？」

「それ、どういう意味よ」

「雪蓮は凄い自由奔放じゃないか」

「うっ……」

「蓮華様が雪蓮と同じ性格だったら私の身が持たないだろうな……」

「性格反対で良かったね」

「まったくだ」

「ちょっと、冥林」

「まあ、色々と言いはあるじゃろうが……孫家の人間として頑張っておられる御方じゃよ」

「なるほどな……」

そして、こちらに向かってくる牙門旗がピタッと止まり、人影がこちらに走り寄ってきた。

人影は雪蓮と同じ桃色の長髪で、頭には何？あの飾り？ハンガ―？ってか重くないの？をつけた女だった。

これが孫権か……。

「お姉様！今、報告を聞きました！ 単騎で敵陣に突入するとは、どういふことですかっ！」

「うわっ……。」

「あなたは孫家の家長にして呉の指導者！ それがこんな戦いで蛮勇を振りかざしてどうしますっ！」

「し、ごめんなさい……。」

孫権はこちらに向かってきてすぐに雪蓮に怒鳴る。

「あはははは……あ……あれが孫権か？」

ようやく笑いが収まり、俺は冥林たちに聞く。

「ああ、雪蓮の妹にして孫呉の後継者だ」

「確かにカタブツだな……いや、王の後継者という立場を意識しすぎて無理に力をいれてるせいか……」

「ほう、分かるか？」

「ふっ……俺の観察眼は世界一だぜ？」

これぞ奥義？1379「完全観察」

「そうか……だが、器で言えば、恐らく雪蓮よりも蓮華様の方が上だろうな」

「英雄に相応しい器と能力を持っておられる。後は経験だけといったところかの。」

「皆に愛されてる、素晴らしい御方ですよ」

「それに本当の蓮華様はお優しい方だぞ」

ふーん、凄い高評価だな。本当に交代した方が良いんじゃないの？

それにしても俺、めっちゃスルーされてるな……よし、良い事思いついた。

○タック○イド ○ンビジ○ル

俺は秘技？128「気配、認識消去」を使った。

これがあればいついかなる時でも神出鬼没を演じれる。

自分の存在を完全に相手に認識できないようにして、その気になれば人の記憶から存在した事実や接触した経緯をも消すことが出来る

という秘技だ。

ちなみに発想の元は○だか○ツク○の○られざる○雄からだ。

龍牙って○尾○新好き？

まあ、秘技の参考にしてるぐらいは好きだな……。

俺は孫権に近づく。

「ところで……あなたに紹介したい人がいるんだけど？」

「確か天の御使いで、客将をしているんですけどよね？」

「そうよ……あそこに……」

雪蓮は龍牙が居る方向を指差した。

「誰もいませんが？」

「あれ！？……龍牙？」

冥林たちも気付き、辺りを見回す。

しかし、龍牙の姿はどこにも無かった。

「？」

孫権は肩を叩かれた気がして、後ろを振り向いた。

「バアツ！」

「きゃあ！？」

突然何者かが叫ぶ。

孫権は驚いて、尻もちを突いた。

何者かは龍牙だった。

イエーイ、ドツキリ大成功

何故か皆、啞然としてるけどね……。

「やあ、びっくりした？ 俺は……」

ナレちゃんを呼んで自己紹介しようとしたのだが……。

鈴の音とともに殺気を感じて、俺は後ろに身体を逸らす。

紙一重で首狙いの斬撃を避ける。

「ちよつ、危ねえだろ!? さっきのはどう見たって冗談だろうが
!」

「黙れ!」

紫の髪を布で結んでいる女が逆手に持った鈴付きの剣で俺の首を狙って剣を振る。

鈴と言う事は甘寧か……。

俺は剣撃を避け続ける。

くそつ! 冗談も通じないとか、一体どういう事だよ!? 普通は笑って過ごす場面だろ。

訳が分からない……。

僕には龍牙が分からないよ byナレちゃん

えーい、埒があかん……冗談も通じない奴にはおしおきだな

「があっ！」

俺は叫んだ。

「なっ！」

俺の首を狙って剣を振り続けた甘寧らしき女は吹っ飛んだが、着地して態勢を整える。

秘技？456「声撃」

俺は声も武器にして戦う事が出来る。

「さっきのは手加減して放った。普通ならお前を破壊しているところだな……」

「何だと！」

甘寧らしき女は又、向かって来る。

頭に血が上ってるな……見た目からして隠密だとは思っただが……。

俺は女が向かって来る前に、ある物を掴んでいた。

そして、親指でそれを弾く。

「くっ！」

「ほう、よく見えたな」

女は俺が放った物に気付いたのか、剣を振るった。

俺が使っているのは指弾だ。

指の力で弾いて、弾丸の如く飛ばして使う小さい鉄球の暗器。

俺はそれを放ち続ける。甘寧らしき女はそれを弾いたり、避けたりするの**に**必死でその場から動けない。

俺は秘技？128「気配、認識消去」を使い、右に走る。

「どこへ行った!？」

甘寧は辺りを見回して、龍牙を探す。

そして、耳に鈴の音が聞こえた。

「そこだ！」

甘寧は音が聞こえた方向に剣を振るうが……。

「うっ！」

異常な重さが伝わり、剣が手から離れる。

頬を何かが掠めて、鈴の音が鳴る。

そちらを見やる。

岩に鈴付きの剣が突き刺さっていた。

「こつちだ！」

「ぐあっ！」

声とともに背中に大きな衝撃を感じて、甘寧は倒れた。

俺は○甲○用を使って鈴付きの投擲用の剣　飛剣を甘寧に向かって投げた。

ちなみに飛剣は投げナイフより少し大きいぐらいだ。

甘寧はそれに向かって、剣を振るうが弾かれた。

まあ、そのおかげで軌道をずらすことに成功したようだが……。

本気で投げてないしな……。

俺は甘寧の背中にドロップキックをくらわすと、倒れた甘寧の背中を左膝で押さえてから右腕を持ちあげて手首を捻る。

「音と言つのはああやって使うんだ……殺気も気配も完全に消さないと意味が無いが……ちなみに速さ的にはお前と同じぐらいだぞ？」

「くっ……」

「それと主のために怒ったのは分かるが、相手の力量を見抜くのは大事な事だ」

「……」

少しは落ち着いたかな？

「もう、襲ってこないな？」

「ああっ」

甘寧らしき女は頷く。

俺は甘寧らしき女を解放した。しかし、目はまだ怒りに燃えていた。

「んじゃあ、気を取り直して……ナレちゃんパート3で行くぞ」

はい、はい（*・・*）／

俺は後ろを向く。

「男は思う……自分はなぜ生まれたのかを……」

『！?』

雪蓮たちは突然聞こえてきた声に驚き、辺りを見回すが誰もいない。

「そして、日々を暮らす中でその答えを見つけた」

よし、後は俺だな。

俺は外套を翻しながら振り返る。

「つまらない日常を、刺激のある楽しい日常に変える。自分も他人も人生は楽しむもの、そうじゃなきゃあ意味が無い。人生の道化人はそのためなら皆の悩みを助けます……猫探しから暗殺まで何でもござれの何でも屋……ただしお金は頂戴ね 皆の頼れる隣人で救世主で今は天の御使いで呉の客将の俺様は神埼龍牙だああああああああああああ」

俺は空に向かって右の人差し指を突き上げる。

背後では爆発が起きた。

よし、また決まった

やったね 〵(^ ^ *) /

雪蓮たちは唾然として固まっていた。

「こんなのに私は……」

誰かが呟いたけど、気にしない 気にしない

「貴様が天の遣いと言われている男か？」

孫権らしき女が俺に向かって言う。

「そつだよ 宜しくな……で？ 俺の後ろに居て隙を窺っているきみはこつちに来ないのか？」

俺は後ろを振り向く。

「！」

後ろに居たのは、長い刀を背負ったまるで忍者みたいな黒髪の長髪の女だ。

○國○双の通りなら周泰だな……。

周泰らしき女は驚愕の表情で、俺を見る。

俺は手で孫権らしき女の側に並ぶよう合図した。

そして、周泰らしき女は孫権らしき女の側に並ぶ。

「これで集合は終わりか？ 雪蓮？」

「ええ、そうよ……」

「貴様、姉様の真名を！」

孫権らしき女は叫ぶ。

「良いの。 龍牙には真名を呼ぶ事を許してるわ……それに冥琳と祭に穏もね。」

「な！」

孫権らしき女は驚いた。

「確かに力はあるでしょうが……真名を預けるに値するやつでしょうか？ 私には人間として問題があるとしたか……」

甘寧らしき女が言う。

「うわぁ 酷い言われようだな……」。

実際僕もそう思うよ b y ナレちゃん

あーん、ナレちゃんまで……。

「そうですね……公謹様達が真名をお許しになったことに、少し違和感があります。どういふことでしょうか？」

周泰らしき女もそう言う。

「ふむ……確かに性格には問題があるが、龍牙には力もあるし……頭も良い。それに裏切りなどの心配も無いしな。孫呉にとって大きな助けになっている。」

「私や祭も勝てないくらい強いしね」

「そうじゃな……」

「私も暮で負けたな……」

「それに文字も数時間で覚えましてし」

三人は雪蓮たちの言葉に信じられないという顔をしていた。

「さあさあ、もしかしたら将来あなたたちの夫になる人物かもしれないんだし……自己紹介しなさい」

ちよっ！？、雪蓮、おま……。

『ええ！？』

三人は雪蓮の核爆弾に匹敵する一言に今話一番の驚愕の声を上げる。

「言っておくが、確かに孫呉の御使いになればそういう条件だったが……客将だから雪蓮が言うようなことは無いからな」

「もう、龍牙」

雪蓮は不機嫌になるが三人は俺の言葉に安堵する。

「姉様……勝手に私たちの意思を無視して何という約束をしようとしたのですか！」

おおっ！ やっぱり怒ったか。

「無視するわよ。特に蓮華……孫家の人間であるあなたの意志はね。孫呉が強国にのし上がり、天下を目指すためには兵が要る。資金が居る。それを得るために必要なものは、庶人の口から放たれる風評の矢。母様の夢、孫呉の宿願……呉を独立させ、天下統一に乗り出すためにも、龍牙の力は必要なんだけどね……。」

不機嫌な顔でまた俺を見る。

「……ずるい。ずるいですよ、お姉様……母様のことを言われたら、私は何も言えなくなるではありませんか。」

「知ってる。だから母様の名前を出したの。だけど安心しなさい。……強制ではあるけれど、本気で嫌がるのなら無理はさせないという条件は着けていたのよ。まあ、とにかく三人は名乗りなさい……」

…もちろん真名もね。お互いを知り合うのは大事なことよ？」

「公謹様、幼平。2人とも良いな？」

雪蓮と冥林がそう言つと、甘寧と周泰は……。

「……は。」

「は、はい。」

と言つて頷き、孫権も黙りながらも頷いていた。

そして、最初に周泰が歩み寄ってきた。

「あの……私は、姓は周、名は泰、字は幼平、真名は明命！龍牙様、よろしく願います！」

「おう、俺は姓は神崎に、名は龍牙だ。字や真名は無い。別に畏まらなくても気軽に読んでくれていいんだぜ？」

「いえ、そんな……」

明命は首を振りながら言う。

「そうか……まっ、よろしくな」

俺は手を差し出した。

「……あ、えと」

明命は戸惑う。

「握手だが……嫌か？」

「いえ！で、では僭越ながら……」

明命はゆっくりと俺の手を握る。

「今は孫呉のために頑張るつもりだから、仲間としてよろしくな」

「はいっ！」

明命は明るい笑顔で元気に返事をする。

うわぁ、めっちゃ可愛い子だ。お持ち帰りしてえええええ。

とにかく和んだわ。

次に甘寧が歩み寄る。

「……我が名は甘寧。字は興覇。王の命令により真名を教えよう。思春と言っ」

「おう、さっきは俺もふざけすぎた……悪かったな」

「いや、私ももっと冷静になって相手の力量を見るべきだった。良い勉強になった。」

「そうか……よろしくな」

「よろしくするかどうかは孫権様次第だな……」

そう言っと、握手のために俺が差し出した手を一瞥した思春は、孫

権の後ろに退いた。

ふむ、この世界じゃ周泰では無く甘寧が忠義の士か……。

「分かった。　んで、孫権だったか?……」

俺は歩み寄ってきた孫権に言う。

「何だ?」

「今の俺はお前からしたら、どう見たって不審な人物だろうし……
印象も最悪だろう……だから大切な真名を預ける必要は無い。」

「……」

「だが、少しは俺の事を見てくれ……見て、聞いて、考えてから俺
の事を判断すれば良い。

その中で俺が信用できると判断したならそのときに真名を預けてく
れ……だから今は……」

俺は孫権に手を差し出す。

「自己紹介と握手から始めようぜ。仲間とは思えないだろうが、雪蓮たちの力になりたいという思いは本当だ。その事は分かってくれ……お前たちとは仲良くしたいからな」

俺は真つすぐに孫権の瞳を見つめる。

嘘では無いと分かってもらうために。

「……会ったばかりの人間の気持ちなど、見透かすことは出来ない。だけど冥琳達が私に嘘を付く筈は無い。だから……間接的には認めてやるぞ。」

孫権は顔を赤くして、動揺しながら言う。

「握手は……しない。その……そういうことには慣れていないから……。」

そう言って頬を赤くして目を逸らした孫権は、スツと後ろに下がっていく。

うはっ！ なかなか初心ですな！。 たまんないぜ。

なんか台無しになってない？b yナレちゃん

「さて……と。自己紹介はこれでお終い。部隊の再編成をした後、すぐに出発しましょうか。」

雪蓮が場を収めた。

「そうしよう……興覇、幼平。お前達2人は黄蓋殿の下につけ。」

「はっ。」

「はいっ!」

冥林の指示に明命と思春が頷く。

「では2人には部隊の再編成を行ってもらおうか。真中は僕の部隊じゃ。2人は僕の両翼につけ。」

「了解しました。後曲はどのように配置します?」

思春は言う。

「後曲中央に雪蓮の部隊を。右は私の部隊がとる。左は穩が取れ。」

それに答えたのは冥林。

さすが軍師だ……テキパキしてやがる。

「待て、では私の部隊はどうするんだ」

孫権が慌てたように言うが……。

「蓮華様は後曲の後ろ、輜重隊を護衛すると共に、遊軍として待機しておいて下さい。」

「……分かった。」

冥林はすぐさま指示をする。

やっぱり、ガチガチなのか……。

俺が孫権をぼんやりと見ていると……。

「龍牙は私の横に居てね。」

「え？ 俺 自由に行動したいんだけど？」

「龍牙を自由にしたら大変な事になるから駄目よ」

くっ……良く分かってやがる……。

扱いを危険物並みにしないと駄目だしね。b y ナレちゃん

「では部署割が決まったところで、再編成に移る。一刻後には出発するぞ。」

冥林がそう言う……。。

「応」

「はっ」

「はい！」

「はい」

皆が返事を返して、進軍を始めた。

「初対面は印象が大事」(後書き)

龍牙「あー、自己紹介決まってる良かった」

ナレ「やったね」

作者「おいおい……」

龍牙&ナレ「次回も宜しく」

作者「はあっ……」

次回「映画って良いよね」

龍牙「やっぱり505とダールの映画版は最高だと思っんだ……」

作者「同意だけど、関係無いだろおおおおおお！」

「龍牙、映画監督になる」(前書き)

作者「タイトルどついう事なの!?!」

龍牙「ふふっ……全米が熱狂する作品を作つてやるぜ」

ナレ「頑張つてー」

龍牙&ナレ「本編始まるよー」

作者「これからどつなるんだ……」

「龍牙、映画監督になる」

よう、読者（お前たち） おはよう、こんにちわ、こんばんわ。

今、俺は黄巾党退治をしに冀州に居て、雪蓮の妹の孫権に、周泰の明命に、甘寧の思春に会って自己紹介を済ましたところだ。

それじゃあ本編はっじまるよー

孫権たちと合流を果たしたことにより兵力を増やした俺たちは、初

戦に勝った勢いのままに黄巾党本隊が籠る城に向かって、進軍していた。

「それと……」

俺は白地に黒の龍の字が書かれ、周りを赤い文様が書かれた旗を馬に括りつけた。

俺の直属の兵士いないから持ってくれる人が居ないんだよなあ……。

まあ、客将だからしょうがないか……。

「なあ、冥林……俺じゃなく、雪蓮たちが手柄を取るようになるからさ……それなら多少は暴れて良いよな？」

俺は冥林に問いかけた。

「多少はな……」

「んで、思うだけさ……此処に居るのは皆が皆、名声を欲して居る諸侯たちだが……当然連携なんてあったもんじゃない……。」

「今の状況が分かるのか!？」

「ああっ……」

「そうか……続けてくれ」

「分かった……諸侯は名声を欲しているも自分の部隊だけでは戦いがきついのは確実だ。だからといって正直に連携をとりましようとか他者と連携を取ろうしたら功の旨みは無い。けれど他者を利用しないと勝てないことを諸侯たちは分かっている。」

「ふむ……」

冥林は頷き、俺は続けた。

「そして諸侯が考えるのは……周囲の状況を調べ、諸侯の部隊が集まる時機に合わせて参戦して、隙を見て、敵大将を討ち取り、名を上げる事だ。」

「そつだな……」

「そして……そついった諸侯の考えが暗黙の了解となっている以上、俺たちが取る策はただ一つ。」

「それは？」

冥林は不敵に笑って言う。

「一番最後に参戦して、美味しいところは全て掻っ攫う事だ。……俺はそういうのが一番好きなんだが、どうだ？ 冥林も当然そついう考えなんだろう？」

俺も不敵に笑って言う。くくっ……腹黒いぜえ

龍牙って鬼畜外道だからね byナレちゃん

おう、こういう方面には頭が働くんだけ

自慢にならないよ？ byナレちゃん

「驚いたな……正解だ」

うわーい、百点満点だ

良かったね byナレちゃん

「くくつ……諸侯たちが悔しがる様が目に浮かぶぜ」

「そうか……それは何よりだ」

冥林と俺は腹黒く笑いあう。

なんか視線感じるが……孫権か……まあ、いいや。

そして、俺たちは黄巾党の本拠地に着いた。

そこで目にした物は、巨大な敵城を囲むように配置された諸侯の軍勢。

劉の旗と曹の旗が見えた。

劉は劉備で、曹は曹操だろう。

劉備のところには関羽がいるから近づきたくないし、曹操の所には夏侯惇がいるからちよっかいをかけたが……今は孫呉の客将だから我慢しておくか。

勝手に動かないと約束してるしな。その代わりにその分金貰えるし。

「くくっ……皆、名声を得ようと必死だな……この景色だけなら壯観だが……」

「曹、袁、公孫、それに劉。……良い感じに集まってるわねえ。」

俺が言つと、雪蓮も眩く。

「計算通りだな。これだけ集まっていれば、敵とは互角に戦えるだろう。」

「じゃが儂らの参戦する場所が無ければ、功名も立てられんぞ？」

冥林と祭も言った。

「祭の言う通りね。……諸侯の軍勢が集まっている以上、時間を掛ける訳にもいかないし。」

「かといって、力攻めだけでは落ちんじやろ。」

「そつよね〜。……どうする冥琳？」

「俺に任せてもらえれば一瞬だが……まあ、お前たちの方が多く手柄を取れるように、ほどほどにしておくわ」

「ああつ……穩、確か城内の地図があつたはずだが？」

「ありますよ〜 もともと大守さんの持ち物だったお城ですからね

……はい、これです〜」

「すまん……」

俺は何となく空を見上げていた。

さーて、どつやって暴れようかな？

そんな事を考えながら……。

雪蓮たちはどう攻めるかで軍議をしていた。

俺は遠くですつとどう暴れるかを考えていたが、途中「めんどくさ

いから真つ正面から突入しちゃうよ〜」といった雪蓮の意見と「
うむ、策殿に賛成だ」という祭の意見が聞こえた。

猪武者すぎるだろ……冥林じゃなかったら、終わってるだろうな……
ってかめんどくさいとか軍議する意味無いじゃん。

「何を馬鹿な事を言っているのです、二人とも。夕子の悪い冗談を
言っている場合じゃありません」

孫権が怒った。

「結構本気なんだけど……」

「なお夕子が悪いです」

うわぁ　本気とか、もうキング猪武者だな

王さまだけに？byナレちゃん

まあ、そうだね……うまいでしょ？

僕には分かんない　byナレちゃん

「……龍牙」

冥林に呼ばれ振り返る。

雪蓮が　（）……（）な顔してる……何でショック受けるんだ？

「何？」

「お前の意見を聞かせてくれ」

「意見？」

俺は冥林たちに近づき、城内の地図だろう……それを手に取ると……

「ちょうど、鼻をかみたいと思ってたところだ」

「な!？」

鼻をかもうとしたが……。

「冗談だ、冗談……」

「お前の冗談は冗談になってない」

思春が俺の首に剣を突きつける。

「じゃあ、この倉っぱいの焼く？」

俺は城から離れている建物を指差す。

「ほう、なぜだ？」

「倉には兵糧とか大事な物があるだろう。良く見りゃ、こことか死角になってるしな……」

「あつ、そう言われれば……そうですね」

「でも、一体どうやって？」

明命が問う。

「そこは俺に任せな……今から焼いても良いが……それじゃあ、天の御使いがいるとか思われそうだから、夜に夜襲を仕掛けよう」

「貴様に出来るのか？」

思春が問う。

「当然だ……お前たちも隠密だろう？ なんなら俺と一緒に行くか？ 本当の穩密というのを見せてやるからさ……」

「その言葉嘘じゃないな？」

「俺は嘘を吐かない主義なんで……」

「分かった……明命……」

「はいっ……」

思春と明命は俺と一緒に行動することにしたらしい。

「悪くない……ならば、祭殿。諸侯の軍が引き上げた後、部隊を正門に集結させて下さい。」

俺の案が採用され、冥林が指示を飛ばす。

「ふむ。それは良いが……夜襲を掛けるのか？」

「掛けるフリだけで結構。奴らの目を正門に惹き付けるのが狙いです。」

「成る程。囿になる訳か。」

「ええ。その後、龍牙と興覇と幼平の部隊が城内に侵入。放火活動を行います。その状況に合わせて、祭殿は雪蓮と合流し、混乱する城内に突入する。……これでどうかしら？」

作戦を提示して、冥林が俺達を見渡す。

さすがは呉が誇る天才軍師の策だ。

文句など出る訳がない。

「良いんじゃない？ワクワクしちゃうわ。」

雪蓮もノリノリだ。

「し、しかし……絶対に成功するという保証がない以上、お姉様が前に出るのは反対です！」

保障ねえ……そんなもん戦にあるわけがないのだが……やはり王としてはまだ未熟だな。

「蓮華。戦に絶対は無い。……それぐらい分かっているでしょ？」

「しかし……母様が死んだ時と、状況が良く似ていて……。」

姉思いなのは分かるんだがな……。

「城攻めの時に私が死ぬかもって？ 無い無い。……私が指揮するのは突入部隊だけ。城攻めの指揮は祭に任せるもの。」

「うむ。承った。」

「ね？だから安心して私の背中を見ておきなさい。……孫呉の王の戦いぶりをね。」

雪蓮も甘いな……姉妹愛としては素晴らしいけどね

孫権は雪蓮の言葉に頷いていた。

「聞き分けの良い子は好きよ。……じゃあ蓮華は後方に下がっておきなさい。」

「はい……。」

「思春、明命。2人はすぐに精鋭部隊を編成し、作戦を検討しておいて。」

『御意』

「祭と私はしばらく待機。……冥琳達はどつするの？」

「穩は蓮華様の補佐を。」

「了解であります」

「私は雪蓮たちが突入したあとの総仕上げを行う」

「龍牙、頼りにしてるからね」

雪蓮が俺に笑顔で言った。

「ああ、泥船に乗った気持ちでいてくれ」

「それ、安心できないわよ？」

「そうか？……俺の泥船は他のどんな船よりも立派で、頑丈だぞ？
それに俺は頼まれた仕事は完ぺきにする。まあ、見ててくれ」

「ええ、見させてもらっわ」

そして、俺たちは陣地を構築して、夜を待つ。

時間は過ぎ去り、夜になった。

作戦開始まであともう少しだ……。

やっぱり小説だと時間経過早いよねえー

それが小説だしね byナレちゃん

さて、隠密だし……ここはプロデーターごっこ洒落こむか。

俺はただ、どう楽しむか考えながら鈴を着けた双剣を振りながら舞う。

綺麗な月だしな……。

「……何をしているの？」

孫権が俺に声をかける。

顔を赤くしているのは何故だ？

「ん？ どう戦いを楽しむか……考えながら舞を待ってた。綺麗な月だったしな……」

俺は双剣を仕舞う。

「戦いを楽しむ？」

孫権が首を傾げる。

「そつ！ 言つたる……俺は日常を楽しく過ごしたいんだ。それは戦いのときでも一緒だな……」

「そう、凄いわね……戦いを楽しむなんて……」

「ああつ、孫権はどうしてここ此処に来たんだ？」

「わ、私は、その……」

孫権はまた顔を赤くしてもじもじしていた。

「……これが私の初陣なんだ。緊張して何が悪い！」

「そうか……なあ、孫権？」

「何だ？」

「お前は日常を楽しんでいるか？」

「楽しむだと？」

「ああつ……お前は日常に満足しているかと聞いているんだ……」

「それは……勿論」

「俺には……お前が無理してるようにしか見えないし、日常に満足しているようには見えない……口調もさつきから無理に直してるしな……まあ、公私の場で分けるのは悪い事ではないが……。」

「私は王の後継者なのだ……そんな私が毅然とした態度でどうする
！」

「孫権、お前はどんな王になりたいんだ？」

「え？」

「一体、どんな理想を持って王になりたいのか聞いているんだ」

「私は姉様のような……」

「雪蓮と同じようやりかたで、王になると？ 違うな……それではお前は王にはなれないぞ」

「私を侮辱するのか！」

「じゃあ、聞くが……お前は雪蓮と同じぐらい強いのか？」

「それは……」

「そうだろう……人はそれぞれ違う。例え、お前が雪蓮と同じやり方で王になるうとしても……それは叶わない」

「……」

「雪蓮には雪蓮の……孫権には孫権のやり方がある。」

「私の……やり方……」

「そうだ……まずはそれを見つける……そして王になったときに、俺に見せてくれ。お前のやり方をな……」

俺はそう言いながら、孫権の頭を右手で撫でる。

「あっ……」

孫権はくすぐったそうに撫でられていた。

「まあ、その前に少しは肩の力を抜け。俺や雪蓮のようには言わないが……じゃないといつか潰れるぞ？」

「……分かった」

「よし、んじゃあ……まずは黄巾党を討伐しないと……そうだ、安心しろ孫権。お前は俺が守ってやる……だから緊張しなくていい」

「なっ!……」

孫権は顔を赤くしていた。

俺は歩き出すが……。

「龍牙……」

「ん?」

孫権に呼び止められた。

「その……ありがとう。私は自分のやり方で王になるつもり。」

「そうか……俺はお前の素の口調の方が好きだぜ?可愛いしな」

「……ふんっ」

孫権はそっぽを向くが、耳が真っ赤になっている。

シンデレラですね。ありがとうございます。

俺は歩き出した。

「居るんだろ……思春？」

俺は近くに居るであろう思春に呼びかけた。

「……分かっていたのか？」

後ろから現れたようだ。

俺は振り向く。

「ああ、最初からな……」

孫権が現れたあたりから気配を感じていたのだ。

「そうか……礼を言っぞ……龍牙……」

思春は頭を下げる。

「何の事だ？」

「蓮華様の事だ……あのような晴れやかな顔は久しぶりに見た」

「気にするな……俺はただ、あいつが日常を楽しめたらなと思って
言っただけだ……それに本当なら俺じゃなく、思春が言うべき事だ
と思うがな……。」

「確かにそうだ……だが、私は元は河賊……そんな私が王族たる蓮
華様に意見などできる訳が……。」

「お前は孫権の事をどう思っているんだ？」

「そんなの……大切な方に決まっているだろう。河賊だった私を信
用して部下にしてくださいだったのだ……今の私があるのは蓮華様のお
かげだ」

「思春、一番大事なのはいつまでも大切な人の事を思って行動する
ことだ。そこに身分など関係無いぜ？」

「……いつまでも大切な人を思う事が大事か……すまない、私まで
教えられた」

また頭を下げた。

「だから、気にする必要はない……お前も日常を楽しめよ？」

「ふっ……変な奴だ」

思春は微笑みながら言う。

こっちもなかなか良いな……。

「さて、そろそろ作戦開始だな？」

「ああっ……」

「よろしく頼むぜ？」

「勿論だ」

俺は再び思春と握手をした。

さあ、プロデーターごっこが始まりだぜええええええ

又、台無しだね byナレちゃん

「作戦を開始する。龍牙、興霸、幼平……行け！」

『はっ！』

「任せろ！」

思春に明命は走り出す。

俺も走ろうとしたのだが……。

「待て……龍牙……武運を祈って置いてやる……」

「ありがとう……」

俺は目的地に向かって走った。

俺たちは城の右側に居た。

目の前には城壁がある。見張りが数人いた。

「さあ、潜入しようか……」

俺はプロデーターそっくりな仮面を被る。

「待て、作戦は雪蓮様が陽動をしてからの筈だろう」

思春の言葉に明命も頷く。

「その必要は無い……まあ、見てな」

俺は懐から円盤を取り出す。

「それは？」

「こいつはな……こう使うんだ……」

俺は円盤を振ると、円盤から数本の刃が飛び出す。

そして見張りに向かって、それを投げた。

円盤は回転しながら向かって行き、見張りの首を刎ねていく。

そして、全員の首を刎ねた後、手元に戻ってきた。

「さあ、行こうか？」

思春たちが唾然としていた。

「あの？ 大丈夫なんでしょうか？」

明命が言う。

「良いの、良いの……向こうも始めたようだしね」

そして、俺は思春と明命を抱えた。

「おいっ！」

「あ……あの！」

「このほうが手っ取り早いって……」

そして、俺は……。

ラ○ダージャ○プ。

大きく跳躍して、城壁を飛び越えて着地した。

俺は二人を降ろした。

「よし、作戦開始だ」

「あっ……ああっ……」

「はい！」

俺たちは倉に向かって走る。

それでは三人称視点をどうぞ

「おい、俺たちも行かなくて良いのか？」

「しょうがないだろう……くじで決まっちゃったんだから……」

「くそー、俺も行きたかったなあ……」

「まったくだ……」

男たちは城内の見張りだった。

暇を持て余して喋っていたのだが……。

突然、二人の男が倒れる。頭の側面に穴が空いていた。

「え？」

訳が分からずに男が戸惑うが……。

「ぐふっ！」

男が下を見ると、腹から数本の刃が突き出ていた。

そして、それは抜かれて、男は腹に穴を開け、血を吐きながら倒れた。

別の男は混乱していた。仲間の腹から刃が突き刺さっていたが、それだけしか見えなかったのだ……。

そして、男の視界がバラバラになる。

男は切り刻まれた。

「うわああ……」

それを見ていた又、別の男は叫びを上げようとしたが……上げられ

なかった。

喉から血が噴き出す。

男は倒れた。

「ば……化け物だあああああ」

逃げようとしたが……。

「ニガサナイヨ」

何かの音が聞こえて、思わず動きを止める。

そして、男の後頭部から短剣が突き出した。

男は倒れる。

「おい、何か叫び声上がらなかったか？」

「気のせいだろうか？」

別の見張りたちは言うが……。

『？』

耳に鈴の音が聞こえた。

そして男たちは首を斬られて倒れる。

「ふん……」

思春は剣を鞘に収めた。

「なあ、静かすぎないか……」

「お前、ビビりすぎだぞ……」

男は笑うが、耳に風を切るような音が聞こえた。

そして、男たちは顔のない死体となった。

「龍牙様……相手の目の前に居たのに気付かれないなんて凄いです
……」

明命は刀を納めながら言った。

「ふんふんふーん、これで良し……。」

俺は見張りを右腕の鉤爪を仕込んだ鉄甲に、ナイフに、指弾を使って倒した後、倉に忍び込んだ。

そして、俺は懐からC4爆弾を取り出して、置いた。

ついでに城の中にも置いといたよ

プロテクターって爆弾は使わないよね？byナレちゃん

自爆はしてただろ？

まあ、そうだけど……。byナレちゃん

じゃあ、良いじゃん……ここからは歴史的な大シーンになるからな……。

さあ、ビデオカメラの準備はOK？

大丈夫だよ byナレちゃん

じゃあ、行こうか……。

俺は倉から出て行くと、秘技？123「超光速」で思春と明命を迎

えに行き、抱えると秘技？878「超跳躍」で正門の城壁に着地する。

そして、二人を降ろす。

「龍牙？……」

「一体どうやって？……」

二人は驚いていた。

「まあ、見ときな……」

俺は息を大きく吸った。

「何をしているんだ……龍牙は……」

冥林は頭を抱える。龍牙の声が響いた。

「えー、皆さま……私、神埼龍牙はやりました　跳躍の新記録を出したのです……それでは相手チームのクレームをお聞きください」

龍牙は何かを手に持っていた。

俺はスイッチを押した。

その瞬間に後ろの方で爆発が起こって、大きな音が響き、炎が巻き上がって、爆風が吹き荒れる。

決まったああああああああ
今の撮った、撮った、撮った？
ナレちゃん？

ごめん、僕……ナレーションだから撮れないや)

ど

……。

そんなああああああああああorz

せっかく決めたのに……映画にしたら大ヒット間違いなかったのに……。

くそ……許さんぞおおおおおおお黄巾党うううううううううう。

どうしてそうなる？b y ナレちゃん

「龍牙……今のどつやった？」

「教えてください」

「後で皆に説明してやるよ……だが今は……」

俺はまた二人を抱えて城門の前へと飛び降りると、二人を降ろしてから右足の前蹴りで門を開けた。

雪蓮たちは固まっていた。

「ほら、さつさと入れよ」

「え、ええっ……よし！今こそ決戦の時！ 皆の者、雄叫びと共に
猛進せよ！」

『おおおおおおーっ！！！！！！』

「殺せ殺せい！賊を人と思つなよ！餓えた獣を狩り尽くせい！」

雪蓮の号令とともに祭も叫ぶ。

「甘寧隊、追撃する！」

『応っ！』

「周泰隊は敵側方に回り込み、横撃を掛けます！我が旗に続いて下
さい…」

『はっ！』

そして、雪蓮たちは残党狩りを始めた。

俺も鉤爪と円盤とナイフと指弾を使い、身体を斬り刻み、刺し殺し、
首を刎ね、斬り裂き、貫通させて穴を開けていく。

やがて、黄巾党は全て殺しつくされて、この戦いは終わった。

あーあ、映画にしたかったなあ……。

「皆の者！勝ち鬨をあげよ！」

『おおおおおお』

兵士の皆が勝利の雄たけびを上げる中で、俺の気分は最悪だった。

戦いに勝利した俺たちは、本拠地に向かって凱旋の途につく。
その途中の野営地で、俺は月を眺めていた。

ああ、映画が……。

どんだけ引っ張るの？b y ナレちゃん

「…………お疲れ様」

「ん？ ああっ…………ありがとうよ」

孫権が現れた。

「何かあったのか？」

「いえ……あなたに言いたい事があったから……」

「言いたい事？」

「……あ……あなたの……その……戦いぶりはしっかりと見させてもらったわ。」

「そうか……どうだった？」

「姉様や冥林たちが言うようにあなたは孫呉にとって大きな助けになるのが分かったわ……それに私に大事な事を教えてくれた……」

「俺は大したことはしていないがな……」

苦笑したが……。

「そんな事は無いわ……私はあなたのおかげで変わる事が出来る……だからあなたに真名を預けようと思うの……受け取ってくれる？」

孫権は俺のを見つめながら言う。

「勿論だ……俺は神崎龍牙……客将の身だが、孫呉の力になりたいと思う。よろしくな」

「ええっ……私は孫権仲謀……真名は蓮華……この名、あなたに預けるわ。」

そして俺たちは握手をする。

「よろしく……龍牙……」

蓮華は月明かりを浴びながら柔らかく微笑んで、しっかりと俺の手を握っていた。

こんな素敵な笑顔が見れたならもう映画なんてどうでもいいな……。

「龍牙、映画監督になる」(後書き)

龍牙「ああ……はあっ……」

ナレ「どうしても良いって言ったのにまだ引っ張ってるね」

作者「まあ、元気出せ」

龍牙「ああっ　そうする　次は拠点だしな」

龍牙&ナレ「次回も見てね」

番外編 呉の人たちとの交流？

孫策編（前書き）

龍牙「さあ、拠点だぜ」

番外編 呉の人たちとの交流？

孫策編

俺は南陽の城の城壁に居た。

何となく、此処に来たかったからだ……。

見渡すと街の全体が見える。

「……本当良い街だな……」

「でしょー」

雪蓮が俺に後ろから抱きついてくる。

「何だ？……居たのか？」

「たまたま龍牙を見かけてね……」

「そつか……じゃあ、離れてくれ」

「ええー、良いじゃない」

雪蓮は更に抱きついて来る。

「どう？ 孫呉の御使いになりたくなつた？」

「それはどうだろうな……………」

「また、そんなこと言って…………何が不満なの？」

雪蓮は俺から離れる。

「不満は無いさ…………ただな……………」

「ただ…………何？」

「いや、何でもないさ」

俺は雪蓮の頭を撫でる。

「もう、そんな事されたってごまかされないんだからね……………」

そんな事を言いながらも嬉しそうだ。

「でも、これ好きだな…………龍牙の手は大きくて、あつたかいもん」

そう言つと撫でやすいように頭の位置を変えていく。

「そつか……………」

俺はただ、雪蓮の頭を撫で続ける。

「何だか……眠くなってきちゃった」

「じゃあ、側に居てやるから眠っていると良い」

「うん……そうするね」

そして、雪蓮は目を瞑って、眠る。

俺はため息を吐いた。

「悪いな……お前の思いには答えられない」

俺は呟いた。

俺は眠っていたのだが、目を覚ます。

この気配は雪蓮だ。

俺は鉄鋼糸を展開する。

そして、糸を引いた。

「きゃっ!」

雪蓮は糸に拘束される。

「いくらなんでも夜這いは無いと思っぞっ?」
俺は糸を解いてやる。

「だって、こうしたら孫呉の御使いになってくれるかもと思って…」

「おいおい……」

俺はため息を吐いた。

「でも、私は龍牙の事好きよ？……龍牙は私の事が嫌い？」

「そんなことは無い……良い女だと思ってるよ……」

「じゃあ、どうして……」

雪蓮が泣きそうになりながら俺に問う。

もう、話して良いか……。

「俺はな……子供を作れないんだ……」

「え？」

「子種がないんだよ……」

「嘘よね？」

雪蓮は信じられないという顔をしていた。

「本当だ……だから男として俺は終わってるんだ……」

「そんな……どうして……」

雪蓮は混乱しているようだ。

「昔の話だ……俺が生まれた時に両親は借金のために俺を捨てた」

「親が……子を……」

「そうだ……俺は借金のためにある男に売られたんだ……こいつがまた狂った奴でな……俺の身体をいろいろ弄りやがった……兵器にするために……そして、その時に俺は子種を失った」

かわりに異常な力を手に入れたが……。

「……」

俺は思い出す。俺を兵器にしやがった奴を……。機械の体では無く、ナノマシンにより、生体兵器にされた。

「俺は十ぐらいまで兵器として……俺と同じような人間と猛獣を相手に殺し合いをさせられていた……まあ、戦っていくうちに自我は戻ったけどな」

雪蓮は言葉を無くしている。

「自我を取り戻した後は、俺を弄った奴を殺して、両親も居場所を探して殺したっけな……」

「龍牙……」

「その後はなんとか必死で生きてきた……もう一言……俺には子種が無い。だから、孫呉の御使いにはなれないし、お前の気持ちにも応える事ができない」

現代では娼婦など抱き放題だったが……この世界ではそうはいかないだろう。

子供……後継者を作るのは大事な事の筈だ。昔の時代においてはそれが使命と言っても良い。

子を作れない男など論外だ。

「雪蓮はそんな俺でも良いのか？」

「わ……私は……」

「良く考えろ……」

雪蓮は耐えられなかったのか、俺の部屋から駆け出して逃げるように去って行った。

俺は見ていた。雪蓮の目には涙があったのを……。

正直、つらいよ……ナレちゃん。

龍牙……byナレちゃん

……俺だって愛した人と子は作りたいのだが……。

俺はため息を吐く。

本当、俺って奴はどつしよつも無いな……。

番外編 呉の人たちとの交流？ 孫策編（後書き）

龍牙「昔の事を思い出しちゃったぜ……」

ナレ「龍牙……」

作者「お前……」

龍牙「まあ、後悔してもしようがない……元気出していくぜ」

ナレ&作者「……」

番外編 呉の人たちとの交流？ 周瑜編（前書き）

龍牙「作者は実習でなかなか作品書く時間とれないんだよな」

作者「ああ、実習＋記録書かなきゃならんからな 精神病みぎみだぜ」

ナレ「まあ、後一週間だし、頑張って」

作者「そうだな、よし頑張るぞ」

龍牙&ナレ「というわけで作者の怒涛の拠点更新始まるよ」

作者「話の構成だけはしているからな」

番外編 呉の人たちとの交流？ 周瑜編

「そうか……雪蓮に話したのか……」

俺は今、冥林と話をしている。なんでも雪蓮が部屋に籠ってしまっているそうだ。

あきらかに俺のせいだが……。

「ああつ……悪い事したな……」

「いや……お前は悪くないさ……雪蓮の反応は予想外だが……」
冥林は苦笑しながら言う。

「そうだな……もうちょっと考えて言うべきだったか……」

「どのみち言うべき事ではあっただろう……むしろ今言ってもらえてよかったとも思っている」

「そうか……」

そして、しばらくの静寂の後、冥林が口を開く。

「なあっ、龍牙……兵を持ってみないか？」

「良いのか？……俺は客将だぜ？」

「構わないさ……良く働いてくれるしな……褒美のような物だ
と思ってくれば良い」

「分かった……とりあえず訓練から始めるか……」

「そうしてくれ……数は百人ほどだが……」

「別に大丈夫だ……少数精鋭にしてやるよ」

「自信满满だな……」

さあ、龍牙のパーフェクト兵士訓練教室始まるよー

どうしてだろう……嫌な予感しかしないや b y ナレちゃん

俺は今、訓練場にいる。眼の前には百人の兵士。

新人なのだろう……皆、どこかしら緊張している。

「やあ皆、俺の『これであなともパーフェクト兵士だ！ 龍牙による兵士訓練教室』に来てくれてありがとう　今から始めるよー」

「……」

皆、訳が分からず混乱している。

「じゃあ、まずは講義の時間だ……全員座って」

「は……はっ！」

兵士たちは座る。

俺はホワイトボードを取り出して、その場に置くと……。

「良いか、皆……戦場で大事なのはフラグを立てない事だよ」

「そう……フラグって言うのは……」

俺は戦場での死亡フラグをホワイトボードに書き、紙芝居も交えて教えた。

「死亡フラグって……」

「お……恐ろしい……」

「絶対立てないようにしなきゃ……」

良し、皆に死亡フラグの恐ろしさは伝わったようだな……。

うわーい、龍牙ってやっぱりとんでもないや b y ナレちゃん

「まあ、やっぱり死亡フラグ立てない事も大事だけど……強くなる
つてのも大事だよなって……皆これを飲もうか」

俺は瓶を並べる。

「それは？」

一人が質問する。

「ん？ これはな……お前たちを強くするためのものだよ」

「これで強くなれる……」

「そう……っていつかこれ飲んでくれないと俺の訓練に耐えきれないよ」

「……」

兵士たちが唾を飲む。

そして……。

「よし、俺は飲むぞ！」

「俺も飲む」

「俺もだ」

皆、瓶を手に取ると一気に飲み干した。

『ぐあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああ！』

皆、倒れながら苦しみで悲鳴を上げる。

まあ、十年分訓練した身体に無理やり作り変えてるからな……無理もない。

兵士たちはやがて悲鳴を出さなくなると立ち上がった。

「なんか力が溢れてくる」

「これが俺……」

「今ならなんでもできそうだ……」

兵士たちは身体の内から溢れてくる力を実感している。

「じゃあ、今から訓練始めるよ」

「はっ！」

そして訓練を始めた。

「そこ、タイミングを合わせろ！」

「はっ！」

「そこは早すぎる……もっと周りを見る！ 皆を感じるんだ！」

「はっ！」

「良いか？ 俺たちは皆で一人だ……ワンフォーオールオールフォーワンだ！ さあ、言ってみろ！」

『ワンフォーオールオールフォーワン!』

「それを忘れるなよ」

『はっ!』

こうして、俺は徹底的に訓練をした。

「よし、俺たちのモットーは何だ？」

『人生はエンジョイ&エキサイテiiiiiiiiiiing！』

何処のワ○アル○？byナレちゃん

気にするな……。

「皆、絶対に忘れるな……そして俺と一緒に楽しもうぜえええええ
！」

『ヒヤッハアアアアアアアアアアアア』

兵士たちは高らかに叫ぶ。 皆立派になったな……。

もう、どう言えばいいのかわからないや byナレちゃん

「ここに龍牙団の誕生を宣言するよ」

『イエエエエエエエイ』

冥林と祭と思春は)。。(としており、穩や明命は目をキラキラと輝かせ、拍手をしていた。

「よっしゃあああああ 大成功だぜええ」

『イエエエエエ』

「頭が痛くなってきた……」

「これは……」

「……」

「龍牙さん凄いです」

「さすが龍牙様ですね」

なにやら冥林たちが何か言っていたが、俺たち龍牙団はダンスが成功した事をしばらく喜んでいた。

ちなみに後日、兵士たちによる模擬戦があつたのだが……。

「おらおら、フルボッコだぜええ」

「ここまでおいで……と誘いながら皆で攻める」

「隙アリだぜえええ」

「自分たちが何もできずに一方的に攻められるってどんな気持ち？
ねえ、どんな気持ち？」

と龍牙団の皆はどの孫呉の兵にも負けはしなかった。

「……はあっ……やっぱり私にはお前が分からない」

冥林はため息を吐きながら言う。

いやー、それにしても皆、絶好調でなによりだ

僕てきには兵が皆、龍牙みたいになってると思うんだけど……by
ナレちゃん

え？ そう？ 嬉しいな。

何で？b yナレちゃん

その方がいろいろ楽しめるから

うわぁ b yナレちゃん

番外編 呉の人たちとの交流？

周瑜編（後書き）

龍牙「俺にもついに兵士が出来たあああああああ」

ナレちゃん「やったね」

作者「お前兵士に何教えたんだ？」

龍牙「内緒」

番外編 呉の人たちとの交流？ 黄蓋編

俺は街を歩いていた。

今日はどの仕事も休みで暇だったからだ……。

そして歩いていると、昼間から酒を飲んでいる祭を見つけた。

「よっ、祭」

俺は祭に声をかける。

「龍牙か……どうしたんじゃ？」

「それはこっちのセリフだよ……もしかしてサボり？」

「うー！……サ……サボって何かおらんぞ？」

祭は言うが、明らかに動揺している。つまりバレバレである。

「サボりなんだ よおーし冥林に言っちゃお」

俺は冥林に報告しようと思つたが……。

「待て待て、それだけは止めてくれ」

祭は必死で俺を止める。

「えー、面白そうなのに」

「そんな理由で……」

「後、借金」

「それももうちょっとだけ待ってくれ！」

「別にいいけど、ツケがこんだけ溜まってるよ」

俺は紙を見せる。

「嘘じゃろ？」

祭は呆然となりながら言う。

「ううん、本当」

「……」

「なーんて、嘘だよ　大丈夫、大丈夫　ツケの金額も嘘だし、ゆ
っくり返してくれるんで良いから」

「ほっ……心臓に悪いやつじゃ……」

祭は安心するが……。

「というのが冗談だったら？」

「な！」

「クククククククククク」

俺は笑う。

祭は絶望の表情を浮かべていた。

「まあ、結局全部冗談なんだけどね」

「もう騙されんぞ……」

「あれ？ 本当なの？」

「何!？」

「良かったね 俺が優しくして……」

「はあ」

祭は力が抜けたのか机に倒れ込む。

「んじゃあ、一緒に酒でも飲もうぜ？」

「……そうじゃな……」

俺は懐から自分用の酒を取り出す。

俺と祭はそれぞれ酒を飲んだ。

「龍牙よ……お主は孫呉の御使いになる気は無いのか？」

「まあ、なれるなら別になってもいいんだけどな……」

「なれるなら？……どういう意味じゃ？」

「俺には子種が無くてな……」

「すまん……無神経じゃった……」

「気にしないで良いぜ……」

「いや……それでもじゃ……辛いじゃろっ？」

「……どうかな……困ると言えば困る事だが……」

「……策殿には？」

「言ったよ……まさか部屋に籠るとは思わなかったが……」

「そうか……それで……」

「まあ、辛気臭い話はここまでにしよう……酒がまずくなるからな」

「……」

俺と祭はその後、何も話さず酒を飲んでいた。

番外編 呉の人たちとの交流？

陸遜編

「奥義？999『パラダイス・ヘブン』！」

凄まじすぎるので描写はカット

俺は穩の癖である本を読めば知的興奮により、身体が疼くというのを度々解消してやっている。

ああつ………勿論本番はしてない。

「さて、落ち着いたか？」

「はい、ありがとうございます〜」

「気にするな………癖と言うのはどうしようも無いからな………」

「龍牙さんって本当優しいですね〜」

「ああつ、女には優しくするのが俺のモットーだからな」

穩はそれを聞くと笑っていた。

「さて、政務を始めるか」

「そうですねえ」

俺と穩は街についての状況を整理して警備や税などの改善案を考え、纏めて行く。

まさか政務まで任されるとは……まあ、俺の商売とかで街は潤ってるし、警備部隊なんかも訓練して配置してるからな……。

後、変わった事で、冥林は俺が兵士をどう育てるかを試すために百人だけになっていたのだが……何か知らんが龍牙団の数は今、500人に増えた。

他の隊からの希望者が多いらしい。

人気者は辛いぜ

とどつでもいい話はこのくらいにして仕事、仕事

「このぐらいでいいか……後は冥林に確認してもらわないとな」

「そうですね、それにしても龍牙さんは知識も凄いです、私、また……」

「おっと……それ以上は危ないぜ　まあ、良ければそのうち本なんか纏めてやるよ……それと！」

「あつっ！」

俺は小針で奥義？134「ツボ押し」を使って、抑えてやった。

まだ軽い状態の興奮だったから抑えられた。

「んじゃあ、持って行って来るな」

「はい、それでは」

俺は穩の部屋から出ると冥林の所まで移動した。

番外編 呉の人たちとの交流？ 周泰編

俺は街をぶらついていた。

そして歩く中で、『ニャアアア』という猫の悲鳴が聞こえた。

気になって、俺はそちらへと向かうと……。

「あつあつ……お猫様……」

明命が居た。

「おい、明命」

俺が呼びかけると明命はこちらを見る。

「あつ、龍牙様……」

「どうしたんだ？こんなところで……怪我してるじゃないか！
明命の手には猫の引っ掻き傷があった。」

「その……これは……」

「とりあえず治療しないと……細菌が入るといけない」

俺は明命の手を取ると、懐から薬を取り出して、塗る。

「わっ、傷が……」

「これは特別製でな……」

明命の傷に薬を塗ると、傷は瞬く間に無くなった。

「で？ 何してたんだ？」

「その……お猫様にモフモフさせて貰っていたのですが……」

「猫……好きなのか？」

「はい、大好きです」

明命は明るい笑顔で言う。

「だったら、俺に言ってくればよかったのに……見てるよ」

「？」

俺は指笛を鳴らした。

すると、あらゆるところから猫が飛び出した。

「凄い！お猫様がいっぱいです」

「驚くのはまだ早いぜ」

俺は懐から出した笛を持つと、鳴らす。

猫たちは整列した。

そして、俺はまた笛を鳴らしていく。

猫たちは音に合わせて行進していく。

やがて動きを止め、こちらを見る。

俺は輪を取りだすと高いところで持っておく。

笛を鳴らすと、猫は輪に向かって走り跳んだ。

見事輪を潜る。

それを続け、全員が跳び越えたと、また整列する。

次は笛の音を聞くと、走り、跳びながら前転して着地する。

次の猫がさっきの猫と同じような事をして、側に並ぶ。

そしてある程度が集まると、次の猫はなんと前の猫の上に乗る。次々と繰り返し猫のピラミッドが出来上がった。

「凄いです……お猫様はこういった事も出来たんですね」

笑顔になりながら明命は拍手をする。

俺が笛を鳴らすと猫たちは次々と着地して、俺の前に整列する。

また鳴らすと、猫たちは立ち上がって敬礼する。

そして座る。

俺は懐からねこまんまを取りだすと、猫の前に置いた。

猫はそれを嬉しそうに食べる。

これぞ奥義？500「動物調教術」

ウケが良いから、重宝している。

「あれは龍牙様が？」

「まあな、面白かったろ？」

「はい」

「それで、確か猫をモフモフしていたら引っ搔かれたんだっただか？」

「はい、そうです」

「ちょっと待ってな……」

俺は猫まんまを食べ終えた猫たちに話しかける。

「ニヤニヤーン（皆、良くできてたぞ……ところで頼みがあるんだが……）」

「ニヤー（何ですか ご主人様？）」

「ニヤニヤニヤニヤーン（実はあの子にちょっとだけ付き合っ
て欲しいんだ）」

俺は明命を指差す。

「ニヤーン（別に良いですよ）」

一匹の猫が俺の前に来た。

俺は奥義？567「動物対話術」で会話ができるのだ。

そして、猫は俺と歩きながら明命の側に近寄る。

「さあ、さっきのようになしてみてくれ」

「良いんですか？」

「ああっ」

「それでは失礼して……」

明命は猫を抱きあげて、毛に顔を埋めると頬ずりする。

「ニャー（いやー）」

猫はそれにビックリする。

「ストップ！ それじゃあ駄目だ」

「そうなんですか？」

「親しくもない猫にやっても嫌がられるだけだ……気持ちは分かるが、まずは交流から始めないとな」

「交流から？」

「そつだ、基本から教えてやろう」

「お願いします！」

俺は明命に猫との交流の仕方を教えて、実践させていた。

「よし、これでもう大丈夫だな……気をつけるんだぞ？」

「はい、ありがとうございました」

明命は俺に頭を下げる。

「ニヤーン（お前たちも忙しいのに悪かったな……）」

「ニヤー（いえいえ、ご主人様の頼みですから……）」

猫たちはそう言うと、去って行った。

俺と明命は城に帰りながら、猫の事について会話をしていた。

番外編 呉の人たちとの交流？ 甘寧編

今、私は龍牙の事を観察していた。

謎が多すぎて、良く分からないからだ。

朝早く起きると、あいつは水浴びをして、顔を洗う。

そして、食堂へ行くと二本の包丁を持ち、食材を上投げた。

「百頭蛇閃ヤマタノオロチ（料理番）」

食材が一瞬でバラバラになり鍋の中へと入る。

「ふんふんふーん やっぱり料理って楽しいな ナレちゃんはどう思う？」

鼻歌を歌いながら誰かに呼びかける。

側には誰もいない……誰なんだ？ ナレちゃんというのは？

そして、料理を終えると……。

「さて、冥林たちを起こさないとな」

そう言うと、周瑜様たちを起こしに行った。

孫策様は最近、部屋に籠りがちで出ていない 何かあったのだろうか？

それにしても、あいつは私たちの母親のつもりになっているのか……

私は急いで、部屋に戻って今起きたように見せかける。

皆で朝食を食べる。それぞれ自分の仕事をするために分かれる。

相変わらず龍牙の作る料理は上手い。

それが済むとそれぞれ自分の仕事をするために分かれる。

私は龍牙に気配を隠しながら着いて行く。

「せーの、燃〇系、燃〇系、ア〇ノ式」

龍牙は兵士たちが乗って行って、山になった頂点にいた。

側の後ろの兵士が大縄を回すたびに跳ぶ。

そして、しばらく飛ぶと、止めた。

「よし、皆新芸の開発頑張ろうぜええ！」

「オオツ！」

龍牙の訓練は訳が分からないものばかりだ……その割には私たちが孫呉のどの部隊も勝てないくらい強い。

何なんだ……お前は……。

龍牙は訓練場から出ると、次に街へ向かう。

懐から大きな台を用意する。

何で、懐からそんなもんが出てくるんだ……。

そして、人形を取り出して……。

「子供の皆ああああ　今から人形劇を始めるよおおおおお　龍牙お
兄さんの元を集まれ」

子供たちは龍牙の元集まる。

「こうして、浦島太郎は鬼と組んで、竜宮城を支配していた桃太郎をサルとキジと犬と亀と協力して倒して、姫といつまでも幸せに暮らしましたとさ……めでたし、めでたし」

「どんなに強い人でも欲はあるんだ……」

「欲は人を変えてしまうんだね」

「桃太郎も貧しくなったら、きっと……」

「浦島太郎は凄いな……正義という欲望を受け入れているんだもん」

「欲は人によつて、形を変えるんだね」

「やっぱり、龍牙兄ちゃんのお話は面白いや」

『いつもありがとう』

「いやいや、楽しんでくれて何よりだ」

龍牙の人形劇はあきらかに物語の範疇を超えていた。

明らかに子供に見せる物では無いだろ！

しかも、ああいったのを何回も見せているのか……。

龍牙は片付けると 又、歩き出す。

龍牙は店に入ると、仕事をする。

洋服屋から料理屋まで様々だった。

仕事多すぎるだろ……作業早いし、いかん……考えるほど訳が分からない。

龍牙は仕事を終わると、歩き出す。

私も着いて行くのだが……。

「飯でもどうだ？ サービスするから」

龍牙はこちらを見た。

「分かっていただけなのか？」

思春は問いかける。

「まあな……腹減ってるんだろ？
心理描写読んでたから筒抜けだよ。」

「いや、私は……」

思春の腹が鳴る。

思春は顔を赤くした。

「遠慮するなよ……行くつぜ？」

「……ああっ」

俺は思春を俺経営の飯屋に連れて行き、料理をこちそうした。

「料金はタダでいいからな」

「そうか……良い味だった。」

思春はそう言うと去って行った。

番外編 呉の人たちとの交流？

孫権編

「おーし、あともうちよつとで……」

俺は部屋で絵を書いていた……もう少しで完成だったのだが……。

「！……誰か来る……まずい！」

そして、俺の部屋の扉が開かれた。

「龍牙……居ないの？」

部屋の扉を開けたのは蓮華だった。

「冥林から休みだと聞いたのだけれど……どこに行ったのかしら？」

蓮華は部屋を見回すと出て行った。

あつぶねえええ……もうちょっとでやばい事になるところだったぜ……。

俺は糸を部屋の上部と絵に巻き付けると、跳躍して貼りついた。

絵ももちろん貼りついている。

さすがに蓮華と思春と明命をモデルにした18禁の絵など見られたらもう……。

まだ書いてたの？b y ナレちゃん

ふっふっふ……儲かるからな

最低すぎる byナレちゃん

さて、蓮華に会わないとな……。

「おい、蓮華」

「龍牙？」

蓮華は後ろを向く。

「居ない……龍牙、何処に居るの？」

「こつちだよ」

「きゃあ！」

蓮華は俺を見ると驚いて、尻もちをつく。

俺は上から糸を垂らしながら、蓮華の前に現れた。

逆さまの態勢でだ。

これぞ奥義？169「蜘蛛術」だ。

俺は逆上がりをするようにして、逆さまから普通の態勢になると糸を離して着地する。

「もう、また驚かせられたわ……」

「俺は人を驚かすの好きだからな」

「できればほどほどにしてほしいのだけれど……」

「それはどうだろな……何か用だったのか？」

「え？……」

「いや、さっき俺の部屋に来たじゃないか」

「部屋に居たの？」

「まあ、隠れてたけどな」

「どうして？」

「面白そうだったから？」

「面白そうって……龍牙は海を見た事あるかしら？」

「そういや、この海は見た事ないな……」

「それなら、私と一緒に……」

「おう、いいぜ」

「そう、良かったわ」

「こうして俺と蓮華は海を見に行く事になった。

俺と蓮華は海の近くに居た。

「おおっ、綺麗な海だ」

「気に入ってくれたかしら？」

「ああっ、よし……泳いでくる」

「え？」

俺は服を全て脱ぐと、もうすでに水着だった。

海だからな

そして、俺は海に飛び込んだ。

「いやっほーい」

クロールからバタフライなどとにかく泳ぎまくる。

気分は水を得た魚だ。

「いええええい、楽しいぜええ」

俺の気分は最高潮だった。

「ふう、楽しかった」

「龍牙って泳ぎ上手かったのね……」

「まあね、海を紹介してくれてありがとうな」

「ええっ、喜んでもらえてよかったわ」

その後、俺と蓮華は海をずっと眺めていた。

「こっつて本当良い街だな……」。

番外編 呉の人たちとの交流？

孫権&甘寧編（前書き）

龍牙「これはおまけ」

私は蓮華様が水軍の訓練を見に来るといふこともあり、気合いを入れていたのだが……。

「お前たち、何をしている！」

兵士たちは動きを止め、何かを見ていた。

「思春、どうしたの？」

「蓮華様、それが……」

私は蓮華様に報告すると、一緒に兵士たちが見ていた方向を見る。

そこには……。

「何かしら……あれは？」

「私には分かりません……」

海の真ん中に足が二本生えていた。

そして何処かから音楽が鳴り出す。

犬○家

俺たち、龍牙団はシンクロナイズドスイミングをしている。

俺は音楽が鳴った事で一旦、沈む。

○ゼーの「カ〇メ〇」である

これを演奏してるのは龍牙団の兵士だ。

後は音楽に合わせて、海から俺と兵士が順番に顔を出していく。

さらにそこから泳ぎながら旋回したり、イルカのように跳躍しながら前転する。

盛り上がるにつれて派手に技を披露する。

そして最後には、一旦順番に潜って行くと船に向かって前転しながら跳躍する。

決めポーズを取り、終了

俺たちは拍手喝采に包まれた。

「いよっしゃああ、大成功だ」

『ウオオオオオオオオオ』

俺たちはシンクロナイズドスイミングが成功した事を喜ぶ。

「さっきのは何？」

「まあ、運動の一種だよ」

蓮華が問いかけてきたので、俺は応えた。

「何故、ここでそのような事を……」

「暇だったからな……何より俺たち龍牙団のモットーは……」

『人生はエンジョイ&エキサイティンググウウウウ』

俺と龍牙団の皆が声を合わせて言った。

「まあ、こづいことだ」

「そうか……」

「皆さん、これからも龍牙団を宜しくお願いします それでは…

…」

俺たちは海に飛び込んで泳ぎながら去って行った。

歓声が耳に響いていた。

やっぱり龍牙団は最高だな

もう演芸団にしたら？b y ナレちゃん

まあ、いいじゃん……楽しい事なら龍牙団は何でもOKよ？

ふーん、まあいいや b y ナレちゃん

番外編 呉の人たちとの交流？ 全員＋おまけ

俺は雪蓮の部屋の前に居た。

「雪蓮……そろそろ出てきてくれないか？」

呉林たちに任せていたが……出てこないしな……。

「龍牙……」

返事は聞こえるが部屋からは出てこない。

「前に約束したよな？ チョコレートパフェを作つてやると……」

「……」

「今日作つてやるから出て来てくれ……皆も待ってるしな」

「……分かったわ」

雪蓮は部屋から出てきた。

どこか、やつれているようにも見える。

俺は背中に腕を回して抱くと、頭を撫でてやる。

「あ……龍牙……」

「悪いな……俺のせいで……」

「龍牙は悪くないじゃない……」

「それでもだ……ごめんな」

「……」

しばらく抱いていたが……。

「なあ、一緒に行こうぜ？」

「……ええ」

俺と雪蓮は庭へと向かう。

庭へと向かうと、孫呉の皆が居た。

「雪蓮、大丈夫なのか？」

「策殿……心配しておりましたぞ」

「雪蓮様……出てきてくれて良かったです」

「姉様……無理はしていませんか？」

「孫策様……体調の方は無事ですか？」

「孫策様……何か悩みがあるんですか？」

皆が雪蓮に問いかける。

「皆、心配かけてごめんね……私は大丈夫だから……」

雪蓮はそう言うが、どこかしら元気が無かった。

「さて、今からチョコレートパフェを作ってやるよ」

「何だ？ それは？」

冥林が問う。

「甘い菓子のようなものだな……食ってみたら分かるよ」

俺はチョコレートパフェを作り食堂へ向かった。

チョコレートパフェを作ると、皆の元へ運んだ。

「んじゃあ、食べてみてくれ」

皆は食べ始めた。

「おいしい」

「ほづ、これは」

「中々じゃのう」

「おいしいですねえ」

「本当においしいわ」

「私もそう思います」

「どんなお菓子よりも美味しいです」

皆から賞賛された。

「喜んでもらえて何よりだ……なあ、雪蓮？」

「何？」

「やっぱり雪蓮は笑っていた方が良いな……」
俺は雪蓮の頭を撫でてやる。

「龍牙……」

俺と雪蓮はしばらく見つめ合っていた。

「さて、皆食べ終わったな……片付けてくるよ」

皆の器を手にとると、俺は再び食堂へと向かった。

まあ、これで雪蓮が元気を取り戻してくれたら良いが……。

俺はそう考えていた。

おまけ

「赤の6と8と11を頼む」

思春はある店の店主に言う。

店主は番号が書かれた箱を取り出す。

「お前の欲望を解放しろ」

「ああっ、そうさせてもらおう」

思春はそれを手に取ると、金を払って店から出た。

いやあ、思春ってレ○だったのね……買っていったの蓮華を元にした18禁の絵とか漫画とか小説だぜ……見たときはヤバいと思ったがな……。

これで思春が暴走したらどうする？b y ナレちゃん

それは……大丈夫だろ？ 多分……。

僕には関係ないから良いけどね……b y ナレちゃん

どうなるんだろうか……俺は少し不安になった。

「龍牙の旅

悪いけどこの物語は呉ルートじゃないのよね。俺はルートなど無

龍牙「ふふふふふ」

ナレ「うわーい、暴れまくる気がプンプンするよ」

作者「マジでどうなるんだ……」

あらすじ

? 黄巾党退治に行く

? 蓮華、思春、明命と交流

? 見事、黄巾党を退治

? しばらく日常を過ごす。

龍牙&ナレ「本編スタート」

作者「何か真面目だ……」

「龍牙の旅

悪いけどこの物語は呉ルートじゃないのよね。俺にルートなど無

「大変です!」

玉座に明命が慌てた様子で現れた。

「何?.....どうしたの?」

「何かあったのか?」

私と冥林が聞くと.....。

「龍牙様が.....」

「龍牙がどうかしたの?」

「とりあえず龍牙様の部屋に来てください」

「?」

状況が読めず混乱した。

とりあえず皆を呼んで、龍牙の部屋に行ったんだけど.....。

部屋に龍牙は居なかった。大きな袋と手紙が残されていた。

「とりあえず読んでみるわね?」

皆に問いかけると、頷いた。

私は手紙を読む。

旅に出ます。探さないでください

龍牙より

『……………』

沈黙が走る。

袋の中身が気になり、開けてみた。

いくつかの箱とまた手紙があった。

読んでみると……………。

皆、さっきの手紙ビックリしたろ？ 冗談だよ

まあ、何となく旅に出たくはなったけどね……………俺って自由だし。

そうそう龍牙団も一緒だから……誰も使いこなせないだろうしね
雪蓮、ごめんな孫呉の御使いになる事が出来なくて……誘いは本当に嬉しかったんだけど。

自由奔放なのも良いが、あまり冥林に負担はかけてやるなよ？

「龍牙……」

冥林、仕事に精を出すのは良いが、あまり無理をするのは良くないぞ？ たまには息抜きなんかも忘れずに……。

「そうさせてもらうか……」

祭、借金は貸しという形でいずれは返してもらうつもりだから……
宜しくね

「分かったわい……」

穩、のんびりなお前だが仕事はきっちりやっていたな……冥林が無理をしないように支えてやってくれ

「承知しました」

蓮華、次期王だからとあまり気張らず、ほどほどにしろよ？……お前が自分のやり方を見つけて王になるのを楽しみにしてる

「ええ……」

思春、俺が言う事でもないが……蓮華をしつかりと支えてやってくれよ？　ただ、前にも言ったが立場なんか気にする必要は無い。時には主に仕える忠臣として、友人として支えてやれ。

「貴様に言われずとも……」

明命、いつも明るくて元気な所がお前の良いところだ……その元気を皆にも分けてやれよ？

「はい！」

皆と居るのは楽しかったぜ……お礼と言っちゃあなんだが、贈り物を置いといた。出来れば使ってくれると嬉しい。また何か困った事があれば、俺を呼べ……すぐに駆けつけて助けてやるよ。

それじゃ、又会う日まで……バイバーイ

龍牙より

「だからって黙って行くことないじゃない……」

私は呟きながら、私の名前が書かれた箱を開けた。

皆もそれぞれ箱を開ける。

どうも、自由な旅人龍牙だよ

読者（お前たち） おはよう、こんにちわ、こんばんわ。

俺は今、龍牙団の皆と一緒に旅に出てるよ。

雪蓮と蓮華にはネックレスを、冥林と穩には知識を纏めた本、祭には特製の酒を、明命には猫と交流するための道具と猫まんまの作り方の本、思春には綺麗な鈴を贈った。後、それぞれに似合う服もな。

俺が作ったんだよ

デザインは読者（お前たち）の想像に任せる。

気に入ってくれるといいな。

「さて、ここは何処だ？」

「団長、別に何処でも良いじゃないですか」

「そうですよ」

龍牙団の皆は言う。

「そうだな……楽しめばいいだけだからな……とりあえず傭兵をやるか？」

『賛成いいいいいいいい』

そして、休憩している崖から遠くを見ている兵が……。

「団長、向こうで誰かが争っているようです」

「何？ どれどれ……」

俺は遠くを見る。

旗印が見えた。

文字は『趙』だった。

趙？……何かどっかで聞いたような……まあ、いいや。

後は黄巾党の残党もいるな。

「よし、とりあえず参戦するか……パーティタイムの始まりだあ
あああああ！」

『いよっしゃあああああああああああああ』

俺たちは崖から一気に駆け下りて、戦場に向かった。

「くっ……油断したか……」

黄巾党の残党が現れたと聞いて、単独で相手をしていたのだが……
数が多すぎた。

まさか死体に足をとられるとは……。

「ここまでか……」

私に黄巾党の残党が剣を振りおろそうとするが……。

「ぎゃあああああああああああ」

突然何かが飛来して、私の目の前の黄巾党の首を刎ねていく。

「ぐあっ……」

さらに、幾人かはこめかみに穴を開けて、倒れた。

私は飛来して、円を描いていたものを眼で追うと……。

「よっ……」

そこには龍牙殿がいた。

いやー、円盤も指弾も便利だね

俺は戻ってきた円盤を掴むと、白い着物とロンギヌスの槍を持った水色な髪の人に声をかける。知り合いのような気がするしな……誰だっただけな？

「これは龍牙殿……何故此処へ？」

おおつ……やっぱり、知り合いだったか……。

「まあ、話は後にして……今は賊を片付けようぜ」

「そうですね……しかしあれは？」

女の目の前では龍の旗を掲げた兵士が黄巾党を倒していく。

「ん？ あれは龍牙団……俺の大事な部下さ」

「はあ……」

俺は懐から槍を取り出す。

「さあ、行こうぜ」

「手助け感謝しますぞ」

「気にするな……」

俺と女は黄巾党に向かって行った。

俺は目の前の黄巾党の腹を槍で突き刺して、右手で抜き、そのまま後ろの黄巾党の腹を穂先の無い方で突く。

「がっ……」

そして、左手に袖に隠していたナイフを掴み、それを振るって首を裂く。

俺は更に左に居た黄巾党の腹を右の槍で突き、一旦手を離すと右の黄巾党に向かって半回転しながらナイフを振るい、首を裂く。

槍を引き抜いてから前進する。

そして、跳躍しながら前転して黄巾党の後ろに着地する。

槍を手元で回転させ、後ろの黄巾党の腹に突き刺した。

目の前で呆然としている黄巾党の腹に右の前蹴りを腹に繰り出す。

黄巾党は吹っ飛んだ。

ナイフをしまつて、槍を両手に持つ。

目の前の黄巾党の腹を突き刺し、振るって首を薙ぎ、更に振るって、顔を横殴りに殴打する。

時には手元で回転させて突き、薙ぎ、殴打する。

蹴りや拳、跳躍しながらの前転、後転、側転なども交えて翻弄もする。

気がついたころには黄巾党は全員倒れていた。

「ふう、終わり 皆お疲れー龍牙団の初陣初勝利だぜ」

『オオオオオオオオオオ』

皆は歓声を上げた。

「それにしても相変わらず強いですな……それに龍牙団とやらも……」

女は言う。

「ああつ……俺たち龍牙団の強さは世界ーいいいいいいいいいいいい」

『ウオオオオオオオオオ』

「自信满满ですな……それにしても何故こちらへ？ 孫策の客将となっていたのでは？」

「そうなんだけど……旅に出たくなつてな 今は傭兵だよ」

「そうですか……ところで何故さっきから名を呼んでくれないのですかな？」

「え？……」

「もしやとは思いますが……」

「忘れてない……忘れてないよ……忘れるわけないじゃないか」

「では、名を呼んでくださいな……」

「えーと……趙星？」

「ふむ、混ぜっておりますな……」

女は槍を構える。

「え？ 嘘……待て待て、もうちょっとで思い出すから」

俺は地面に手を着けて、捲る。

最初からこの物語を読んでいるのだ……。

「よし、思い出した。お前は趙雲……真名は星だ。」

「うむ、合っておりますぞ」

「はっはっは……まあ、最初から忘れたふりしてただけなんだけど
ね……たとばあ！」

俺は星に槍の穂先が無い方で叩かれた。

「それは笑えない冗談ですな」

「くっ、結構痛かったぜ……なあ、星は何でここに居るの？」

「私は今、桃香様に仕えておりましてな……そうだ、お礼も兼ねて一緒に来てくれませぬか？」

「まじで？……行く行く 皆も良いよね？」

『イエス！ ウィ キヤアアアアン！』

皆も賛同した。

「それでは参りましょうか……」

「おう」

しかし、俺は知らなかった……まさかあいつが居たなんて……。

「龍牙の旅 悪いけどこの物語は呉ルートじゃないのよね。俺はルートなど無

龍牙「次はどのルートなんだ？」

ナレ「楽しみだね」

作者「さあ、どうなるか……」

次回予告 「三国志でのリオルO1J1J」

龍牙「次回も俺と龍牙団は八チャメチャさ」

作者「おいおい……」

「龍牙、逃走中……」(前書き)

龍牙「ヤバい……殺される!」

ナレ「どうしたの?」

作者「どうしたんだ?」

龍牙「詳しくは本編をみてくれ」

「龍牙、逃走中……」

よう、読者（お前たち） おはよう、こんにちわ、こんばんは。

神崎龍牙だ……今はあらずじなどやっている場合じゃない。

何故なら……。

「待てええええ！」

「絶対、待つかああああああああ！」

俺は今、雑刀を持って俺を追ってきている刺客から逃げている。

どうしてこうなったかは回想を始めるから見てくれ。

それじゃあ、回想スター「逃げるなああああああ！」ぬおっ！

まだ追いかけてくるうううううう

回想

俺は星に連れられて、城の中を移動する。……ちなみに此処は平原
というらしい。

そして、玉座へと入ったのだが……。

「ただいま戻りましたぞ」

「お疲れさま。星ちゃん……あれ？」

「まったく一人で行動するなど……」

星の言葉に、あれ？ 劉備？……じゃあ、あつちは……。

『あ』

俺とあいつの眼が合った。

「げえっ！ 関羽！」

「ふっ……あのときの恨みを晴らすときが来ようとは……」

関羽は薙刀を構える。

俺は急いで玉座から逃げ出した。

以上回想終わり

「大人しく観念しろ！」

「絶対に嫌だ！」

俺はひたすら逃げていた。

目の前に角が見えた。

俺はそこを迷わず曲がる。

「くっ！……何処へ行った？」

関羽は龍牙を追いかけ、角を曲ったのだが……見失った。

そして、歩くうちに……。

「ん？ 何だ、像か……」

関羽は両手を高く上げ、まるでゲ○コのあれのようなポーズをしている像を見つけた。

しかし、気にせず通り過ぎる。

「愛紗があんなに怒るとは……何かあったのですか？」

星は劉備に問いかける。

「えーっと……」

「あのお兄ちゃんがいたずらしただけなのだ」

張飛が劉備の代わりに応える。

「ほう、それはそれは……」

「あわわわわわ」

「はわわわわわ」

二人の少女たちはただ震えていた。

「うおおおおおお！」

龍牙が窓から侵入して、着地した。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……よおっ、本当久しぶりだな、劉備に張飛ちゃん」

「ええ……久しぶりですね」

「久しぶりなのだ、お兄ちゃん」

「おおっ、愛紗から逃げきりましたか……」

「ああっ、大した奴だ……死ぬかと思っただぜ」

そして、玉座の扉が開かれた。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……此処に居たか！」

馬鹿な！……奴はニュー・オーイ・オ・なのか……。

関羽は薙刀を振るおつと向かって来る。

俺は……。

「マジすいませんでした！ これ以上はお願いだから勘弁してくだ
さい！」

それは見事な土下座をした。

「……分かった……許そう」

俺と関羽は倒れこんだ。

ああー、疲れたよナレちゃん。

お疲れ様 byナレちゃん

「俺は神崎龍牙……君たちは見ない子だね。良かったら名を教えてください
くれないかな？」

俺は二人の帽子を被った少女（うち一人は魔女帽子を被っている）
に名を尋ねた。

「はわ、私は諸葛亮でしゅ」

「あわ、鳳統でしゅ」

「ところで、どうして此処へ来たんですか？……確か孫策さんの客将になったと聞いたんですけど……」

「ん？……まあ、旅に出たくなつたからな……いろいろな国を見て回りたいというのもあるけどね」

「そうですか……龍牙さんは天の御使いでしたよね？」

「まあ、一応はね」

「だったら、私たちのご主人様になってくれませんか？」

「桃香様！」

「にゃー？」

「ほう、これはこれは……」

「はわわわわ！」

「あわわわわ！」

皆、劉備の言葉に驚く。張飛ちゃんは分かっていないようだけどね……。

俺の返答は……。

「嫌だ」
即答した。

「え？……どうしてですか？」

「だって、俺は自由でいたいんだもん ……人を従える器も無いし」

「そうですか……」

「まあ、力を貸すぐらいなら良いよ 傭兵やってるからな」

「私は賛成ですぞ ……腕は見せてもらえましたがし、何より面白くなりそうだ」

「星！ お前何を……」

「鈴々も賛成なのだ ……お兄ちゃん面白いし」

「鈴々まで何を……」

「はわわわわ」

「あわわわわ」

星と張飛は俺を受け入れることに賛成してくれた。

関羽は反対して、諸葛亮と鳳統は慌てている。

「で？ どじ？」

俺は劉備に問いかける。

「それじゃあ、宜しくお願いします。私の真名は桃香です」

「真名か……いいの？」

「はい……」

「そうか……宜しくな桃香」

俺と桃香は握手する。

「桃香様が言うなら……私は愛紗だ」

「おっっ、これから宜しく頼むぜ愛紗」

「ふんっ」

おお……握手されなかったぜ

「鈴々は鈴々なのだ……宜しくなのだお兄ちゃん」

「宜しくな鈴々ちゃん」

俺は鈴々の頭を撫でてやる。

へへっと笑っていた。

「頼りにしていませんぞ……龍牙殿」

「ああ、頼りにしてくれ」

俺と星は握手をする。

「はわ、朱里でしゅ」

「あわ、雛里でしゅ」

『宜しくお願いしましゅ』

二人は俺に頭を下げる。

「任せな、君たちの力になってあげるからな……朱里ちゃん、雛里ちゃん」

朱里と雛里の頭を撫でてやる。

顔を赤くしていたのが可愛かった。

「まあ、改めて俺と龍牙団はお前たちに力を貸すよ……まあ、しばらくしたら又居なくなるだろうけどね」

「はい、宜しくお願いします」

桃香が笑顔でそう言った。

「龍牙、逃走中……」 (後書き)

龍牙「関羽は恐ろしかった……」

ナレ「そうだね」

作者「まあ、ドンマイ」

龍牙&ナレ「次は拠点」

作者「まあ、頑張るか」

番外編 蜀の人たちとの交流 劉備編（前書き）

作者「実習終わった これで集中して書けるぜ」

龍牙「おう、頑張れよ」

作者「もちろんよ」

龍牙&ナレ「それじゃあ 始まり 始まり」

番外編 蜀の人たちとの交流 劉備編

俺は今、桃香と一緒に街の中を歩いている。

桃香に誘われたからだ。断る理由も無いしね

ちなみに南陽に居たときと同じような商売をしている。

金はいくらあっても困らないしね

「しかし、此処も良い街だなあ……平和だからか民の皆が笑ってる
俺は何となく呟いた。

「龍牙さんも平和は好きですか？」

桃香は俺に問いかける。

「ああ、そりゃあな……ただ平和じゃなく、人や俺が楽しめるよう
な刺激のある平和ならもつと良いがな」

「そうですか……私はこの大陸の皆が争いが無く、平和に笑って暮
らせるようになったらいいなって思ってるんです」

「それが、桃香の夢か？」

「はい！」

桃香は俺の問いに勢いよく答えた。

「なるほどな……なあ、桃香」

「何ですか？」

「お前の言う大陸の皆つてのは……黄巾党のような奴らも含めるのか？」

「え？」

「それに争いが無いと言うが、じゃあもし此処が攻められたらどうするんだ？」

「それは……話し合いで……」

「解決できると思うか？ そんなに人は甘くない……守るために戦うしかないだろう？」

「……」

桃香は沈黙する。

「それにな、人には家族がいる。争う中で人が死んで……残されたそいつの家族は笑えるとも？」

「……」

「理想は素晴らしいが、その分考えて行動しないと……最悪破滅するぜ？」

「……私は間違っているんでしょうか？……」

「そうは言っていない……お前の優しさは大したものだ……それに此処の民たちは確かに笑っているしな……まあ、力なら愛紗や鈴々ち

やん星が、知らず朱里や雛里ちゃんが居るんだ。
皆で協力して頑張ればいい。決めた道なら諦める必要はないさ……
俺も力を貸すつもりだからな」

「龍牙さん……」

「さあ、難しい話はこれでおしまい　今はこの街で楽しもうぜ？」

「そうですね」

桃香は笑顔になる。

そしてしばらく歩いていると……。

「あつ、お姉ちゃんに龍牙お兄ちゃんだ」

「よっ」

子供たちが駆け寄ってきた。

「龍牙お兄ちゃん遊んでー」

「僕、紙芝居が良い」

「私は歌を聞きたいな……」
子供たちは次々と要求する。

「よし、じゃあ皆の願いをかなえてやるよ」

『うわーい』

うむ、喜んでる喜んでる。

「というわけだ。子供たちと一緒に遊ぶとしようか？」

「そうですね」

そして俺と桃香は子供たちと遊び、紙芝居や人形劇をして、歌を歌った。

夕暮れになると……。

「龍牙兄ちゃん、お姉ちゃん遊んでくれてありがとう」

「おう、気をつけて帰るんだぞ」

『はい！』

俺は帰って行く子供たちに手を振って見送る。

「龍牙さん、子供たちと遊んでるんですか？」

「ああつ、いつもな……子供は無邪気で、明るいな……笑顔は宝物だと思つ」

「へえ、龍牙さん子供好きなんですね」

「勿論だ……もうそろそろ城に戻らないと愛紗に何か言われそうだし……帰ろうぜ？」

「はい」

俺と桃香は城に向かって歩き出す。

「まあ、子供の……大陸の皆の笑顔のために頑張るんだろ？ 改め
て宜しくな」

「はい、宜しくお願いします」

そして、城へと戻った。

暇だった俺は庭を歩いていた。

「星ー！鈴々ー！ 何処だー」

愛紗が叫びながら走っていた。

「おーい、愛紗ー」

俺は愛紗に呼びかける。

「お前か……鈴々と星を見なかったか？」

「嫌、見てないけどな」

「そうか……又、あの二人は……」

「何かあったのか？」

「今日は合同で訓練をする予定だったんだ」

「要するにサボりか……」

「だろうな……」

愛紗はため息を吐く。

「なら、俺が訓練してやるつか？ 星と鈴々ちゃんの兵士を……」

「お前に出来るのか？」

「勿論だ 俺に不可能は無い！」

「そこまで言うのなら任せてみよう」

「ああっ、任せる」

こうして俺は庭に星と鈴々ちゃんの兵士を呼び、訓練することになった。

そして、愛紗に結果を見せるときになった。

「よし、じゃあ皆いっくぞおおおおおー！」

『いえーい！！』

「おい………」

「じゃあ、せーのー！」

俺と星と鈴々ちゃんの兵士の何人かは槍を突き刺して、土台になったその上を左足一本で立つ。

さらに大きな傘を持って、側に居る兵士の投げる球を笠を回しながら回転させて行く。

「おっしゃあああああ、できたぞおおおおおー！」

『うおおおおおおおおー！』

そして、俺たちはそれを止め、皆で円陣を組む。

「俺たち龍牙団にはー」

『不可能は無い！』

「ちょ……こつち来んなああああああああ」

俺は急いで逃げる。

「逃げるなああああああ！」

愛紗は追いかけてくる。

俺は逃げる中で、あるものを見つけた。

ふっ……おまえたち読者よ、このまま俺がト〇とジェ〇ーな追いかけてく
ると思ったか？

俺はあるものの所に向かって走った。

「戻ってこおおおおい！」

愛紗はまだ追って来る……馬鹿め！

俺は超跳躍で高く跳んだ。

「な？」

愛紗は止まる事ができずにそのまま……。

穴に落ちた。

深さは千人は埋めれるくらいの穴だ。

何のために掘ったの？byナレちゃん

それは勿論いつか愛紗に追われた時のためさ

そして、俺は穴に近づくと……。

「ぶわはっはははははははははは どうだ愛紗……思い知ったか！
俺がいつまでも追いかけられるだけだと思っなよ」

俺はひたすら笑うが……。

何かが穴から跳びあがってきた。

あれは……。

それは着地すると……。

俺に向かって薙刀を振り下ろす。

「たとばあっ！」

さらに一撃

「がたきりばっ！」

また一撃

「らとらあああたたっ！」

駄目押しの一撃

「さごおおおおぞっ！」

怒涛の一撃

「たじゃどるっ！」

会心の一撃

「しやうたあっ！」

もういつちよな一撃

「たましいっ！」

そして、とどめの一撃

「ぶとていらあっ！」

俺は穴へと落ちていった。

ふっ……良いコンボなフルボッコだったぜ愛紗……ぶらかわにっ！

俺は地面に背中を打ちつけて意識を失った。

後日、愛紗と星と鈴々が合同訓練を行ったが、星と鈴々は自分の兵士の動きがかなり良くなっていて、強くなっている事に驚き、愛紗は困惑していたと言う。

番外編 蜀の人たちとの交流 張飛編

「ほーらいつくぞおおおお ヒヒーン」

「にははははは、お兄ちゃん速いのだ」

俺は鈴々ちゃんを上のにのせて馬になっていた。

鈴々ちゃんが楽しめるよう凄いスピードで走る。

「まだまだ行くぞおおおお！ ヒヒーン」

「じゃあー」

鈴々ちゃんは嬉しそうに笑う。

俺はしばらく馬を続けて、そして止めると……。

「ほらっ 高いー高いー」

「じゃははははは 高いのだ」

俺は高い高いをする。

それもしばらくすると止めて……。

「龍牙団、カモン」

俺が指を鳴らすと龍牙団の皆が何処からともなく現れた。

『龍牙団ここに集結！』

俺たちはキメポーズをとった。

後ろで爆発が起こる。

「おおっ、凄いのだ！」

鈴々ちゃんは拍手をする。

「さあ、行くぞ皆！」

『おう!』

一人が前に行くと、一人はそいつの上に乗る、もう一人が又、そいつの上に乗って行く。

そして最後に俺が乗る。

「凄く高いのだ」

又、拍手を貰った。

俺たちは元に戻る。

『どうもありがとうございました』

俺たちは礼をすると、龍牙団は去って行った。

「お兄ちゃんも龍牙団の皆も面白いのだ」

「ふふっ、いつでも遊んでやるからな 鈴々ちゃん」
俺は鈴々ちゃんの頭を撫でてやる。

「うん、なのだ」

鈴々ちゃんは嬉しそうに笑いながら言う。

番外編 蜀の人たちとの交流 趙雲編

俺は街をふらついていた。

そこへ……。

「おらー、こいつの命が惜しければそこを動くんじゃねえ！」

と、人質を取りながらお決まりなセリフを言うモブな盗賊の集団がいた。

さあて、どんな秘技で倒そうかな？

俺は向かおうとしたのだが……。

「待てい！」

突然上から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「誰だ！」

そう言うモブと一緒にそちらを見やると……。

「天知る、神知る、我知る、子知る！悪の蓮花の咲くところ、正義の華蝶の姿あり！」

かよわき華を護るため！華蝶仮面ただいま参上！」

パ○ヨンな蝶型の仮面を被り、槍を構えている趙雲がいた。

おおっ！ その手があったとは………よし、混ぜざるぞ

俺は人影からは見えない所に行くと……。

懐から機械的で黒い装飾に中心には赤く輝く石が着いている仮面を取り出す。

「変……身！」

俺は仮面を装着した。

私は槍で向かってきた三人を叩きのめしたが……。

「これ以上動けばこいつの命は無いぞ！」

賊の一人が人質の首に剣を突きつける。

「くっ！ 卑怯な真似を……」

賊どもは逃げるために後退して行く。

このままでは逃走を許してしまう。

私は逃がさないよう隙を窺う。

そして……。

「お前たちに罰を与えよう」

「な？……ぐあっ！」

人質をとっていた賊の剣を握っている方の手首を、急に現れた何者かが賊の右横から掴んで捻る。

賊は剣を落とす。賊の右手は曲がっていた。

痛さに人質を離すと、何者かは男の顔面に右拳を打ち込んだ。

賊は吹っ飛び、壁に激突する。

「お前は何者だ！」

賊の一人が言う。

「この世界にはびこる悪は全て俺が断罪しよう。我が名は暗黒闘士ガリユウ」

黒い仮面を着け、大きな布を着けた鎧も黒で染めている何者かは言う。

「さあ、制裁の始まりだ！」

ガリユウと名乗った男は賊に向かって歩く。

「華蝶仮面……いけるか？」

「勿論です」

私とガリユウと名乗った男は賊に向かって走る。

私は槍で、ガリユウと名乗った男は拳や蹴りで賊を倒した。

民たちから歓声上がる。

「協力感謝いたします」

「ああっ、気にするな……それより面倒な事になりそうだ……一緒に行くか？」

「そうですね」

私とガリユウは街から離れ、森へと向かって行った。

「さて、お疲れ様だな？ 星」

俺は仮面を外した。

衣装も元に戻る。

「なっ！……龍牙殿でしたか」

星も仮面を外した。

「一人だけ面白そうな事やってんなよ……俺も混ぜてくれ」

「ふっ、正義を守る者が多いに越したことは無い。歓迎しますぞ」

俺と星は固く握手をする。

「じゃあ、誓いに酒でも飲むか？ 良い店紹介するぜ？」

「良いですな……」

そして、俺は星を俺経営の酒屋に連れて行き、二人で酒を飲んだ。

「はあっ！」

俺に向かって槍が突き出される。

俺はそれに向かって右手に持ったハンドアックス（両刃に槍の穂先を着けた短い斧）を振るう。

「くっ！」

俺に攻撃してきた奴は槍を弾かれ、動きを止める。

手首を返して、そいつの首を狙って斧を振るう。

そいつは身体を逸らして、避けるが……。

「よっどー！」

右足の前蹴りを腹に向かって繰り出す。

「っ！」

そいつは後ろに跳躍して避ける。

俺はそいつに向かって、走ると首に向かって突きを放つ。

そいつは避けるが、俺は手首を返しながらひたすらハンドアックスを振るい、縦から横そして斜めに振り下ろし、斬り上げ、突く。

そいつは槍で防ぎ、後ろに下がって避ける。

俺は猛ラツシユで突きを放つ。

「くっっ！」

俺は屈みながら足を狙って、ハンドアックスを振る。

そいつは大きく跳びあがって避ける。

俺はさらに走って、回転しながらハンドアックスを首に向かって振る。

「ふっ！」

そいつは何とか避ける。

俺はそのまま回転しながら肘打ちを顔面に打ち込む。

そいつはそれを受け止める。

「まだ甘い！」

俺は腹に向かって左のボディブローを打ち込んだ。

「ぐはっ！」

そいつは力を無くし、倒れていく。

俺はそいつの首を左手で掴んで、ハンドアックスを首に添える。

「これで終わりだな？」

「参りました。」

俺はさっきまで手合わせしていた星を解放した。

「相変わらず強いすな」

「まあな……手合わせなら何時でも受けてやるから呼んでくれ」

「承知しました……」

俺と星がそう言っていると……。

「お兄ちゃん凄いのだ！」

「……信じられないな」

鈴々ちゃんに愛紗が現れた。

「鈴々に愛紗か……どうしたのだ？」

星が問いかける。

「いつまでたっても訓練に来ないから呼びに来たのだが……」

「そしたらお兄ちゃんと星が戦っていたのだ。星に勝つなんてお兄ちゃん強いのだ」

「はっはっは……俺だからな」

「鈴々とも手合わせして欲しいのだ」

「ん？ 良いよ」

「ならば、その次は私とも手合わせしてもらおうか」
「愛紗が言っが……。」

「じゃあ、二人一緒に戦うか？ そっちの方が速いしな」

「本気か？」

「俺はいつでも本気だぜ」

「そうか……」

そして、俺は鈴々ちゃんに愛紗と手合わせをする事になった。

「さーで、次はこれで行くか」

俺はハンドアックスから長刀に武器を変える。

刃の長さが槍の全長と同じぐらい長い。

俺は鞘に入れたまま構える。

「じゃあ、かかって来て良いぞ？」

「行くのだ！」

「行くぞ！」

鈴々ちゃんと愛紗が向かって来る。

俺は鞘から刀を抜き放つ。

『！』

何かを感じ取ったのだろう……二人は横へと跳んだ。

そして、二人の後ろの木が数本切断されて落ちる。

これぞ奥義『飛刀閃』だ。

「にゃー……」

「な……何だあれは!？」

「何って斬撃飛ばしたただけだが……出来ないのか？」

「できるか!」

そうなのか……。

「じゃあ、次は俺から行くぞ!」

俺は愛紗に向かって走る。

そして、首を狙って刀を振るう。

「うっ！」

愛紗はそれを避ける。

「流石だな……ならこつというのはどうだ？」

俺は手首を返しながら刀を振る。

「っ！」

愛紗は雑刀で防ごうとしたが、急いで避ける。

「まだまだ行くぞ？」

俺はひたすら刀を振るい、振り下ろし、斬り上げ、突く。

「くっ！……斬撃が曲がるなど」

そう、俺は剣術奥義「蛇撃」を使っている。

剣を振るう時に揺れを使って、剣撃を曲げているのだ。

そして、隙が出来た。

俺は奥義『ヤマタノオロチ百頭蛇閃』を使おうとした。

「にゃあああああ」

鈴々ちゃんに向かって来る。

「おっと、勿論忘れてないぜ？ 鈴々ちゃん」

「にゃっ！？」

俺は鈴々の突きを掴んで止めた。そしてそのまま持ち上げ、投げ飛ばす。

「にゃあああああ！」

「鈴々！ くっ！」

愛紗は俺に向かって来た。

俺は刀を振るう。

「何!？」

愛紗は屈む。

「ほう、秘剣技の一つ剣質変化（蛇）を避けるとはなあ」

俺は刀に気を纏わせ、長さを倍増して更に鞭のようなしなりをもっている刀へと変化させた。

「何てでたらめな……」

「前に言ったが……俺に出来ない事は無い!」

俺は刀を鞘に納める。

「行くぞ…今思いついた秘剣技と奥義の合成だ!」

『剣質変化（蛇）+飛刀閃+蛇撃+百頭蛇閃』

俺は鞘から刀を抜き放つ。

「うあっ！」

愛紗は薙刀で防いだが、吹っ飛んだ。

後ろの木々が根こそぎ倒れる。

「まだ続けるか？」

「……私の負けだ」

俺はそれを聞くと、刀を鞘に納めた。

「お兄ちゃんやっぱり強かったのだ」

「だろ」

「龍牙……又、手合わせしてもらえるか？」

「勿論だ。俺はいつでも受けるぜ？」

「そうか……絶対にお前より強くなってみせる」

「鈴々もなのだ」

「私もそのつもりだがな」

「ふっ、まあ頑張ってくれ」

星と鈴々ちゃんに愛紗は訓練をするため去って行った。

「何となく、寝るとするか」

俺は自室で寝ることにした。

俺は城の中を歩いていた。

「ひー、もう大変だよおー」

桃香の悲鳴が聞こえた。

「はわわわわ 頑張ってください桃香様」

「あわわわわ もう少しですから」

朱里ちゃんや雛里ちゃんの声も聞こえ、俺は部屋に入る。

「どうした？ 桃香」

「あつ 龍牙さん」

桃香の机には大量の紙が置かれていた。

「なるほど政務か……」

「はい……そうなんです」

「ふーん、ここはこうすれば？」

俺は提案を紙に書いていく。

「はわっ！ これは……」

「あわっ！ 凄い提案です」

俺は次々と紙を片付けていく。

「龍牙さん……政務の経験あるんですか？」

「ん？ 南陽の方でも政務やってたしな……ほい、終わり」

「ありがとうございます」

桃香は笑顔でわーい、休みだあとか言いながら、部屋から去って行った。

朱里と雛里ちゃんは俺の書いた紙を見ている。

「これ、すごいね雛里ちゃん」

「うん、これが天の人の知識なのかな？」

「何なら、いろいろと教えてあげようか？」

俺は朱里と雛里ちゃんに言う。

『お願いします』

朱里と雛里ちゃんは俺に頭を下げる。

「任せな」

そして、俺は朱里ちゃんと雛里ちゃんの部屋に行って、俺の国について色々語ったり、知識を纏めた本をあげたりした。

お礼と言われたよ……。

たまらないぜ

番外編 蜀の人たちとの交流

諸葛亮&鳳統編（後書き）

龍牙「次からは本編」

ナレ「楽しみにしててね」

作者「さあて、次は……」

次回予告「争いは戦場で起きてるんじゃない、軍議で起きてるんだ」

龍牙「何だって!」

作者「何か次回がどんな展開か読めそうなんだが」

「龍牙さん 戦です！ 違つぞ！ 戦は軍議で起きてるんだ！」

今回までのあらすじ

龍牙団 旅に出る。

星に会う。

城にご招待

愛紗と……。

「ほーら愛紗、捕まえてごらん」

「龍牙待つてー」

「あははははは」

「うふふふふふ」

そんな愛の……。「はあっ！」

「うげっ」

「何故か殴らなければいけない気がした」

ふっ……なかなか鋭いな ガクツ……。

今回でこの真・恋姫十無双のお喋りで愉快で刺激を求める何でも屋さんの話はお終いです。

応援ありがとうございましたb yナレちゃん

まだ終わってないから……

だよね b yナレちゃん

改めて本編始まり始まりー

今、私たちの元には手紙が来ていた。

内容は『帝を利用し、悪政をして洛陽を我が物にしている逆賊董卓を諸侯の力で倒そう』という物で、袁紹からの手紙だ。

「こんなの許せないよ！ 民たちの平和を脅かすなんて……天子様も早く助けないと……」

「桃香様のおっしゃる通り。力なき民に変わり、暴悪な為政者に正義の鉄鎚を食らわさなければ」

私は心から董卓に対して怒りながらそう言う。

「え？ 愛紗ちゃん？」

桃香様は首を傾げながら私にそう問いかける。

鈴々や星それに朱里や雛里も困惑していた。

どうしたというのだろうか？

「皆、どうしたと言うのだ？ 私は確かに愛紗だぞ？」

「……」

皆は何故か沈黙する。本当にどうしたとこのだろうか？

「龍牙、お前は何をやっているのだ？」

「うん？ 愛紗の心理描写を読者に伝えていたのさ」

「また訳の分からない事を……はあ！」

「あんくうっ！」

俺は愛紗に薙刀で叩かれる。

「これはおまけだ！」

「かざりっ！」

俺はもう一撃を貰ってそのまま窓から吹っ飛ばされた。

ふっふっふっ……これは小説だから口調や心理描写を真似てれば、
奥義や秘技を使うまでもないと思ったがな……愛紗さえ何も言わな
ければ……。

読者（お前たち）はこの天才的なトリックを見破れたかな！？

そんな落ちながら決めポーズしても意味ないよ　　後、ミステリー
や推理作家に謝ろうかb y ナレちゃん

すみませんでしたああああああ……がめるっ！

俺は地面に背中を打ちつける

め、めずるううう……ガクッ

俺は力尽きた。

やっぱり今回でこの真・恋姫十無双〜お喋りで愉快で刺激を求める
何でも屋さんの話はお終いです。

応援ありがとうございましたb y ナレちゃん

だから死んだわけじゃないから……これはノリだから。

まあね、二回もやったらあきらまれるしね　b y ナレちゃん

さて、戻りますか……。

「龍牙さんはこの連合に参加した方が良いと思いますか？」

俺は桃香にそう聞かれた。

会議自体は桃香と愛紗そして鈴々ちゃんが参加に乗り気で、星や朱里ちゃんと雛里ちゃんがこの連合の意図に疑問を持っているようだ……。

「そうだな……桃香は大陸の皆が争いが無く、平和に笑って暮らせるようにと願っているんだろう？ その思いは皆一緒か？」

「当然だ」

愛紗は言う。

「鈴々もそうなのだ」

鈴々ちゃんはそう言った。

「私も思いは一緒ですぞ……」

『私たちも桃香様の願いを叶えたいと思っています』
星と朱里ちゃんに雛里ちゃんがそう言う。

「そうか、だが手紙だけでは何も分からないよな……洛陽の民たち

が本当に虐げられているのかそれとも俺たちを利用するための嘘なのか……それに参加しない事で後に厄介なことになる可能性もある」

「……」

皆は沈黙する。

「だから参加しようぜ……そして事実を確かめればいい……周りの状況を見ながらそれに応じた対応をすれば問題は無いだろう……星が言いたいのは何も考えず行動すればやがては身を滅ぼす事になるって事だし、朱里ちゃんや雛里ちゃんが慎重になるよう意見を出すのはそれが軍師の仕事だからだろ？」

星や朱里ちゃんや雛里ちゃんは俺の言葉に頷く。

「思いは一緒と言ったよな？ 参加する事に異論は無いか？」

俺の問いに星や朱里ちゃんや雛里ちゃんは又頷く。

「なら、参加で決定だな……勿論状況をよく見ることも忘れないようにしよう……龍牙団も力を貸すぜ」

「龍牙さん……ありがとうございます」

「少し見なおしたぞ」

「お兄ちゃん何だかよく分からないけど凄いのだ」

「我らの事を理解した発言 良かったですぞ……」

「はわわわ 龍牙さんって本当凄いね 雛里ちゃん」

「あわわわ 皆の意見を聞いて、気持ちを考えて納得できる意見を出してるね 朱里ちゃん」

皆は口々に言う。

「龍牙さん やっぱり私たちのご主人様になっていただけませんか？」

桃香は俺に頼む。

「無理だ……俺には王の資格は無いし、さっきのだって皆の意見を聞いて思った事を言ったただけだ それに気ままな傭兵生活の方が好きだしな」

「うーん、さっきの意見にしても龍牙さんは王になる資格はあると思うんですけど……残念だなあ」

桃香は呟く。

「悪いな さあ、連合に参加するため準備しようぜ」

俺がそう言うと……。

「ふむ、腕が鳴るな」

「鈴々の出番なのだー」

出陣と決まっつて武将たちがテンションを上げるが……。

「あわわ、朱里ちゃん 兵糧とか軍資金とか、どれぐらい用意できそっつ?」

「うーん、出陣する兵数が決定していないから分からないけどそんなに多くは用意できないかも」

朱里ちゃんと雛里ちゃんが相談をしていた。

「どうしたんだい 朱里ちゃんに雛里ちゃん?」

俺は問いかける。

「あ、えつと……」

「……実はですね。連合に参加するにしてもお城にある兵糧の備蓄と、軍資金の方が足りないかもしれないんです」

「だったら貸してあげよう」

俺は懐からお金を入れた袋を出して、床に置く。

朱里と雛里ちゃんは袋の中を見る。

「はわっ!」

「あわっ!」

二人は驚く。

「これぐらいあれば十分だろ？」

「良いんですか？ 龍牙さん？」

桃香が聞いてきた。

「ああっ、いずれは返してもらおうけどな」

『ありがとうございます』

朱里ちゃんと雛里ちゃんが頭を下げる。

俺は優しく頭を撫でてあげた。

「私からも礼を言います」

桃香も頭を下げた。

「困ったときはお互い様だからな 力を貸すって言っただろ？」

俺は笑いながら言う。

桃香は微笑んでいた。

そして、準備も終わって後は連合に参加するだけだ。

「じゃあ行くか」

「はい！」

奥義？ 987 「ワープ」

俺が指を鳴らすと連合本陣に着いた。

「あれ？ 私たちいつ着いたんだろう？」

「気にする必要は無い」

「はあ……」

「ほら、あそこいろんな諸侯たちの旗があるだろ？」

俺はたくさん旗を指差す。

陣地の中は至る所に天幕があり、兵士たちもかなり居た。

「本当だ……兵隊さんたちもたくさんいるねえ」

桃香は感嘆しながら言う。

「さすが諸侯連合と言ったところでしょ……こうやって一同に会すると壮観ですね」

朱里ちゃんはそう言った。

「ふむ、陣地中央の大天幕に靡いている旗は河北の雄、袁紹だな」

星がそう言うと、愛紗、雛里ちゃんが旗を指差して何の旗かを言う。

袁術に孫策だ。

雪蓮もやっぱり参加したか……後で会いに行こう。

朱里ちゃんも旗を指差す。馬膾に他の官軍が来ている。

「あっちにいるのは、白蓮ちゃんだ」

公孫？の旗を指差しながら嬉しそうに言う。

知り合いか……まあ、本当の三国志でもそうだったしな。

「おーい、桃香！」

後ろから声がかかる。

「白蓮ちゃん！」

声をかけてきたのは

ピンク髪のポニーテールな女だった。

桃香の言葉から公孫？だろうな。

「久しぶりだな」

「お久しぶりだね 元気だった？」
と挨拶しながら、会話をする。

星とも元主と部下の関係だったからか軽く皮肉を言いながら会話をしていた。

「お前は見ない奴だな？」

公孫？が俺を見ながら言う。

「白蓮ちゃん、この人はね……」

俺は桃香の言葉を手で遮ると……。

「諸侯がこれだけ居るんだ……軍議でもあるんだろ？ そのときに紹介するさ……その時までは秘密にしておくぜ」

「そうか……たしかにもうそろそろ軍議が始まるな……その前に桃香を見つけたから誘おうと思って来たんだ」

「じゃあ、一緒に行こう白蓮ちゃん」

「ああっ」

「軍議は誰が行くんだ？ 俺も行くが……」

「はい、龍牙さんには来てもらうつもりでしたから良いですよ」

桃香はそう言う。

俺と桃香と朱里ちゃんと公孫？は軍議が行われると言つ袁紹の陣地へと向かった。

そこには幾人かの諸侯たちがいた。

その中には雪蓮もいた。

雪蓮は俺を見ると軽くウインクをしてきた。

俺も会釈をする。

そしてまだ来ない諸侯を待っていたのだが……。

「おーっほっほっほ！ おーっほっほっほっほっほ！」

消え失せろおおおおお！

俺は懐から取り出したグン○ニルを耳障りな声のする方向に投げた。

「じゃがいもっ！」

グン○ニルは金髪でクルクル頭をした女の右頬に炸裂して、そのまま逆回転して、俺の手元に戻ってくる。

うむ、やはりグン○ニルだ……女が悲鳴で何か言ったが、読者（お前たち）は気にするな。

「何ですの！？ 何が当たったんですの！？ 何か固いものが当たったんですが……」

おおっ、キョロキョロして辺りを見回してやがる。

良い気味だ　　ざまあみる　　俺はグン○ニルを懐に戻していた。

つつか、誰だよあの金髪面白ドリル女は……何か、パンが無ければ

ケーキを食べれば良いじゃないとか言いだしそうなんだが……この世界にパンもケーキも無いけどな。

あくまでイメージだが……。

俺がそんな事を思っていると……。

「あら、久しぶりに会ってみれば面白い事になっているわね麗羽」
実に良い笑顔を浮かべながらこつちも金髪クルクル（グン〇ニルを投げた女よりはクルクルじゃない）な少女が現れて言う。

側に夏侯惇と隣に青髪の女（夏侯淵だな）を連れている事から曹操だと思われる。

「きいいいい、久しぶりですわね華林さん」

大体こつちの金髪面白ドリル女の正体も分かったが、俺は絶対にそれを信じない。

「とにかく、これで主要な諸侯は集まりましたわね。華林さんが
びりっけつですわよ、びりっけつ」

ウザい言い方でも呷ってやがるぞ……殺したろつかない？

凄い殺意湧いてくるわあ……。

「……はいはい」

曹操は流していた。俺なら瞬殺するがな。

「それでは最初の軍議を始めますわ。知らない顔も多いでしょうから、まずそちらから名乗っていただけます事？ああ、華琳さんはびりっけつですから、一番最後で結構ですわよ。おっほっほっほ！」
うぜー、本当にウザい……ここにいたらストレスで死にそうだ。

「なあなあ、朱里ちゃん……まさかと思うし、多分そうなんだろうと確信もあるけど、一縷の奇跡を信じて言っよ……あれ誰？」
俺は朱里ちゃんに問う。

「……あの方がこの連合の主催者の袁紹です」

「……ふっ」

そうか……やっぱりな……。

俺はため息を吐く。

「桃香、俺帰るわ」

俺は桃香に言って此処から去ろうとするが……。

「え？ 駄目ですよ龍牙さん……まだ軍議も終わってないですし……」

桃香に止められる。

「だって、袁紹あんなだぜ……うざいし、むかつくし、あんな奴が居るのにまともな軍議ができると思っか？」

「それは私もそう思いますけど……」

俺と桃香がひそひそと言いつけていると……。

「そこ！何をくっちゃべってますのー！うるさいですわよー！」

金髪面白ドリル女がこっちを見て言う。

……プッチンプリン

「アアッ、てめえの声の方がうるさいんだよ！バカが！耳が潰れるからさっさとその口を閉じて一生喋るな！つうか死ね！今すぐ此処で死にやがれ！この金髪面白ドリルな生きる騒音機で大迷惑なおばさん」

俺は怒りのままに聞こえるように大音量に叫びながら言ってやった。

』……………』

おおっ、皆沈黙しちゃったぜ

「（ちょっと、龍牙さん！？）」

「（悪いが、俺は今かなりキレてるんだ）」
袁紹が口元をひくつかせて震えている。

「い……………今……………わたくしに対して何て言っただんですの？」
袁紹は俺に問いかける。

「は？ 何で俺がお前に対して何か言うんだよ？ 馬鹿か！」

『ええー！？』

うるさい、外野！

「死ねとか……うるさいとか言ってたじゃありませんか！」

「知るか！ それに俺はそんなこと言っていないし、覚えもない！
俺が言った証拠でもあるのか？ じゃあ答えるよ……何時何分何秒
で地球が何周したときに言ったのかをよ？」

「何を言ってるんですのあなたは！」

「何だ……言えないのかよ……だったらお前の空耳か幻聴だな、人
の言葉も良く聞こえないようだ。早く療養した方が良くないぜ？……」

「なあっ！？……」

クククク 信じられないって顔をしてるな、だがまだ許さん！

「ああっ、思い出した……鳴き声なら出したぞ ゲヘデトニスって
な」

「絶対それは嘘ですわ！確かにあなたはこの私を罵倒しましたでし
よう！？」

「ほう、そんなに言うんだったら誰かが聞いてたかもしれないから

聞いてみるよ？ 聞いた奴がいたなら俺も謝ってやるよ！」

「……その言葉に一言は無いですわね？」

「当然ある！」

「あるんですの！？」

百言はあるな

「それでは、白蓮さん！」
金髪面白ドリル女は公孫？を指差す。

「え？ 私かよ!？」

「あなたは聞きましたわね？ その男が私を罵倒するのを」

「そりゃあ……」「空耳を聞くのが多いようだな？ 斬り落としてやるよ」「」

俺は後ろで囁きながら鞘から刀を抜く音を聞かせる。

「悪い、麗羽。よく聞こえなかった！」

「白蓮さん!?!」

おっしやあ！

「ほら、幻聴だろ」

「じゃあ、そこのあなた！」

次は桃香だ。

「ええ！？ 私ですか！？」

「あなたは聞きましたわよね？ その男の近くに居るんですもの！」

「えっと……私は「今から素振りしよ、手元狂って誰かの耳をスパ
つと斬つちやうかもだけど」」

俺は刀の風斬り音を聞かせながら言う。

「ごめんなさい袁紹さん！ 私、何も聞いてません！」
桃香は頭を下げる。

「そ……そんな!？」

ふっふっふっ

「では、美羽さん！」
次は袁術だ。

「わ……わらは「今日は俺の愛刀が子供の血が欲しいとやけに叫んでるぜ よーし、分かったその願い叶えてやろう……今ここに丁度良いのが……クククククク……おっと、口が滑ったようだ
何でもない、何でもない」「」

俺は不気味に笑いながら言う。

「わらわは何も聞いてないのじゃ！」

袁術は震えながら言う。

ごめんな袁術ちゃん。

「美羽さんまで!？」

「もう空耳か幻聴だって認めたらどうなんだ？」

「ま……まだですわ! では、確か孫策さんでしたわね? あなたは聞いてましたわよね!」

雪蓮に聞く。

「私は……」

言いながら、こちらを見てきた。

「(雪蓮……協力してくれるな)」

「(わ……分かったから、とても良い笑顔で刀を鞘から抜いたり納

めたりしながら殺気を出すのは止めて！」

「（よし、後でいろいろ話そうぜ）」

「（ええ……）」

俺たちは心話で会話をした。

「私も何も聞いてないわ」

「な………何でですの!？」

「もう諦めたら?」

「きいいい、そのあなた! 聞いてましたわよね?」
栗色の髪のパニーテールの女に聞く。

「私は………」

女の頬に何か掠って後ろから突き刺さる音が聞こえた。

女が見るとそれは短剣だった。

「よし　短剣投げるの難しいから練習しよつと　間違って人に

刺さつちやうかもしれないが頑張るぞおゝ」

俺は両手の指に投げナイフを挟んで持っている。

「私は何も聞いてない！」

「こ………こんな嘘ですわ！」

袁紹は頭を抱える。

「もう後が無いな？ どうする？」

俺は実に嬉しそうな笑みを浮かべて言う。

「ぐっ！ 華林さんは聞いてましたわよね！」

「勿論聞いて……いたような気がしたけど聞いてないわ！」

「華林さん！？………そんな………」

やったぞ

勝利だ。

俺は人を百人ぐらい潰せそうぐらい巨大なハンマーを懐に戻す。

ふっふっふっ、正義は勝つのだ！

どこが正義なの？byナレちゃん

俺の存在自体がだ さてと……。

「なあ、袁紹さうん　もうお前の空耳か幻聴ってことで決まりだよな」

「きいいいいい、もう空耳でも幻聴でも何でも良いですわ！」

「よしよし、言質も取ったしこの件はお前の空耳か幻聴ってことで
決定　それじゃあ……

……土下座して謝罪しろや!」

『ええええええええええええ!?!?』

だからうるさいよ、外野。

「何で私がそんなことをしなければなりませんの!?!」

「はあく!?!?　何言ってるんだお前、何の罪もない俺を疑って言い
がかりをつけたろが!　だったら土下座して謝罪するのが普通だ
ろ?」

いや、それはおかしいbryナレちゃん

おかしくないよ　人生つてのは非常識な事ばかりだからな

「絶対にあなたなんかになんかそんなことしませんわ!」

「うっわ!?!?　マジかよ!?!?　こいつ、無実だった俺を皆の前で疑

って言いがかりをつけたせいで、俺の持つ繊細で綺麗に輝く宝石の
ような綺麗な心は傷ついたんだぜ？　なのに謝らないとはなあゝ
そうか、それが袁家の常識かあゝ？　名家の教養なんですかあゝ
？　だったら最低だ！　この大陸一の最低な人間の屑が！！」

「（いや、最低な屑はお前だろう！）」　公孫？

「（龍牙さん、酷すぎますよ〜）」　桃香

「（はわわわわ）」　朱里ちゃん

「（七乃、此処に鬼がおるのじゃ！）」　袁術ちゃん

「（はい、あれが人の皮を被った鬼ですよ美羽様）」　張勳

「（龍牙、それはさすがにやりすぎよ！）」　雪蓮

「（ひ……酷すぎる）」　さつき投げナイフを投げた人

「（ある意味尊敬できるわ……その神経や思考には……）」　曹操

「（何て奴だ……）」　夏候惇

「（まったくだな姉者）」　夏候淵

「ん？　皆なにか言った」

皆の方を向くと、皆は顔を一齐に反らす。

どうしたんだろう？

知らない byナレちゃん

「くう、何で私がこんな目に……」

クククク、納得いかないって顔だな？ だが、俺はこれでも鬼畜外道で最低な人間の屑と呼ばれているんだ 謝らせてやるぜ

「別に謝らなくても良いぜ かわりにお前のある事ない事……とくにない事、悪口、悪評、誹謗、中傷を俺の部下とともに言いふらしたり、物語を書いて読んだり、又は演じたり、歌にして歌うというありとあらゆる手段で大陸中の全ての人間に広めてやるから」

「何ですって!？」

これを聞いた瞬間、皆は思った。

『（鬼畜外道の中の王が此処に居る!）』

「くっ……」

おお 覚悟を決めたぞ

「疑って悪かったですわね！」

袁紹は軽い土下座とは思えないような土下座で謝った。

「あなた様の繊細で綺麗に輝く宝石のような心を傷つけてしまい、すみません。もう騒音機のような口を閉じて、一生喋りません……この大陸に生まれてごめんなさい。本当に申し訳ないです。どうもすみませんでした。大陸の中で一番素晴らしい人物である龍牙様は？」

「何で私がそこまで謝る必要があるんですの!？」

「チツ!……それがお前の土下座で謝罪かよ! 形だけか? 誠意も見せられないんだな……本当最低な屑だよお前は!」

「たかだか、身分の低い武将の分際でこの私を……!」

「俺に身分など関係ないわ」

俺は腕を組みながら言う。

「何て男ですよ!」

さーて、そろそろとどめを……。

「そのあなた、もうやめなさい」

………何で!?

「曹操さんだよな? こういう事はちゃんと決着をつけないと駄目じゃないか」

「そのせいで軍議が始まってすらいないのだけれど………」

「でも、この猿紹をもっと懲らしめねば」

俺は地面に文字を書きながら言う。

「読み方はあってるけど、字が似てるようで違うわよ………」

「あれ………遠招だったけ?」

「もっと遠のいているじゃない!」

「それはともかく、こんないじりがいのあって退屈しのぎに最適な玩……ゲフン……面白い人を見つけたのに」

「今、玩具って言おうとしたわね? それはいいからもつやめなさい」

「じゃあ多数決　　ここらで止めておいてほしい人は手を上げて」

皆がその瞬間、息の合ったタイミングでピッタリと手を上げた。

「しょうがないなあ、皆が言うなら止めてやるよ、良かったなあ……皆が言ってくれたから許してやるんだぜ?　バスケット、49対50で最後の逆転シュートチャンス」

「誰の事ですか!？」

「おまえ」

「私の名は」さあて、そろそろ軍議始めようぜ　まったく馬鹿な
袁紹のせいで無駄な時間使っちゃまったじゃねえか……」

「こ、この男は」

ケケケケケケケケケ　ククククククク　ガハハハハハハハハハハ
ハハハハハハ　ブワツ　ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ　なぐに
怒ってるんだかな

読者（お前たち）よ　待たせたな！　軍議始まるよ

順調に進むと思えないけどね

「龍牙さん 戦です！ 違つぞ！戦は軍議で起きてるんだ！」（後書き）

龍牙「ようやく軍議始まるよ……」

ナレ「そうだね」

作者「悪魔かお前はあああああああ！」

龍牙&ナレ「次回もお楽しみに」

作者「もう、嫌」

次回予告「軍議とは戦いである part 2」

龍牙「よし、やるぞ」

作者「次回も凄い事になりそうだ……」

「軍議」俺＋袁紹」二人による戦だけ！」（前書き）

龍牙「完璧な方程式だ！」

ナレ「そうだね」

作者「方程式でも何でもなくねえか!？」

龍牙&ナレ「本編始まり始まり」

作者「ふう……」

「軍議」俺＋袁紹」二人による戦だぜ！」

よう、読者（お前たち） 今俺は軍議の場にいるんだ

ただし、袁紹が駄目っばいからまともな軍議になりそうにないがな

それじゃあ、本編スタート

「それでは改めて、知らない顔も多いでしょうからまずそちらから名乗っていただけます？ あの男のせいで自己紹介すら終わっていませんわ！」

俺を見ながら言う。

何で怒ってんだろつか？ 俺、何もしてないぜ？

「……幽州の公孫？だ。よろしく頼む」

「平原郡からきた劉備です。こちらはわたしの軍師の諸葛亮」

「よろしくお願いします」

桃香と朱里ちゃんと公孫？は自己紹介をする。

俺は……。

「俺は後で良いから、誰か先に名乗ってくれ」

とりあえずパスをしようといた。

「それじゃあ、私は涼州の馬超だ。今日は馬騰の名代としてここに参加することになった」

俺が投げナイフを投げた女は馬超だったようだ。

ふーん、いずれは桃香の武将になるかな？ この世界は時代がごちゃまぜだから分からないけどな

「あら、馬騰さんはいらっしゃいませんか？」

「最近、西方の五胡の動きが活発だね。袁紹殿にはくれぐれもよろしくと言付かってるよ」

「あらあら、あちらの野蛮な連中を相手にしてはなかなか落ち

着く暇もありませんわねえ……」

「ああ。すまないがよろしく頼む」

「袁術じゃ、河南を治めておる。まあ、皆知っておるうがの！ ほつほつほ！」

おお、元気いっばいだな

「私は美羽さまの補佐をさせていただいています、張勳と申します。こちらは客将の孫策さん」

雪蓮は立ち上がると黙礼をする。

「さつきは協力ありがとうな」

「別に良いわよ、あそこまでやるとは思わなかったけどね」

「ははっ、俺だからな　んじゃ、又後でな……」

「楽しみにしてるわ」

雪蓮は座って誰も気づかれないようにしてから微笑する。

夏侯惇が注目していた。

まあ、借りがあるしなあ……雪蓮には。

「……典軍校慰の曹操よ。こちらはわが軍の夏侯惇に夏侯淵」

夏候惇と夏候淵は礼をする。

ここで俺はあることに気づいた。

袁紹 金髪ドリル大

曹操 金髪ドリル中

袁術ちゃん 金髪ドリル小

ぶはっ！ 金髪ドリル三姉妹が誕生してやがる！

ハハハハハハハハハハハハ くそっ、腹痛え。

「龍牙さん、大丈夫ですか？」

「ハハハハ……大丈夫だ……ク……ちょっとあること発見しただけだからな……ハハ……ふう」

「はあ、そうですね……」

発作のようになっていた笑いが何とかおさまった。

「それで？ あなたは何者なんですか？」
袁紹が俺を見て言う。

「良くぞ聞いてくれた袁紹！ さあ、ナレちゃんカモン！」

はい（*・・*）／

俺は後ろを向いて、指を鳴らす。

「何者だと聞かれれば答えるのが世界の常識……」

『！？』

諸侯たちは何処かから聞こえた声に驚く。

「しかし、男は常識を……」

良し、交代だ。

俺は外套をはためかせながら振り返る。

「常識なんて関係ない！ ルールや壁なんかぶっ壊せ、ただ求めるのは刺激のみ、つまらない日常など俺が破壊する。人生は楽しく過ごす事が一番。そんな俺はあなたの頼れる隣人で、皆の救世主。何か知らないけど天の御使いになっているこの俺は……神埼龍牙だあ　そして……」

俺は指を又、鳴らす。

すると上から何者かが着地していき、ピラミッド型になる。

「猫探しから暗殺まで何でもござれで金を貰います。今は頼れる部下を持っていて、俺と部下が集まって誕生するのは……」

俺は跳び上がって、ピラミッドの頂点になる。

俺は右腕の人さし指で空を差す。

『俺たちの名は龍牙団！』

「何でも屋であり、傭兵さ……今は劉備に雇われているぜ」

そして俺は頂点から降りて着地する。

龍牙団の皆も降りていき、俺の後ろで整列した。

『…………』

皆、沈黙してるな

「あなた、天の御使いでしたの!？」

「まあな」

「どこの下男かと思いましたが、やはり変な人なんですわね。龍牙団とやらも変な集団ですが…………」

俺はその瞬間袁紹に向かって、走り 身体の中に流れる氣を右足に集中する。

そして、跳躍しながら身体を右に回転させながらの氣で光り輝く右足の踵を袁紹の顔の右側面に打ち込む。

喰らえ! アクール グラ○ツ○ 風龍牙キツク!

「ぎゃん!」

袁紹は俺の必殺技を喰らうと吹っ飛んで倒れた。

「絶望がお前の終点だ…………俺を馬鹿にするのは良いが、俺の仲間を馬鹿にするのは許さん! さあ、お前の罪の数を数えろ!」

俺は左の人差し指と中指で地面にうつ伏せに倒れている袁紹に突き付ける。

「団長! そこまで俺たちの事を…………」

龍牙団の一人が言う。

「当たり前だ！ 龍牙団は皆で一つだからな」

『団長……』

龍牙団の皆は感動していた。

「お前ら……」

「団長……」

そして、俺と龍牙団は肩を組んで円陣を組む。

「俺たち龍牙団は……」

『最高だあああああああ！！』

そして、円陣を解く。

「よし、軍議もあるしお前たちは戻っていてくれ」

『オウ！』

そして、龍牙団は自分たちの陣へと戻った。

「さーて 自己紹介も終わったしさっさと軍議始めよう……って
皆どうしたの?」

諸侯たちは（。。。）な顔をしていた。

「まあ、良いや……袁紹やーい さっさと起きてくれ 軍議始ま
らないじゃないか」

俺は倒れている袁紹に近づいて身体を揺する。

しかし、反応が無い。

「袁紹？……ははっ、袁紹、それは冗談きついぜ？」

俺はもう一度揺すって見る。

しかし、袁紹は起きない。

……。

俺は急いで、身体の向きを変えて、仰向けにする。

そして、呼吸や脈を確かめた。

袁紹の呼吸と脈は止まっていた。

つまり……。

「死んでる！……酷い！ 誰がこんな事を……」

「（それはお前だろう！）」 公孫？

「いくらなんでもそれは駄目ですよ 龍牙さん……」 桃香

「はわわわわわわわわわ」 朱里ちゃん

「くっ！……刺客だな……皆気をつけろ！ 此処に刺客が紛れ込んでるぞ！」

「（のう、七乃？ どうやったらあんな悪びれもせず堂々と言つてとができるのじゃ？）」 袁術ちゃん

「（すみません美羽様……それは私にも分かりません）」 張勳

「（龍牙……あなたって本当に……）」 雪蓮

「袁紹……お前の事は忘れない……0.5秒くらいはな……」

「（駄目だ、私にはまったく訳が分からない）」 馬超

「仇は必ず取ってやるからな……絶対に許さんぞ！袁紹を殺した奴め！」

「（一度、この男の頭の中を見てみたいわね……）」 曹操

「（なあ、秋蘭……袁紹を殺したのはあいつだよな？）」 夏侯惇

「（ああ、そつだぞ姉者……）」 夏候淵

「よし、今から袁紹の弔い合戦だ！ 皆行くぞ！」

『……………』

あれ？ 皆反応悪いな？

もう、そろそろ気が済んだ？b yナレちゃん

ただだけど……………終わりで良いか

「皆、今までののは全て冗談だよ さっさと袁紹生き返らすね」

『は？』

皆、訳が分からないって顔だな。

「龍牙真拳奥義『蘇生拳』」

俺は右手と左手を回して円を描き、逆に回して又円を描いた後、右拳を袁紹腹に打ち込む。

凄まじい音が響いた。

「がはっ！」

袁紹は目を覚ました。

『!?!』

皆ビツクリしてるぞ

ノリって凄いな……ただ殴っただけなのに

「げほっげほっ……な……何があつたんですの!?!」

袁紹は咳きこみながら起き上がった。

「おおっ 起きたか袁紹……いやー心配したんだぜ 皆の自己

紹介が終わった後、急に倒れたからビツクリしたじゃないか」

「そうでしたの……そういうば顔と腹が凄く痛いですわ……」

「それはいけないな さっさと軍議を終えて休まないと……」

「ええっ、その前に私の自己紹介が終わっていないような気がしま
すし、私は……」

「それももう終わってるぜ いやー流石は大陸一と言われている
名家の中の名家である袁家だ。袁紹……俺お前の自己紹介に感動し
たわ ここまで感動したのは初めてだぜ 本当に見事だった」

「そうなんですか?」

「ああっ なあ、皆?袁紹の自己紹介素晴らしかったよな」

皆は凄い勢いで首を縦に振る。

「流石だな　皆感動したって言うてるぞ」

「おーっほっほっほ！ 私にかかれば当たり前前の事ですわ。なんせ三日三晩考えた名乗りなのですから　おーっほっほっほ！」

馬鹿で良かった　名乗らせたらウザい事間違いないからな

何で名乗りに三日三晩考える必要があるんだ……。

ところで何でさっき龍牙は○火大○刀並みの大剣を持ちながら殺気を出してたの？

何でだろうな？

「では、軍議を始めさせていただきますわ！ 僭越ながら、進行はこのわたくし！ このわ、た、く、し、袁本初が行わせていただきますわ！おーっほっほっほ！」

うむ、やはりうざいな……さっさと始めろや

軍議自体をめちゃくちゃにしてる本人が言うことじゃないよね
b
よしちゃん

まあね

照れる必要は無いよ byナレちゃん

え？ そう？

「いいから早く始めなさい」

おっ、曹操ナイスだ

それじゃあ俺も……。

「さて、では……最初の「まずは現状と目的の確認だよな」「」

「え……ええっ、そうですね。この私が集めた「反董卓連合軍の目的は都で横暴を働いているという董卓の討伐だが、俺や劉備は董卓を知らない。誰か知ってる奴はいるか？」「」

「わらわも知らんのじゃ。どこぞの新参者が小領主じゃと思つておつたが、聞いた覚えのある者はおるか？」
袁術ちゃんが言う。

「私も同じだ。本初は？」

公孫？は袁紹に問うが……。

「わ……っ、わたくし！？ そんなどこの身分とも知らぬ者を、わたくしがいちいち知っているとお思いのですの？」

いや、お前は知つとけよ！ 知らないのに討伐しようとして、連合を組むな！ 下調べは絶対に必要だったのに……ああ、もうこの連合自体怪しくなってきた。

多分正当性は無いな……主催者があれだし……。

「知らないか……じゃあ、董卓の事は逐次情報を集めるって事で良いな……この考えに反対か何か言いたいやつはいるか？」

俺は皆に問う。

皆は沈黙していた。

「じゃあ、無いってことで……袁紹、進めて良いぞ？」

「つつ、次「都までどうやって行くかだよな ……」」

「……そ、そうですね。この大軍団をわたくしがどうやって率いる「後でくじか何かで順番を決めるか……その順番で行軍すればいいし、どうせ戦闘になったら配置を変えるしな……問題は無いはずだ」「

「良いのではなくて？ 経路は？」

俺の意見に曹操が賛成する。

「けっ……経……」

「七乃。どういつ道程になるのじゃ。皆に説明してたもれ」

袁術は張勳に言う。

「……」

袁紹は黙っている。

よし、よし

「はいつ。この大人数ですから街道に沿った移動になりますねー
間の大きな関所は？水関と虎牢関になりますから、この辺り、も
しくはその前後の広い土地で戦闘が起ると予想されまーす」

おう、まるでバスガイドみたいだ

「そ…そうですわね。きっとそのあたりで戦闘になるはずですよー
張勳さん分かりやすい説明ありがとうございます」

「はい。どういたしまして」

張勳は軽く頭を下げる。

「分かるなら関所の将も教えてくれない？」

「はい。？水関は華雄。虎牢関は呂布と張遼と報告が入っていま
すね。ただ、この連合が出来る前の調査ですから間者を放って改め
て調べる必要があると思いますけどー……」

「重ね重ねありがとな」

「いえいえ、お気になさらずに……」

張勳は軽く微笑んでいた。

「あのね、白蓮ちゃん。調査くらいなら、わたしたちがやるよ？」

朱里ちゃんが、まずはこの辺りの小さな任務を引き受けて、様子を見た方がいいって言ってるし……」

「そうか？　じゃあ？　水関の偵察は私の所でやろう。機動力の高い兵もいるしな」

「なら、？　水関の調査は公孫？　たちでいいわね。さしあたり必要なのは、そんなものかしら」

桃香と公孫？と曹操の意見で大体は決まった。

もう終わるかな？

あつ！　袁紹が何か言いたそうにしてる。

「まつ！　まだ、大事な議題「？　水関を誰が攻めるかだな……」」

「それは「というのは置いといて、もつと重要な事があるんだな？　早く言え！」」

何か馬鹿なこと言いそうだからな……さあ、どう来るか……。

「ええつ、さて皆さん。我々我々連合軍が効率よく兵を動かすにあり、たった一つ、足りないものがありますの。兵力、軍資金、そして装備……全てにおいて完璧な我等連合軍。而してただ一つ足りないもの。……さて、それは何でしょう？」

うわーい、分かった　総大将だああああ

どうでもいいのキタアアアアアアアアアアアア

『……………』

ほら見ろ、皆呆れてるぞ

絶対お前がやりたいんだろっ……………はあっ……………。

俺はアホらしくなって、立ちながら休憩するため寝ました

体内時計で1時間後に俺は目を覚ました。

「何度も言いますけれど（さっきと同じ内容ってかループ）」

まだやってたのか!?

それはそうだろう……明らかに連携の取れない連合の総大将など誰も引き受けない。

そして、ただ一人やりたそうにしてる金髪面白ドリルの生きる騒音機な馬鹿が立候補をしない。誰も責任を持ちたくないから推薦せず、何も言わない。

だからこの馬鹿が騒音機の名の通り、喋りまくっていると……。

何と言うネガティブスパイラルだ……やっぱり帰るかな？

「それですね……」

うおっ！ 何か袁紹が諸侯たちを見回してる！ 諸侯たちも目を逸らしてるしな……俺も早く……くそっ！ 間に合わなかったか！

「龍牙さん」

「何だ？」

「この連合に足りないもの、貴方に分かりますか？」

「袁紹よ……それは愚問だな！ 分かりやすすぎて問題にすらなりはしない！」

「ええ、ええ！で、答えは？」

「協調性と連帯感」

わおっ 皆目を逸らしちゃった

「…………それは置いておきましょう」

置いたらいけないんだけどな

「答えは総大将だろ…………はあ」

俺はため息を吐く。

「その通りですわ！」

あっ、調子に乗っちゃった！

「ですが、まず第一に、これほど名誉ある目的を持った軍を率いるには、それ相応の家格というものが必要ですわ。そして次に能力。気高く、誇り高く、そして優雅に敵を殲滅できる、素晴らしい能力を持った人材こそが相応しいでしょう。そして最期に、天に愛されているかのような美しさと、誰しもが嘆息を漏らす可憐さを兼ね揃えた人物。…………そんな人物こそ、この連合軍を率いるに足る総大将だと思っております、如何かしら？」

そして始まる無限ループ

皆も疲れてるな…………当然だが。

「ああつ、急に頭が痛くなってきた　此処にいとまずいから治すために俺帰るな」

そして俺は帰ろうとしたが……。

誰かに肩を掴まれた。

桃香と公孫？だった。

『絶対に逃がさん（逃がしません）』

同時に言いやがった！？……ん？

大量の殺気のようなものを感じた。

感じるままに見回すと諸侯たちが俺を見てきている。

その目は『逃げたら殺す』と語っていた。

ひい！？　皆さん何か恨みとか混じってません！？　怖いんですけど！？

しょうがない、何とかするか……。

「袁紹……ちょっと良いか？」

「はい、良いですわよ」

「えー皆さん、長い軍議でお疲れでしょう……そんな皆さんのために音楽を奏でたいと思います」

「音楽ですか？」

袁紹が言う。

「ああつ、それではお聞きください」

俺は左手を指を鳴らし、右足で地面を踏んで音を出して、口笛を吹く。

リズムは不規則にして、音楽を奏でる。

「なんだか……頭がボウつとしてきますわ」

よし、じゃあ歌いくか

俺は右手で指笛を鳴らす。

そして、歌う

「身体から力を抜きましょう」

「……」

袁紹が沈黙する。

「そして、何もあなたは考えない」

袁紹は沈黙したままだ。

「俺の言うことだけを聞けば良い」

歌い終わって、袁紹を見る。

目は開けているが、意識は無い。

秘技？5「音操り」だ 本当便利だな。これは

じゃあ、後は……。

「よし、袁紹……お前が総大将をやるんだ」

「……私が総大将を……」

「そつだ……お前が自分で立候補したんだ。そして俺が手を叩くと、お前は目を覚まして俺が音楽を奏でたことは忘れるが、自分で総大将に立候補したと言う記憶は残る。いいな？」

「……分かりましたわ」

「それじゃあいくぞ」

俺は手を叩く。

「……はっ！ というわけで連合軍の総大将はこの私がやりますわ！ おーっほっほっほー！」

「はい、総大将は袁紹に決まりました。皆拍手」

諸侯たちは啞然としていたが、拍手をする。

「おーっほっほっほー！ おーっほっほっほー！」

ふう……馬鹿を相手にするのは疲れるぜ

「……………で？ 総大将の袁紹よ。なんか作戦あんの？」

あってもどうせ愚策だろうがな

「作戦？ そんなものありませんわ」

ん？……………はい！？

「ちょっと待ってくれ……………作戦が無いならどうやって進軍すんだ？」

「それは決まっていますわ」

「そうか……………そうだよな。いやーびっくりしたぜ　で？ どうすんだ？」

危ない、危ない　もうちょっとで怒りのままに袁紹を殺すところだったぜ

「雄々しく、勇ましく、華麗に前進ですわ！」

……………。

「……………すまん、良く聞こえなかった……………もう一回言ってくれるか？」

「仕方ありませんわね……………もう一度言いますわ！雄々しく、勇ましく、華麗に前進ですわ！」

「……………はあ」

俺はため息を吐く。

……。

気がついたら桃香と公孫？が俺の身体を掴んで静止していた。

「離してくれないか？ 今なら例え百頭蛇閃ヤマタノオロチで切り刻んでも、『あつ、しまった！ 殺っちゃったぜ…… 八八八八八八』で済むよ
うな気がするから」

「気持ちは痛いほど良く分かるが、落ち着いてくれ！」

本当馬鹿すぎるだろ……比較的温厚な俺を怒らすとは……袁紹恐るべし！

とりあえず落ち着いてきたので、いつの間にか両手に持っていた刀を鞘に納めて離してもらいました

「お前は馬鹿か！？ 要塞相手に突撃してどうすんだ！」

「な……この素晴らしい作戦の何処に文句があるんですの！？」

「ありすぎてどう言えばいいのかわらんわ！ この大陸中一番で史上最低な馬鹿が！ そこまで言うんだ……お前が先陣を務めるんだな？」

「……コホン、わたくしには総大将として中軍やや後方に陣を構え、皆さんの活躍を見届けると云う義務がありますので無理ですわ」

「ふざけんなあああああああああああああ！」

くそっ！ 何てやつだ……非常識すぎんだろ！

龍牙が言うことじゃないよね b y ナレちゃん

「じゃあ、誰が先陣を務めるんだよ？」

「そうですね……それでは……」

袁紹は諸侯を見回す。

むっ！ 桃香の方を見てやがる……まずい！

「り「じゃあ、劉備ではなく龍牙団だけで先陣を務めてやるっ」……
……そうですか……任せますわ」

「ああっ、そしてお前に要求がある」

「要求？……聞くだけなら構いませんが」

「ああっ、聞け……つつか叶えろ！ 一つ兵糧一年と半年分、二つ
兵数三万を俺に寄越せ……そしたら行ってやるよ」

「なあっ!?!?」

驚いているな 当然だが……皆さんも驚いてらっしゃる

「ふっかけすぎとかもっその範囲を超えていますわ……どうして「
の私が……」

「龍牙団はこの中では弱小戦力だからな……それぐらいしてもらわないと壊滅しちまう……それは劉備もだがな……お前が要求を叶えてくれないなら俺も劉備も絶対に行かない……孫策や曹操とか他の奴に命令すれば良いだろ？」

「くっ！……足元を見ても問題ありますでしょう！」

「本来なら兵数五千に兵糧半年でも良いんだ……多いのはお前のせいで傷ついたり、むかついたりなどお前の馬鹿さに付き合わされてしまった事に対する慰謝料の代わりだからな」

「慰謝料ですよ！？」

「ああっ、さあ、はやく寄越せ！」

「し……しかし……」

「それじゃあ、勝負をしよう」

「勝負？」

「そつだ……俺が勝つたら兵糧一年と半年分に兵数三万を、お前が勝てば兵糧一年分に兵数一万五千を俺に寄越す。どうだ？……まあ、まさか大陸で一番素晴らしい名家の中の名家である袁家だ……この勝負を受けないなんてことは無いよな？」

「……良いでしょう！ その勝負乗りますわ！」

「……何て男なの……たちが悪いわ」

「どうしたんです華林様……」

「勝負に勝とうが負けようが、要求を受け入れるのが当たり前になっ
っているのよ……勝負もうまく受けさせているしね……」

「んんっ?……」

「ふう……つまりだ、姉者。どちらにしても袁紹は兵と兵糧を龍牙
に回さなければいけないってっているんだ……たちが悪いと言ったの
は龍牙が勝っても負けても、袁紹が龍牙に回す兵と兵糧の数が多
いという点だな……それに勝負を受けるように袁紹をうまく挑発して
誘導している」

「……おおっ!」

『はあ……』

という曹操と夏侯惇と夏侯淵の会話。

「はわわわ……まさか要求を呑むしかない状況を作るなんて凄すぎ
ます……」

「凄いね、龍牙さん」

「やってることは鬼としか思えないんだが……」

桃香と朱里ちゃんと公孫?の会話。

「七乃……これは一体どういうことじゃ?」

「美羽様は分からなくて良いですよ」

「龍牙って交渉？も出来たんだ……袁紹、あなたには同情するわ……」

袁術ちゃんと張勳と雪蓮の会話。

「……鬼だ」

馬超の呟き。

おおっ、皆言っちゃってくれるね

龍牙って本当鬼畜外道王だよね

鬼畜外道な王で悪魔とも呼ばれてるな……交渉の魔物とも呼ばれてるが

「それで？ 何で勝負しますの？」

「この軍議、かなり長い時間使ってるからな……ちやっちやと決めようぜ」

「あなたのせいでもあるのだけれど……」

あれ？ そうなの曹操さん？

「……それじゃあ、勝負の方法は石をどれだけ遠くに投げれるかだ」

「……はい？」

「勝敗は簡単。あらゆる手段を使って石を相手より遠くに投げた方の勝ちだ！ 簡単だろ？」

「それだけですか？」

「そうだけ」

「分かりましたわ……始めましょう」

というわけで勝負開始

袁紹は石を拾った。

「これを投げれば良いのですわよね？」

「ああっ、さっさと投げてくれ」

「それでは……えいっ！」

袁紹は石を投げた。

石は飛んでいき、突如巻き起こった風に運ばれてさらに距離を増す。
そして地面に落ちた。

50メートルくらいか……幸運なんだな

「お〜っほっほっほ！お〜っほっほっほ！やはり天はこの袁本初を
選んだようすわ！」

「おう、こんなくだらない勝負に盛り上がれるとは幸せだな」

「それは負け惜しみですか？お〜っほっほっほ！負け犬の遠吠えほ
ど無様なものはありませんわ！お〜っほっほっほ！」

俺は高笑いを無視して、石を右手で拾う。

「はあああああああああああああああああ！」

気合いを入れて、秘技？45「筋力進化」を使う。

俺の右腕の筋肉は巨大となって膨れ上がった。

「なあっ!？」

そして俺は石を投げる。

石は凄まじい勢いで飛んでいき、袁紹の石を超えて遠くの間まで向
かう。

山が砕けた。

『……………』

皆さん（。。。）な顔をしてらっしゃる

俺は右腕を元に戻した。

「というわけで俺の勝ちだ　お疲れ」

「ちょ……………ちょっと待ってください!」

「ん?……………何?」

「あんなの卑怯ですわ!」

「あらゆる手段を使ってと言ったじゃないか?」

「ぐっ!……………それはそうですが……………」

「皆、今の勝負に納得いかない人は手を上げてね……………（いたらそいつを……………）いやいや　さっき小声で言ったことは気にしないでね……………独り言だから　さあ、どうかな?」

皆は手を上げなかった。

「皆は納得しているようだ……………何か問題でも?」

「くっ!……………ありませんわ」

「これで軍議は終わったな？」

袁紹に問う。

「ええっ……そっはい、解散 皆お疲れ様でしたー イヤー長
かった、長かった……誰のせいであんなに疲れたんだか……疲れたぜ
さっさと帰ろ」

『お前のせいだろおおおおおおおおおおおおおおお！』

うお 全員ピッタリのタイミングで突っ込み来たな 見事だぜ

こうして、軍議は無事に終わりました チャンチャン

「軍議」俺＋袁紹」二人による戦だぜ！」（後書き）

龍牙「ようやく軍議終わったぜ」

ナレ「良かったね」

作者「お、次回もよろしくね　バイバイ」

次回予告「関所をぶち破れ！」

龍牙「俺は全てを破壊する！」

作者「……おい」

「難攻不落の関所？ そんなもの近代兵器使えば楽じゃん（使わんけど）」（前

龍牙「おい、作者ああああ。更新に一カ月かけるとは良い度胸だな」

ナレ「本当だよね」

作者「待て、とりあえず落ち着け 構えているFNミニミニの軽機関銃を下ろすんだ」

龍牙「だが断る！」

作者「待て待て！ 仕方ないだろう此方にも都合と言う物が……」

龍牙「ほう、七月二十三の誕生日にグラODEのライブに行ったり、今日は仮○ラ○ダーとトラ○ス○○の映画を続けて見るぐらい余裕があるのにか？」

作者「そ……それは」

龍牙「それに並行連載で書いてる作品の方が俺のより人気があるってどういことだあああああ！」

作者「こっちだって予想外だったんだよ!？」

龍牙「問答無用、ゲームオーバーだ!」

作者「うわああああああああ」

龍牙&ナレ 「それじゃあ久々に本編始まり始まりー」

「難攻不落の関所？ そんなもの近代兵器使えば楽じゃん（使わんけど）」

「本当、作者の野郎め……まだまだ殺し足りないぜ。何がライブだ、何が映画だ。俺だってライブに行ったり、映画見たかったのに……腹立つわぁー」

もう、許してあげなよ。あれ以上やって書く気なくしたらどうするの？ byナレちゃん

音操り無理やり書かせるけど？

うわあ、一応は創造主なのに敬意もくそも無いや byナレちゃん

まあ、俺だしね 俺を作ったあいつが悪いのだ ケカカカカカカカカ

だね byナレちゃん

「何でさっきから咳きながら笑ってるの？」

あら、口に出てたか……心理描写のつもりなんだけど、俺って考え事がすぐ口に出ちゃうのよね。

「気にするな。お前には言っても理解できないしな」

「ぶー、何よそれ」

雪蓮はふくれっ面になる。

おっと、読者（お前たち）への挨拶を忘れていたな。読者（お前たち）おはよう、こんにちわ、こんばんわ。

久しぶりだな

俺は今、軍議（金髪面白ドリルの生きる騒音機な馬鹿遊び）を終えた後、桃香と朱里ちゃんを先に陣へと戻らせ、雪蓮と二人だけ話している。

「まあ、機嫌直せよ」

俺は頭を撫でてやる。久々だなあ……。

「また、そうやって子供扱いして……」

「じゃあ、猫扱いならいいか？」

俺は猫の顎を撫でるように、雪蓮の顎を撫でた。

「もっ……」

呆れつつもどこか満足そうだ。

「さっきは協力ありがとうな、雪蓮」

「別に良いわよ。っていつか袁紹にあんなことするとは思ってなかったわ」

「まあ、俺だしな　立場なんか気にしないぜ」

「普通なら殺されてもおかしくないわよ？」

「やれるならやればいいさ……返り討ちにするけどな」

「できそうだから怖いわね」

「できそうじゃない……出来るんだ」

「そうね……」

俺と雪蓮は少しの間、笑う。

「ねえ、どうして急に旅に出たの？ 劉備の所に行っちゃっし……」

「やっぱり、いろんな奴と交流したっていうのが大きいな……同じ場所ですらすのも飽きてくる」

「でも、急に居なくなることないじゃない」

「言っても許可しないと買ったし、それに贈り物だって付けただろ？ 服着てくれよな……見るの楽しみなんだからよ」

「また、帰ってきてくれる？」

「勿論だ」

「そう、良かったわ」

「それじゃあ、出陣の準備してくるぜ」

「ええ、後で皆にも顔を見せてあげてね」

「おっ」

俺は雪蓮と別れて自分の陣へと戻った。

「正気なのか！？ お前だけで？水関を攻めるなど……」

「あつ……ああ。袁紹には十分な戦力を貰えるし……俺一人で十分だぜ」

陣に戻るといきなり愛紗が叫んだのでびっくりした。

「いくら龍牙殿でも一人で？水関を落とすのは無理と思いますが……」

「お兄ちゃん、大丈夫なのか？」

星と鈴々ちゃんも心配するように言う。

「？水関は難攻不落絶対無敵七転八倒と言われている虎牢関と同じような要塞ですよ……何か策があるのですか？」

雛里ちゃんが言う。何その四字熟語の組み合わせは……。

「策？ 無いよそんなもの」

『え！？』

「だって、関所なんかもん壊せば終わりだろ？ 策なんか要らないって」

「それが大変だから聞いているんですけど……」

「龍牙殿は門を容易く壊せるのですかな？」

「おう、勿論だぜ。皆は俺の戦を見るだけで良い。何なら酒の肴に

でもすれば良いさ」

本当、門を壊すのは楽だからな。どうやって壊そうかな？

「では、そうさせてもらいましょう」

「お兄ちゃん、凄い自信なのだ」

「言った以上は責任を取ってもらおうぞ」

「はわわわわわ」

「あわわわわわ」

「龍牙さん、頑張ってくださいね」

「ああつ、とりあえず袁紹の兵にすこし訓練してくるぜ」

俺は自分の天幕に戻り、三万の兵に龍牙団の皆で訓練をした。

その結果……。

「うおおおおお、龍牙団最高うううううう！」

「龍牙様こそ俺たちの主だあああああ！」

なんか洗脳入ってない？byナレちゃん

何を言ってるんだい？あいつの物は全て俺の物だから良いの

ジャイ〇〇ズム？byナレちゃん

まあ、そう見えるかもね

「それじゃあ、皆……？水関を落としに行こう。合言葉は？」

『敵は全てサーチ&デストロイ+キル・ゼム・オール！』

あれ？ 人生がどうたらじゃなかったけ？byナレちゃん

何を言ってるんだナレちゃん！ 戦いは常に非情だ……こっちも非情にならないと戦には勝てないんだよ！

そ……そうなんだ……。byナレちゃん

さーて、行こうかね。

？水関の城壁から連合軍の陣を見ている将が二人いた。

一人は胸にサラシを巻いて、着ているものは羽織だけの紫色の短髪で後ろを括っている。

一人は銀の短髪でこちらにも軽装な衣装である。

「いやー、仰山居るなあ……壮観や」

「ふっ、どれだけ来ようこの私の武で打ち砕いてやる」

「あんだ、分かっとなるんか華雄？ 詠が言つてたやる。籠城して連合軍が瓦解するのを待てる」

「しかしだな張遼、戦というのは攻めた方が……」

「しかもかかしもあらへん。ここは徹底的に？水関に籠城するで」
「む、むう……」

関西弁を喋った紫の髪の女が張遼で、銀の短髪が華雄のようだ。

「本当、大丈夫なんかいな……」

「猪が居ると大変だな……」

「ああ、そうなんよ……って、あんた誰や！」

張遼は後ろに振り向くと跳び下がった。

武器を構える。

張遼は薙刀（愛紗のと似ている気がする。）華雄は大斧だ。

「誰だつて……昔良く遊んだじゃないか……田中だよ」

「せやったな。いやー懐かしいわって……何でやねん！」

胸にビシッと手を叩きつけられた。

「分かってるな」

「あんたもやるやないか」

俺と張遼は握手をした。

「張遼、何をやってるんだ！」

「は……つい、やってもうた」

張遼は又後ろに下がる。

「あんたはほんま何者や！」

「いつからここに入って来た！」

「俺は反董卓連合に雇われている傭兵の神崎龍牙。天の御使いとも言われているがな……どうやってここに来たかは気配を完全に消した後に猛ダツシユで走って、跳躍してここに着地したと言うのは秘密だ……でも、このままじゃ俺は不法侵入で訴えられるなあ……というわけで」

俺は走って跳躍しながら前転して着地した。

張遼と華雄は呆然と見ているようだ。

俺は門前まで歩く。

「お邪魔しまーす！」

俺は右腕の拳を門に叩きつけた。

門は粉々に破壊される。

「龍牙団、カモン」

俺は指を鳴らす。

どこかから三万五百人の龍牙団が現れた。

そして、？水関の中へと入って行く。

これなら問題は無いはずだ。

門を壊して入るのも犯罪だよ。b y ナレちゃん

ええええええええええ！？ マジで！？

うんb y ナレちゃん

まあ、戦中だから問題ないよ。

開き直り早いなあb y ナレちゃん

「難攻不落の関所？ そんなもの近代兵器使えば楽じゃん（使わんけど）」（後

龍牙「これからは一カ月もかけんなよ」

作者「は……はい（ガクッ）」

龍牙&ナレ 「次回も楽しみにしててね、バイバーイ」

「門は破壊したから、後は落とすだけ……簡単、簡単」(前書き)

龍牙「よし、俺はハイテンションで行くぜえええ!」

ナレ「僕も絶好調だよ」

作者「何故だ……手が勝手に……」

「門は破壊したから、後は落とすだけ……簡単、簡単」

よう、読者（お前たち）　今は戦中だから挨拶は省かせてもらうな

本編開始だ。

「まさか門を破壊するとはやってくれるやないか……龍牙って言うたっけ？ あんたは化け物かいな」

「城門を壊すなど呂布ですら出来んぞ……」

俺が？水関の中を歩いていると、張遼と華雄が現れた。

急いで城壁を降りたらしい。

「うちは張遼や」

「私は華雄だ」

二人は武器を構える。

「俺は神崎龍牙だ。まあ、二人でかかって来いよ」

「そうさせてもらっわ……良えな、華雄？」

「ああ、龍牙と言う男は呂布以上の実力を持っているようだからな……」

俺は懐から二本の刀を取り出した。

「これで相手をしてやるっ」

「あんた、それで戦う気なんか？」

「ああ、そうだが？」

何を言っているのかよく分からんな。

「本当にそれで戦うんだな？」

二人とも何を言ってるんだ？

龍牙、刀を良く見てみてよ

ナレちゃん？

俺は刀を見る。

あれ？ これ刀じゃなくて俺が日頃育てている人参と大根じゃん…
…。

天幕においてきちゃったあああああああ！？

うおおおおおおお……orz

まあ、良いや

え？byナレちゃん

「お前たち相手ならこれで十分だ」

俺は人参と大根を構えながら言う。

「ほう、言うやないか……うちらを馬鹿にするとはなあ」

「まったくだ……後悔させてやる」

俺と張遼と華雄は相手に向かって行く。

「なあ、愛紗よ……さきほど龍牙殿の天幕にこんな物があつたのだ
が……」

「これは刀とか言う奴だったな……じゃあ、あいつは何で戦つつも

りなのだ？」

とか言う星と愛紗の会話が会ったとか無かったとか……。

俺は距離を取るため後ろに跳躍する。

くそう、俺の野菜が……真心込めて育てたのに……。

野菜なんかを武器にするからだよ byナレちゃん

「さあ、これであんたの武器は無くなったで」

「いくら強くても武器が無ければどうしようもあるまい」

「黙れ……絶対に許さんぞ！ よくも俺が真心込めて育てた野菜を斬ってくれたなあ！」

いや、龍牙が野菜で戦うから…… byナレちゃん

「この世界における全ての野菜よ。俺に力を貸してくれ！」

斬られた人参と大根を上に掲げる。

俺の身体が光り輝く。

この世界の野菜たちがこの俺に力を貸してくれた。

「な、何やそれは……」

「何が起こったというのだ……」

俺の姿は額に人参の飾りが着き、取って付けたように野菜の紋章が着いていた。

この姿こそ神埼龍牙 ベジタブル 野菜フォームだ

この姿なら野菜を使って戦える。

訳が分からないよb yナレちゃん

「来い、人参・大根ソード」

両手の紋章が輝くと、人参ソードと大根ソードが現れた。

俺はそれを持つ。

見た目からして普通の人参と大根じゃんb yナレちゃん

「さっきのようにはいかないぜ?」

「なら、それを見せてもらわないかな」

「そんなもの、また斬り飛ばしてやる」

「さっきのようにはいかないと言ってるだろ?」

俺は二人に向かって行く。

人参ソードと大根ソードを振るう。

二人は薙刀と大斧を振るった。

甲高い金属音が鳴り、薙刀と大斧は弾き飛ばされた。

『な!?!?』

ふっふっふ……これが野菜の真の力だ。

いや、それはおかしいbynaレちゃん

「さあ、さつさと武器を取れよ。勝負は始まったばかりだ」

俺は人参ソードと大根ソードを食べた。

うむ、うまい。

それ、食べれるんだbynaレちゃん

野菜だしね

ベジタブルフォームから普通の状態へと戻る。

そろそろ真面目にやりますか。

俺は懐から腕全体と足全体を覆う鉄甲を取り出して装備する。

「さあ、真面目にやってやるよ」

「これから本気というわけやな……」

「ようやくか……」

俺は張遼に向かって走る。

跳躍して回転しながら右足で蹴る。

「んな！？」

張遼は薙刀の柄で防いだが、耐えきれずに吹っ飛ばされた。

「張遼！？」

「余所見してる暇があるのか？」

俺は華雄に向かって行くと、右足を振り上げる。

華雄はそれを防ぐために大斧を構えるが……。

俺は膝まで振り上げた体勢で動きを止めた。

「ぬ？」

一瞬戸惑い隙が生まれた。

俺は右足を捻って横にしながら腹を蹴る。

「ぐあっ！」

華雄は蹴りをくらって吹っ飛ぶ。

俺は右腕で後ろから振られた何かを掴んだ。

それを引っ張りながら上へと上げる。

掴んだものは薙刀。

それを振るったのは張遼だ。

引つ張られ体勢を崩した張遼の腹に左の肘打ちを放つ。

「くうっ！」

すぐさま雑刀を持つ手を右から左に持ち替えて、右の掌底を水月に打ち込んだ。

張遼はその一撃を受け、吹っ飛んだ。

「もう終わりか？」

俺が言うと二人は立ち上がった。

「まだまだや！」

「貴様は必ず倒す！」

二人は俺の左右に回り込む。

張遼が右に、華雄は左だ。

そして同時に俺に向かって来た。

雑刀と大斧が振られる。

俺は左と右の拳を突き出した。

『!?!』

二人は動きを止める。

そうしなければ二人は死んでいただろう。

俺の拳の鉄甲から爪の形をした刃が飛び出していたからだ。

「さあ、どうする?」

俺が右足で地面を踏み付けると、肘、腕の横、足先、踵など鉄甲に覆われた部分から刃が飛び出した。

「仕込み武器やったんかいな……」

「俺は普通の武器を使うより特殊な武器を使う方が好きでね……さてと……質問タイムだ」

俺は指を鳴らす。

さっきまで戦っていた龍牙団達の動きが止まる。

といっても、もう相手の戦力は壊滅状態だが……。

「質問やと?」

「そうだ……単刀直入に聞こう……董卓は暴君か?」

「そんな訳あらへん! 董卓は洛陽の民の事を常に思っとる……良
い主や」

「貴様らが勝手に董卓様を暴君に仕立て上げたのだ！」

「そうか……張遼と華雄がそう言うなら董卓は暴君じゃないんだろ
うな……俺は袁紹が言うように董卓が洛陽で悪政をしているのか聞
きたかっただけだし……よし、お前たちに手を貸そう」

「何やと？」

「それが信じられるとでも思っているのか！」

「なら、信じられるようにするだけだ。とりあえず力は証明できて
いるな……作者よ、今死んでいる張遼と華雄の兵士を生き返らせる」

俺がそう言つと、兵士たちの身体が治り、次々立ち上がる。

皆、生き返ったことに戸惑っている。

「あんた、妖術師か何かか？」

「この世界は小説でできているんだから、何でもできるぜ？ おっ
と、お前たちに言つても分からないんだった」

「訳の分からんことを言うな……貴様は……」

「まあ、しょっちゅう言ってるな……さて、お前たちの兵士を蘇ら
せてやった。」

「せやな、どう手を貸してくれるか聞いとこか……」

「連合を壊滅させても良いが、そうすると裏切り者になっちまうからな。とりあえず董卓が殺されないようにしよう……こいつは頼みなんだが、お前たちはこのまま虎牢関に退却してくれないか？」

「何だと!？」

「悪いが、連合に雇われているからな。傭兵としてのプライドもあるから裏切りだけはしたくないんだ」

「退却したら董卓が殺されないように協力してくれるんやな？」

「ああ、絶対にな……」

「分かった、こちらは撤退するわ」

「おい張遼!？」

「華雄だって、龍牙に勝つのは無理やって分かるやろ……だったら、このまま無事に退却させてもらうのが良えわ……本当に董卓を殺されないようにしてくれるんやな？」

「勿論だ」

「そうか、なら信用するわ。嘘やったら許さへんからな」

「俺は嘘は嫌いだね」

「よっしゃ、撤退するぞ」

「いずれお前を倒してやるからな」

張遼と華雄は兵士を連れて？水関から退却した。

さて、後は旗を立てるだけだな。

俺は？水関の城壁に上がると、「龍」の字が書かれた旗を立てた。

「さあ、皆勝ち鬨を上げるおおおお！」

『俺たちの勝利だああああああ！ やったぜえええええええ！』

龍牙団の叫びが響く。

さてと……嘘をついた袁紹に罰を与えないとな。

変身、ベジタブルフォーム。

俺はベジタブルフォームになる。

「来い、ベジタブルバズーカと玉ねぎ弾」

手が光り輝きバズーカが現れた。

「さあ、涙地獄を楽しみな」

俺はバズーカで玉ねぎ弾を袁紹の陣地に向けて発射した。

そして、袁紹の陣地から爆発が起きた。

さて、後は皆が来るのを待つか。

俺は連合軍が来るのを待った。

その頃、袁紹の陣地では……。

突如何かが落ち、爆発が起きた。

「きゃあああ、な……何なんですの？ 目が痛いですわ」

「涙が止まらないですわ！」

「文ちゃん、目が痛いよー」

「あたいもだよ、斗詩」

袁紹と袁紹の将である文醜（薄緑の髪に頭に布を巻いている活発な印象がある女）に顔良（黒髪で大人しそうな印象のある女）そして、兵士たちは玉ねぎ弾により苦しんでいた。

ナレちゃんって武将の名前知ってるんだ？

ナレーションだしね byナレちゃん

そうだったね、はっはっは

「門は破壊したから、後は落とすだけ……簡単、簡単」(後書き)

龍牙「これで俺の人気も上がる筈だ」

ナレちゃん「そうだね」

作者「それは無いと思うんだが……」

龍牙&ナレ「次回も楽しみにしててね　　バイバーイ」

次回予告 「そうそう、作者って自動ドア開けるときに手を動かしながら魔法で開けました的な事してるんだって」

作者 「俺の黒歴史バラすなああああ！」

龍牙 「はっはっは……自分の作品の主人公でクロスオーバーしようとしてるのも秘密だ」

作者 「おおおおおい!？」

神崎龍牙の華麗なる計画のための前準備（前書き）

龍牙「やっぱり更新ペース遅いじゃねえかあああああああ！」

ナレちゃん「これは死罪物だね」

作者「待て！ 違うんだ！ 俺は読者を楽しませるためにお笑いとかを研究していたんだ。（決して時間的に書くのに余裕がありすぎて逆に書く気が無くなっていたということは言えない。ネタを練っていたのは本当だが）」

龍牙&ナレ「なんか変な心理描写があるけど？」

作者「やめてー、許してー」

龍牙&ナレ「だが断る！」

作者「何……だと!？」

龍牙&ナレ「それじゃあおしおき行ってみようか」

作者「え?……何で二人の後ろにガチムチな上半身裸でレスリングパンツ穿いている人が居るんですか!？」

ガチムチ「やらないか？」

作者「嫌でございますうううう」

作者は逃げだした。

ガチムチ「逃がさないぜ」

しかし、回り込まれた。

作者「アッー」

大変お見苦しいのでカット。

龍牙&ナレ「それじゃあ久々に本編始まるよー」

作者「（肉体と精神的にショックが大きすぎて廃人状態）」

神崎龍牙の華麗なる計画のための前準備

神崎龍牙は今、？水関の城壁の上に居た。

そして何をやっているのかと言つと……。

「はあー……やっぱりティガ○ツク○五体討伐クエストは無理があるな……」

神崎龍牙は？水関の城壁の上で座って、ポテトチップス（うすしお味）を食べながらPSPをやっていた。

ソフトはモ〇八〇3だ。ちなみにティガ〇ツク〇五体討伐クエストと言ふ物は実際には無い。

「プレイヤー能力改造しても大して面白くなかったから、クエスト改造したのになあ……前にネットとかでこっそり秘密クエストで流したら大批判くらったしな。」

当然である。普通にやってるプレイヤーからすればもはや無理ゲーの領域になってしまつてあろう。

神崎龍牙は違法改造をしてゲームをするやつのようにだ。

それにしても改造クエストを流したのに何故捕まっていないのだろうか？

「今度リ〇レ〇ウ〇十体討伐クエ作つて流すか……俺はやらんけど。強制的に俺以外の全国のプレイヤーにやらそう。やらなければ全データ削除というシステムで」

神崎龍牙は懲りない性質を持っているようだ。しかもかなり悪質な手口である。

何故捕まらない！？　そして一応言つとくが此処は異世界である。

果たしてそんなことが出来るのだろうか？　普通は無理なのだが……。

ちなみに関係ないことではあるが、作者はモ〇八〇2をやつてイ〇ン〇ツクや〇バ〇ンガなど初期ボスに何回も惨敗したので結局〇ル

○ルの段階で止めてしまったとか。

どうやら合わなかったらしい。

またも関係ないことではあるが作者の弟はコー〇フ〇クを使ってプレイしている。

改造プレイと言うのが楽しい物とは到底思えないのだが本人は楽しんでいた。

ゲームと言うのは改造して楽しむ物ではなく、苦労して努力して腕を鍛えながら楽しむ物であり、改造プレイとかする奴は邪道だというのが作者の持論であるらしい。

話を戻そう。

「それにしてもあいつら遅いなー……なんかあったのか？」

神崎龍牙は最後のポテトチップスの一欠けらを食べた後、塩に塗れた指を舐めて、袋を捨てた。

いわゆるポイ捨てだ。

恋姫無双が異世界物ではなく、時間逆行物だったならこの神崎龍牙の投げたポテトチップスの袋により、ポテトチップスは昔からあった物となり、様々な学者を悩ませるものになったかもしれない。

異世界で良かった。

そして、神崎龍牙がやったことはポイ捨てである。

ゴミはポイ捨てせずゴミ箱に入れるものだと思う。

「やっぱり、ポテトチップスはうすしおだよな……コンソメものりしおとかも上手いけど」

作者もよくうすしおを食べているそうだ。 たまに他の味も食べるらしいが。

「読者（お前たち）は何味が好きだ？」

神崎龍牙の挨拶が始まった。

本編が始まるのだろう。

それでは私も又、姿を変えねばなるまい。

それでは、読者（皆さま）、本編楽しんでね

ナレちゃんまた、調子変えてるじゃん……まあいいや。

読者（お前たち）よ、ポテトチップスはうすしおだよな？ 他の味が好きな奴もいるかもしれないが……。

それにしても皆、遅いなあ……何かあったのか？

龍牙は覚えないの？ by ナレちゃん

うん、全然

そうなんだ、どうしてだろうね？ by ナレちゃん

俺は傍らに置いてあったコカコーラを飲み干した。

うむ、座ってゲームをやりながら、お菓子を食べつつ炭酸を飲む。

これが日本の文化だな。

何処が？byナレちゃん

さあ？

おっと、よつやく皆来たよつだ。

桃香や雪蓮に曹操など反董卓連合の皆が来ていた。

なぜか袁紹が来ていない。

「龍牙さん、凄いね。わずかの間に？水関を陥落しちゃうし……本
当に門を壊しちゃうなんて」

「おうよ、俺は有言実行する男だからな」

俺は微笑しながら言う。

「ところで袁紹は？」

俺が尋ねると……。

「そのことなんだけど、あなたが旗を掲げて勝ち関が聞こえたと思
ったら何・故・か袁紹の陣地が襲撃されたのよ。そのせいで皆襲撃
を警戒する羽目になったわ。どういうことかしら？」

曹操が答える。

そして、皆は俺を見る。

疑惑の眼差しである。

「ああ、どうやら一人生き残りが居たようなんだ。即始末したが最
後の抵抗に袁紹の陣地を襲撃しやがった。俺がもう少し早く気づい
ていれば……」

「色々言いたいことはあるけれど、とりあえず目を逸らしながら話すのは止めなさい。それと比喻じゃなくて顔に「俺がやった」って書いてあるのだけど」

何！？ 俺は嘘を吐けないということとは分かっていたが顔に出るなんて……。

ドンマイ b y ナレちゃん

「まあ、良いわ……私たちに被害は無かったし。麗羽もそろそろ来るでしょう。どんな言い訳をするのかしらね？」

そついうと曹操や幾人かの諸侯は去っていった。

「龍牙、大丈夫なの？」

「龍牙さん……」

俺が居ない間に同盟を組んだ雪蓮と桃香は不安そうに俺を見る。

「大丈夫だ。俺に良い考えがある」

そして開かれた軍議。

「龍牙さん、私の陣に襲撃がありましたか……何がありましたの？」

袁紹は俺に疑惑の視線で見つめる。

「俺がやったわ」

『!?!?』

皆、俺の自首に驚いている。

「一応、理由を聞いておきますわ」

袁紹は明らかに怒っていた。

「ムカついたからに決まってるじゃないか」

「何故、さも当然のような態度で眩しい笑顔をしつつ親指を立てていますの!?!?」

だって、本当なんだもん

本当に困ったさんだね bynaレちゃん

「ぶっっちゃけチャラだろ……俺一人で？水関陥落したし、手柄としては十分だろうが……」

「うっ……」

「小さいことに拘るなんて名家としても人間としても器が小さいな……やれやれ」

俺はため息を吐く。

龍牙には謝るといふ選択肢はないの？byナレちゃん

こんな奴に謝るぐらいなら死んだ方がましだ。

「まあ、いいですね。この件については不問にします。死人も出ていませんし……」

「そうか……じゃあな」

「ちょっと……何処に行くんですの!?!」

「自由を求めて旅に出る」
俺はとびきり良い笑顔を向け、親指を立てながら言う。

俺の背に桃香や雪蓮の声が掛ったが俺の自由を求める心が静止をすることを止めていた。

ぶっちゃけ逃げただけだね byナレちゃん

そうだけどね

俺は軍議からさっさと抜けた。

さて、董卓に会いに行くか……。

「はい、洛陽に到着」

『!?!?』

俺の目の前には薄紫髪の王族の衣装の少女と緑髪で三つ網の文官の服装で眼鏡を掛けた少女が居た。

俺は奥義?987 「ワープ」で洛陽に行った。

描写カットは小説の常識なんだ。

ぶっちゃけ手抜きだよね b y ナレちゃん

そうともいうかな。

目の前の少女 王族的な服装から間違いなく董卓だろう。その隣に居るのは賈？かな？ 暇すぎて前作読んじやったから間違いは無いと思う。

もう、この瞬間暴君とかの噂はどうでも良くなった。

嘘らしいしね。

そして、一言言えるのは……幼女最高うううううううううううう。

「問う、あなたが私のマスターか？」

俺は董卓に問いかける。

「え、えーっと……」

董卓は困っているようだ。

マジで可愛いです。お持ち帰りしたい。

駄目だ、こいつなんとかしないとb y ナレちゃん

「突然現れたけど、あんた何者よ？」

賈？が俺に問いかける。

「俺としたことが自己紹介を忘れるなんてすっかりしていたぜ。俺の名は神崎龍牙。天の御使いと呼ばれてる。反董卓連合に雇われてる傭兵でもあるけどな……それと玉座に座っているのが董卓で、そっちが賈？で良いのかな？」

「そんなあんたが何の用で来たのよ……それとどうやって此処まで来たの？ それに僕たちの名前を知っているなんて……」

「名前を知っているのは俺が天の御使いだからさ。どうやって来たかは秘密だが、此処に来たのは董卓……君を助けに来た」

「え？ 私をですか？」

董卓は首を傾げる。

「ああ、俺は袁紹が流した君が暴君だと言う噂を聞いてその真意を確かめるために反董卓連合に参加したんだ。実際噂は嘘だったようだし、だからこそ君を助ける。」

「あ……ありがとうございます」

「ああ、どういたしまして」

董卓の礼に俺は微笑で返す。

「どうやって僕たちを助けるっていうの？ それと僕はあんたを信じれないんだけど」

賈？は俺を疑っているようだ。急に信じられるのは難しいものがあるが……。

「詠ちゃん……」

「まあ、確かにそうだな……それじゃあ俺が考えてる君たちを助ける方法を言っとしよう」

「へえ、聞かせて貰おうじゃない」

「俺の考えはこうだ……」

俺は董卓を助けるための計画を話す。

「確かにそれなら月は助かるでしょうね……でも、あんたは死ぬわよ？」

「どうしてそこまでしてくれるんですか？」

俺は二人の問いに答える。

「それはな、董卓……君が可愛いと言うのもあるし嘘を吐いた袁紹が許せないと言うのもある……君には王を止めてもらわないといけないけどな」

「私は別に……」

「僕も月が助かるならそれでも良いけど……信用はまだできないわよ？」

「そう言われても簡単には証明はできない……だが無理やりにも俺はこの計画を実行する。絶対に裏切ったりはしない」

俺は賈？の顔に嘘偽りないと言う顔で向きあう

「……良いわ、半分だけ信じてあげる。」

ため息を吐きながら言う。

「そいつはありがたい。それじゃあな……また会おう」

俺は奥義？987「ワープ」で洛陽の城門に行つて、そこから走つて反董卓連合の陣へと戻った。

何で走つて帰るの？byナレちゃん

何となくだな

反董卓連合の陣地に着いた時には夜になっていた。

「はあ……はあ……はあ……はあ……フルマラソン以上距離が会ったぜ」

俺は相当疲労していた。自分の天幕に戻る。

「あつ、龍牙さん……軍議を抜け出してどこに行ってたんですか？」

桃香が俺に尋ねる。

「自由を求めて旅に出たのさ」

「あ……あはははは」

桃香は失笑した。

「とりあえず天幕で飯食うわ……腹減ったし」

実際問題腹減りまくってるんだよね……長い距離走るもんじゃねえ
や。

「は……はい」

桃香は俺の言葉に頷いた。

俺は自分の天幕に戻ると飯を食べた。

味は凄く美味しかった。生き返ったような気分だ。

「さあて、腹も膨れたし……後は何しようかな」

俺は雪蓮の陣に向かうことにした。

皆に挨拶しとかないとな……。

俺が雪蓮の陣に着くと目の前に見張りの兵士が居た。

「おーい」

俺はそいつの顔に見覚えがあつたので呼びかける。

呼びかけられた兵士はこちらを向いて驚く。

「龍牙様……久しぶりですね」

「おおつ、本当にな……」

俺と兵士は笑い合う。

「雪蓮たちは皆、居るか？」

「ええ、そちらの方でさっきまで食事を取っていました」

兵士は天幕を指差す。

「そうか、じゃあちよと行ってくる」

「はい」

俺は天幕へと向かった。

「よう、皆久しぶりだな」

『龍牙 (さん) (様) !』

天幕の中に入ると雪蓮・冥林・祭・穩・蓮華・思春・明命が居た。
どうやら会議中だったらしい。

「久しぶりだな……邪魔したか？」

「そんなこと無いわよ……あなたは私たちの仲間なんだから」

雪蓮が頬笑みながら言う。

「嬉しいこと言ってくれるな」

俺も笑う。

「ところで軍議抜け出して何処行ってたの？」

「自由を求めて旅に出た」

「その割には帰って来たのね……」

「まあな……次は虎牢関だし、また働かないとな」

「ねえねえ……？水関で何かしたの？」

雪蓮が興味深い目で問いかける

「ん？……どういう意味だ？」

「龍牙にしては敵將の張遼に華雄を倒していないじゃない……何かするつもりなのかと思って……」

「嫌、思ったより相手の逃げ足が速くてな……逃がしちゃった」

「龍牙ぐらい強かったら誰も逃げられないと思うんだけど……」

雪蓮の顔は俺を疑う顔になっていた。

「まあ、面白いことになると思う事だけは言っておくぜ」

「面白いこと？……まあ、楽しみにしておくわ」

「相変わらずのようだな、龍牙」

俺と雪蓮の会話が終わったところを見計らって冥林が口を開く。

「おう、俺は変わらねえよ。心はいつでも純粹だからな」

「そうか……」

冥林は笑う。

「話で聞いたが袁紹に逆らったそうじゃな」

祭が俺に問いかける。

「まあな、俺はあいつが嫌いだし……嫌いな奴の言うことなんて聞かないよ」

「本当にすごいのお……龍牙は」

何故か冷や汗を垂らしながら祭が言う。

「それほどでもねえよ」

「それにしても門を素手で破壊するなんて凄いですね」

穩が笑いながら言う。

「まあ、俺に出来ないことは無いからな」

「そうですね」

俺が微笑みで返すと穩はまた笑う。

「龍牙……」

蓮華が俺を呼ぶ。

「よっ、久しぶりだな……勝手に出て行って悪かった」

俺は軽く謝った。

「いえ、良いの……いつもどおりで安心したわ」

「それは良かった」

俺は蓮華の頭を撫でてやる。

蓮華は顔を赤くしていた。

「明命、猫とはどうなった？」

俺は明命に尋ねてみる。

「お陰さまでたくさんのお猫様と仲良くなれました。ありがとうございます」
「ざいます」

明命は笑顔で俺に報告する。

「そいつは良かった」

俺は次に思春の所に行く。

そして、俺と思春は互いの右手を叩き合わせる。

「袁術から独立するための準備は進んでるのか？」

俺は雪蓮に尋ねた。

「ええ、確実にね……」

「そうか……まあ、独立するときになったら俺も力を貸すぜ」

「楽しみにしてるわ」

俺はまたなと言って、自分の天幕に戻った。

そろそろ寝ようとしたら、俺の天幕に曹操と護衛に夏侯惇と夏侯淵が訪れた。

「これはこれは、曹操さん……何か用ですか？」

「あなた、私の物になりなさい」

曹操は俺を勧誘しに来たようだ

「理由を聞いても？」

「？水関を一人で陥落させたその武力……それが欲しいの」

「俺は取扱い注意の男だぜ？」

「面白いじゃない……使いこなしてあげるわ」

曹操は笑う。

「今は劉備に雇われてるからな……いずれそっちに行くぜ」

「楽しみにしてるわ」

そう言つと、曹操は去っていった。

俺は特製ベッドで寝ることにした。

それで寝るの？byナレちゃん

うん、そうだけど？

そ……そうなんだ……byナレちゃん

俺は特製ベッドで眠りに入った。

さて、次回も頑張らないとな

神崎龍牙の華麗なる計画のための前準備（後書き）

龍牙からのお知らせ

龍牙「作者がリレーとかやりたいとか言ってるよ」

作者「おま……何を勝手に」

龍牙「まあ、やってみろって」

作者「いや、お前が答えるつもりだろう」

龍牙「おう」

作者「おうじゃねえよ」

ナレ「今回は僕の調子が変わっていたね」

作者「まあね」

龍牙「作者も俺と同じぐらい自由だよな」

作者「お前と一緒にするなよ」

次回「世界最強VSチート最強」

龍牙「読者（お前たち）は凄いものを見る」

作者「まあ、確かに凄いことになりそうだが……」

「チート最強（神崎龍牙）VS世界最強（呂布）」

燃えつきろ！！熱戦・烈戦

龍牙「もう駄目だ、お終いだああああ……勝てるわけがないんだああああ」

ナレ「それは何の冗談だい？」

龍牙「いや、何となく某タイトルの映画でへたれてた王子のまねをしたくなってるね」

ナレ「あはははは……まあ、チート最強の龍牙と世界最強の呂布、どっちが勝つか楽しみにしてるよ」

龍牙「任せろ、俺は全力全壊で勝負するからな」

作者「止めてくれ……タイトルも何かおかしいぞ？」

龍牙&ナレ「本編スタート」

「チート最強（神崎龍牙）VS世界最強（呂布）」

燃えつきろ！！熱戦・烈戦

一日の終わりとともに訪れる夜も明け、また新しい一日の始まりの朝となる。

景色が明るくなった時、その場にふさわしくないものがあった。

それは……。

棺桶だった。

何故棺桶があるのだろう。誰か埋めるのを忘れてしまったのだろうか？

いや、そんなわけがない。

はたしてこの棺桶は何なのだろう。

すると棺桶が動き出し、そして……。

蓋が開いた。

中から出てきたのは……。

「ああー、良く寝た。今日も一日頑張りますか」
神崎龍牙だった。

そう、ここは神崎龍牙と龍牙団の天幕だった。

何故、彼は棺桶で寝ていたのだろうか？

あい！」

そう、龍牙の陣だけしか無かった。反董卓連合の諸侯は居なかった
のである。

当然劉備も孫策も曹操の陣も無かった。

さて、そろそろ龍牙に出番を変わるとしよう。

ふ……ふふ……ふふふふふ……ふふ……ふふ……。

え？ 何？ 何なの？ どつきり？ 皆俺を驚かせようとしてるの？
どういふことなの？ いじめか？

ありのまま、今起こったことを読者（お前たち）に話すぜ！

俺は安眠ベットで寝て、起きて、いつもどおり顔を洗って、朝飯を食っていた。

そして気づいたら龍牙団の皆以外、誰も居なかった。

な……何を言ってるのか分からねーと思うが……俺もどうなってるか分からない。

実は夢オチとかみんな幻だったとかそんなチャチなもんじゃあ断じて無い。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ。

とりあえず龍牙団に聞くか……。

俺はホイッスルを鳴らす。

すると龍牙団の全員が整列して集合した。

「よし、何故俺たち以外誰も居ないのか説明出来る奴は居ないか？」

元気よく目の前の奴が手を上げる

「はい、実は……」

そしてナレちゃん主体の回想場面と変化する。

ナレちゃん頼んだよ

はいはい、任せて

舞台は回想場面となる。

龍牙団の陣に桃香と愛紗と鈴々と星そして朱里と雛里の劉備軍全員が来た。

「あー、龍牙さんは居ますか？」

桃香は龍牙団の一人に尋ねる。

「ああ、団長ならまだ寝てますよ」

龍牙団の一人は天幕を指す。

「ありがとうございます」

桃香は礼を言うと皆で龍牙団の天幕に入る。

「龍牙さん、そろそろ起きて……」

そして、龍牙の天幕に入った一同が見たものは……。

「ぎゃあああああああ」

桃香は天幕の中にあつた棺桶を見て叫ぶ。

「ど……どつしよつ愛紗ちゃん……龍牙さんが……龍牙さんが……」

桃香は棺桶を見てかなり動揺している。

「落ち着いてください桃香様、しかし……これは……」

「お兄ちゃん……死んじゃったのか？」

愛紗も鈴々も少なからず動揺しているようだ。

「これも龍牙殿のいたずらではないか？」

星は冷静だった。

「はわわわわわ」

「あわわわわわ」

朱里と雛里は二人抱き合って震えている。

「と……とりあえず起こしてみましよう」

愛紗は棺桶を手の甲で叩く。

すると棺桶が激しく揺れ、蓋が開かれる。

途端に強烈な殺気が漂った。

『……』

愛紗と鈴々と星は桃香を守るため前に出て、武器を構える。

「オレノネムリヲサマタゲルノハダレダ？」

殺気を放っている龍牙が棺桶から浮かび上がる。

目は開いているのだが、白眼になっており、黒いオーラを纏っている。

「え……えっと……起こしてごめんなさい……あの、皆、虎牢関へ行くから準備して欲しいかな……」

「ナラヌ……オレハイマカラニドネニハイルノダ……アトテムカウトスル……オヤスミ」

「あ……えっと……お休みなさい？」

龍牙は頷くと棺桶の中に入り、蓋が閉じた。

皆呆然としている。

「あ……あはは……」

「とりあえず先に行ってしましましょう。桃香様」

「お兄ちゃん眠いようだし寝かせてあげるのだ」

「うむ、龍牙殿なら問題無かるう」

「はわわわわわ」

「あわわわわわ」

そう言っつて、龍牙の天幕から皆は出て行った。

雪蓮も龍牙の陣にやってきていたが、桃香から聞くと、まあ、龍牙だしねと笑った。

以上が回想場面である。

じゃあ、龍牙に交代

はいよ、ナレちゃん。

いやー、全然覚えて無いわ。やっぱり洛陽から此処までのマラソンで疲れてたか……。

二度寝って怖いね……つうか置いてかれちゃったあああああああああああああ！？

皆、酷いです。俺の扱って一体……。

俺はため息を吐く。

「それにしても何でもっと早く言わなかったんだ？」

俺は龍牙団の皆に問いかける。

「聞かれなかったし、面白そうだからに決まってるじゃないですか」

回想の場面を教えてくれた一人が右の親指を立てながら眩しい笑顔で言う。

「そうか……それもそうだな」

俺はその一人とピシガシグッグをした。

「それじゃあ、龍牙団出撃だあああああ！」

『おおおおおおおおお！』

そして、奥義？987 「ワープ」で虎牢関へと向かった。

虎牢関に着くと戦の真っ最中だった。

目の前で愛紗と鈴々と星と雪蓮が赤髪の短髪に長い二本の触覚のように見える前髪があり、首に赤い布を巻いた白黒の服装をした女と戦っていた。

その女は方天画戟を使って、四人相手に激戦している。

しかも愛紗たちが押されているのだ。

三国志で戟を使う武将つつたら呂布じゃん！

つつかこの世界の呂布も頭に台所にいる黒い宇宙生物の触角のような奴があるんだな……。

イメージで定着してんのか？

辺りを見まわして、張遼と華雄を見つけろ。

張遼は夏侯惇と戦っているが、華雄はどうやら逃走しているようだ。

負けてしまったのだろう。

「まあ、やりますか」

俺は円盤のような武器を取り出して、振る。
円盤から刃が飛び出す。

そして、呂布に向かって投げた。

俺はすぐさま呂布の元に向かう。

「！」

呂布は愛紗たちを倒そうと動こうとしていたが、殺気を感じたらしく戟を振った。

そして俺の投げた円盤を弾いた。

「やっぱり、弾くのな……まあ、それぐらいできないと最強って言えんしな」

『龍牙（お兄ちゃん）（殿）！』

「よう、お前ら酷いんじゃない？ 普通置いてくか？」

俺は後ろの四人に向かって振り返りながら言う。

「元はと言えばお前が「ああ、そつだな……悪かったよ……これからは気をつける」「

俺は愛紗の反論を防ぐと、前の呂布らしき女を見る。

「君が呂布か？」

「……（こくつ）」

呂布は少し沈黙して頷く。

「そつか……俺は神崎龍牙だ……よろしくな」

「……よろしく」

うーむ、口数が少ないんだな。

まあ……。

「ああ、だが……さよならだ」

「……?!」

呂布は俺の言葉に首を傾げたが、右に跳ぶ。

円盤が姿を現した。

そして、俺は呂布の首を刎ねなかった円盤を掴んだ。

「あら残念、失敗か……」

「……卑怯」

むっ、今の一言は結構心に来るな……。

「ああつ、そうだな……今は確かに卑怯だ。楽をしようとしたんだ。ごめんな？」

「……ん」

呂布は頷いた。

俺は円盤を懐にしまう。

「それじゃあ真面目にするか……呂布、お前は这个世界最強の設定なんだろうが俺は生憎とゲームで例えるなら全パラメータがMAXで無限なうえに特殊能力も無限で更に主人公補正がついているバグキャラだ。覚悟は良いか？」

「……（こくっ）……恋、負けない」

呂布は戟を構える。

「トース・オン」「取り（！）」

俺は呪文を叫ぶ。

すると両手に先が曲がった二本の棒が出現した。

左の棒の先はそのまま、右の棒は先をまっすぐにする。

左は剣に、右はハンドアックスになった。

どこぞのメダルの王が使った戦法だ。

ふっ、久々に「」を使うぜ。

やっぱりこれが使いやすいからな。

何で呪文を唱えたの？……某赤き弓兵の……byナレちゃん

作者が好きだし、俺も好きだ。見たいなあ、zeroを……。

「」に宝具名付けるとしたら「」（バランサー）（万能なるもの）
って付けるわ。

「」は武器でも宝具でも無いけどね byナレちゃん

「……奇術？」

呂布は俺の手から武器が現れたことに驚いているらしい。

いや、まあ、そんなもんかな？

「凄い……」

呂布は拍手をする。

あっ、どうもどうも。それじゃあ全力全壊でやるからな？

「……………」

俺たちは互いに武器を構える。

そして、走った。

呂布が俺の首を刎ねようと戟を振る。

俺は左の剣を振って、それを防いで右のハンドアックスを呂布を左肩から裂くために振り下ろす。

呂布はそれを後ろに跳んで避ける。

俺はそのまま踏みこんでハンドアックスで首を狙う。呂布はそれを防いで俺の腹を蹴る。

それをくらう前に俺は後ろに跳んで威力を無力化した。

呂布が戟を振り上げながら向かって来る。

俺は跳躍して身体を左に捻りながら左足で顔を狙って蹴りを繰り返す。

後ろ回し蹴りだ。

呂布は振り下ろす前に蹴りが炸裂するのを感じたのか戟で防いだ。

少し仰け反る。

俺は剣とハンドアックスを交差に構える。

呂布も戟を構える。

そしてお互い向かっていく。

呂布が戟で突きを放ち、俺が剣とハンドアックスを交差に振り下ろす。

武器同士が衝突して力比べとなった。

中々やるな。

「……………そつちこそ」

だが勝負に勝つのは俺だ……………いいな？

「（フルフル）……………勝つのは、恋」

互いが離れるため後ろに跳ぶ。

俺は後ろを見る。

「お前ら、良く見とけよ。最強同士の戦いをな。録画したっていいんだぜ」

愛紗たちは俺と呂布の戦いに見惚れていたようだ。

「なっ、余所見をするな！」

ん？……しまった！

振り向いた瞬間に呂布が向かってきていた。

俺は剣を振って戟を防ごうとしたが、俺の左腕は斬り飛ばされた。

ハンドアックスでなんとか戟を防ぎながら後ろに跳んで離れる。

ぐああああああああああああああああああ。

俺は無くした左腕を支えながら痛みのみあまり叫ぶ。

無くしたところから血が流れていた。

ぐああああああああああ。

『龍牙（お兄ちゃん）（殿）！』

皆が叫ぶ。

なんちゃって……。

俺は叫ぶのを止めた。

『はー！？』

ぶっちゃけ、俺、痛覚消せるし……血だって止めれるんだよね。

腕だって生やせるしな

俺は左手を生やす。

普通の手ではなく、某地獄教師の手である。

きょううううう……何かまずいから止めとこつ。

いや、ここは悪魔泣かせの男の腕が良いか？

止めるけどな。

腕が消えたわけじゃないし

俺は生やした腕をちぎって捨てた。

生やしたのに捨てちゃうんだ b y ナレちゃん

うん。

そして、呂布に向かって指を指して言う。

おい、呂布。お前が斬り飛ばしたのは俺のお気に入り腕だったんだぞ！

「……………ごめんなさい」

呂布は頭を下げて謝ってくれた。

素直で良い子だ。

まあ、くつつけれるし別に良いよ。

俺はそう言ってあげた。

じゃあ、何で怒ったの？って言うか腕にお気に入りもくそもあるの？byナレちゃん

なんでだろ？……………お気に入り腕ってどんなのだろうね？

俺は左腕を拾うとくつつけて、回したり、振ったりして感触を確かめる。

よし、完璧

愛紗たちをみると皆呆然となっていた。

「腕……くつついた……」

呂布も驚いている。

どうだ、凄いだろ？

「……びっくりした」

俺は落ちていた剣を蹴り上げて掴む。

そして構える。

さあ、行くぞ。

俺が構えながら言うと呂布も構えた。

そして走る。

俺は武器を振り下ろす。

「……斧じゃない」

入れ替えさせてもらったぜ。

俺は剣で戟を防いだ。

そして左手で持ったハンドアックスを振る。

「……早い」

俺は剣とハンドアックスで戟を防ぎ、呂布の身体を狙って斬り、突いていく。

呂布は俺の連撃を防いでいくが押されていく。

そして、なんとか突きを放つが、俺は避ける。

互いが離れる。

さあ、決着をつけるか。

「……（こくっ）」

俺は剣とハンドアックスを上に掲げる。

剣陣成作（円）（サークル）

剣とハンドアックスで円を描く。

剣とハンドアックスが光り輝いた。

俺は交差に構える。

呂布も俺を真っ二つにするために戟を振り上げる。

互いに走る。

そして、互いが振り下ろした。

互いが互いを通り過ぎて、止まる。

「……………弾かれた」

呂布は地面に刺さっている戟を見ながら呟く。

俺は振り下ろして戟を弾き、通り抜けざま交差状に斬った。

剣陣（円）は刻むことによって、相手の攻撃を無力化する力を付加させる陣だ。

ただし、一度きりだが……………。

「この勝負、俺の勝ちだな。」

俺は剣とハンドアックスを「」に戻して言う。

「ん……………恋の負け」

呂布は血を噴き出しながら倒れた。

胸には？の傷跡があった。

俺は倒れている呂布を担ぎあげる。

「隊長、此方に向かってきている敵が居ました。どうやら主要キャラのようなので気絶させて捕まえておきました」

龍牙団の一人が報告する。

「分かった、お前たちは虎牢関を陥落させる。呂布も倒れたし、楽なもんだろ」

龍牙団は虎牢関に向かって行った。

「やっぱり龍牙は強いわね……」

雪蓮が言う。

「さすが世界最強だな……それなりに楽しかったぜ」

「腕は大丈夫なのか？」

「お兄ちゃんの腕、生えたり、くっついたりしたのだ」

「龍牙殿は人間なのですかな？」

愛紗に鈴々ちゃんに星が言う。

「はっはっは……一応は人間さ。さて、虎牢関も陥落したし……俺はまだやることあるから行かせてもらっぜ」

言いながら、奥義？987「ワープ」を使った。

そして、着いたところは……うおっ、あぶねえ！

俺は目の前に迫って来た矢を弾いた。

『なっ！』

声が聞こえたが、それを無視して俺は懐からデザートイーグルを取り出すと矢を放ってきた奴を撃つ。

銃声が響き、弾丸が放たれて矢を放ってきた兵の頭部を貫いて破壊した。

兵士は倒れた。

俺は銃をしまう。

「お前、どうやって現れた……そして私を助けてくれたのか？」

俺の後ろにいた夏侯惇が言う。

「え？……ああ、そうだ……いずれ世話になりそうだしな」

俺はなんとなく言う。

「そうか………すまない」

夏候惇は頭を下げる。

いや、何か怖いぞ……身に覚えがまったくといいほどないんだが……。

「私からも礼を言う。お前が居なければ姉者に矢が刺さっていただろう……」

ああ、あれか……単に危ないから弾いただけなんだけどね。

「気にするな………ちょっとだけ張遼借りるからな？」

「むっ、少しだけだぞ……張遼を捕えてくるよう華林様に言われているのだ」

「分かった………すぐ済むからな」

俺は張遼に近づくと、肩を掴んで奥義？987「ワープ」を使った。

「なっ、ここは何処や？」

「ここは異空間みたいなもんだ。お前と話すことがあるしな」

「……っていつか、龍牙は何処から現れてどうやってここにうちを連れて来たんや？」

張遼は辺りを見まわしている。

「気にすんな……」

「そうかって……恋とねねがおるやん！」

俺は異空間に置いてあるベッドに呂布と帽子をかぶり薄緑髪を後ろで括って文官の服装をした少女を寝かせてあった。

呂布の傷は直してある。

「あの二人は戦ってから捕えてある。別に殺したりはしないから安心しろ」

「恋と戦ったんか……龍牙は勝ったんやな」

「ああ、俺は最強だしな」

「せやな……で？ 何の用なん？」

「ああ、こいつを渡そうと思ってな」

俺は宝石のついたペンダントを渡す。

「綺麗やな……これは？」

「これを着けていれば俺の行動が見れる。董卓を助ける約束をしただろ？」

「せやつたな……本当に董卓を助ける気なん？」

「勿論だ。俺は有言実行する男だからな」

「分かった……あなたの行動見させてもらうで……」

張遼はペンダントを首に着けた。

「確か……夏侯惇と一騎打ちしていたな。戻るぞ？」

「ええで」

そして、夏侯惇が居た場所に戻る。

「邪魔して悪かった……それじゃあな」

俺は又ワープを使った。

「なっ、貴様は！」

俺の前には華雄が居た。

ボロボロになっている。

敗走中だったようだ。

「まあ、ちよつと来いよ」

俺は異空間に連れ出す。

「どこだ、此処は？」

華雄も辺りを見まわして呂布と少女を見つける。

そして張遼のように俺は説明をする。

「むう、呂布に勝つとは……」

「ああっ、此処からなら俺の行動が見られるから……董卓を助ける約束をしたんだ。見てくれ、約束を守っているところをな」

「そうだな……」

俺は異空間から虎牢関に戻る。

戻れば戦は終わっていた。張遼は夏侯惇に捕えられたようだ。

俺は自分の陣に戻る。

「龍牙さん、呂布さんに勝つなんて凄いですね。びっくりしました。」

桃香が言う。

「はわわ……虎牢関も陥落させるなんて凄いです。」

「あわわ……凄すぎです」

朱里と雛里ちゃんも驚いていた。

「おう、俺は凄いやつだからな」

「ところで呂布はどうしたのですかな？ 抱え上げていましたが…

…」

星が言う。

「捕えてあるのさ……聞きたい話があるしな」

「そうですねか……」

「お兄ちゃん、本当格好良かったのだ」

「その強さは認めてやる」

鈴々ちゃんと愛紗が言う。

「おう、ありがとうよ……もっと褒めてくれると嬉しいぜ……な
んてな」

ちなみに呂布に勝ったことや虎牢関を陥落させた事で「人間じゃ
ねえ」「皆を陥落させる男」「鬼神」「強すぎワロタ」など
二つ名と言っているのか分からん二つ名が広まってるとか何とか…

…。

俺は自分の天幕に戻る。

「……死んでない？」

「恋殿！ ご無事でしたか！」

呂布は目を覚ました。自分の身体を見ると傷が無かった。

「？」

「恋殿？ どうしました？」

自分の側には帽子をかぶり薄緑髪を後ろで括って文官の服装をした少女　ねねが居た。

呂布は辺りを見まわす。

「よう、目を覚ましたようだな？」

「……あ」

そして、自分を倒した男が現れた。

俺は呂布の様子を見るために一度異空間から龍牙団の陣の牢屋にワ
ープさせた。

「お前は何者なのです！」

帽子をかぶり薄緑髪を後ろで括って文官の服装をした少女が叫ぶ。

「俺は神埼龍牙。天の御使いで反董卓連合に雇われている傭兵だ。
今は董卓を助けるために行動している。」

「……月を？」

「ああ、そつだ。張遼や華雄そして董卓本人にも確認を取つた」

「な………どうやったというのです」

「それは俺だからとしか言えないな………お前たちを助けたのは袁紹
に騙されてしまった負い目があるからだ。何か俺にしてほしいこと
は無いか？」

「………家族」

呂布が呟く。

「どうした？ 洛陽に家族で居るのか？」

「恋殿は洛陽にある屋敷に動物を飼っているのです」

帽子をかぶり薄緑髪を後ろで括って文官の服装をした少女が解説してくれた。

「分かった……助けてやる。」

呂布の顔が明るくなる。

「ん、恋は恋……こっちはちんきゅう……ねね」

「恋殿！？」

「龍牙、恋に勝った。……そして、家族助けてくれるって言った。それに月も……」

「むう、分かりました。ねねは陣宮……真名は音々音ですぞ」

二人は真名を預けてくれたようだ。

「分かった……恋、お前の家族助けてやるからな」

俺が言くと恋は頷いた。

「……お願い」

「ああつ、任せろ」

俺は呂布の頭を撫でてやる。

恋は気持ちよさそうに撫でられていた。

「むう、恋殿の頭を撫でるなです」

陣宮は怒っていた。

つつかこの子……幼女じゃああああああん

「ごめんよ、ねねちゃん。まあ二人とも華雄と一緒に休んでいきな」

「ちよ、気易く呼ぶなです……」

俺は華雄の居る異空間にワープさせた。

「団長……曹操様が来ました」

龍牙団の一人が言う。

「おう、分かった」

俺は天幕から出た。

「春蘭を助けてくれたようね……礼を言っわ」

「貴様が居て、助かった。」

「感謝しているぞ龍牙……」

曹操たち三人に礼を言われた。

成り行き上守っただけなのにこんなに感謝されるとは……悪い気はしないが……。

「ああっ、気にする必要は無い。いずれ世話になるだろうしな。まあ、その時にでも借りを返すなりなんなりしてくれ」

俺は頭を掻きながら言う。

「ええっ、とりあえず私たちの真名を預けるわ。華林よ」

「春蘭だ。宜しく頼む」

「私は秋蘭だ。お前が来るのを楽しみにしている」

「おう、俺には真名がないから龍牙がそれに当たる。まあ俺も華林たちの所に行く日が来るのを楽しみにするぜ」

「ええっ、私もよ……今回のあなたの戦果を聞いてますます欲しくなっただわ」

言っと華林たちは去っていた。

いやー、偶然って怖いわ。

めっちゃ好印象だったんだけど……。

まあ、悪いイメージ植え付けるよりは良いか。

そして、翌日……。

洛陽へと反董卓連合は進軍する。

俺は一言「ちょっとトイレ行って来る」と言っただけで陣から去った。

俺はワープで洛陽の中に入る。

城に入る前に井戸へと立ち寄る。

中に入って、玉璽を手に入れる。

拾ったのは何となくである。

次に恋の屋敷に向かうと一斉に寄って来た動物たちを恋とねねちゃんと華雄の居る異空間にワープさせる。

そして、洛陽の城にワープで入る。

さて、張遼にも様子見えるようにして……っと。

「あ……あなたは……」

「龍牙さん……」

「君を助けに来たよ、董卓……さあ、一旦非難するんだ」

俺は二人が何か言う前に異空間にワープさせる。

異空間の様子も見えるようにしてあるので、張遼にも皆の無事が分かっているはずだ。

俺は懐から黒くて長いマントと化け物のような異形の仮面を取り出して装備。

黒いグローブとブーツも装備する。

そして、玉座に座ると肘かけに腕を乗せて、足を組む。

さあ、始めよう。董卓救出　董卓を殺すなら俺と戦え。異世界だし、どうせなら俺は魔王でラスボスだぜ大作戦　をな。

説明しよう。董卓救出　董卓を殺すなら俺と戦え。異世界だし、どうせなら俺は魔王でラスボスだぜ　大作戦とは……皆が董卓の顔を知らない事を逆手に取って、俺が董卓になって連合軍と戦っちゃおうという作戦なのだ

また、変な作戦を…… byナレちゃん。

良いの、良いの……他のSSだと身代わりとかで回避してるのとか
読んだんだけど……俺がするんだし、誰もやらないようなことをや
らないとね そう、俺は神崎龍牙ではない。俺が董卓だ。ラスボ
スレベルだがな しかもラスボスはラスボスでも無理ゲー化する
ラスボスだ。

ただ、確実に董卓のイメージが凄いことになりそうだが、まあ良い
だろう。

反董卓連合オワタ（＾o＾）byナレちゃん

ふふふふふ、さあ、来い反董卓連合諸君……この魔王である董卓が
お相手をしよう。

世界の終末を連れてな……ふふふふふふふふふふ、はははは
はははははははははは。

ふーはははははははははははははははははははははははははははははは
ははははははははははははははは。

よし、魔王つぱい

なんと！ 今この瞬間に（とてもくだらない理由で）恋姫の世界に
魔王（ぶっちゃけいろんな人にとって大迷惑な存在）が降臨してし
まった。はたして恋姫たちは魔王（パラメータMAXで能力も豊富
つつか無限、更に主人公補正を良いことにやりたい放題。ラスボス
よりたちが悪いよコイツ）を倒せるのか。どうなる次回！！

ナレちゃん、変な字入れてない？

気のせいだよ、気のせい　byナレちゃん。

そうか、そうか、ふははははははははははははははははは

「チート最強（神崎龍牙）VS世界最強（呂布）」

燃えつきろ！！熱戦・烈戦

作者「お前、やりやがったな……」

龍牙「ふーははははははは、俺が董卓だあ！」

ナレ「うわあい、異世界らしくなってきた」

作者「こいつらは本当に世界の破壊者じゃないか？」

次回「恐怖！！ 魔王董卓の力」

龍牙「や・だ
」

「何と！ 数カ月ぶりに作者が作品を書き始めた。そして誕生する魔王 いった

龍牙「というわけでお久しぶり 読者（お前たち）、元気にして
た？ 俺は元気だよ」

ナレ 「本当に久しぶりだね」

作者「皆さん大変長らくお待たせしました。作者です」

龍牙「また、えらく更新スピードが遅れたな……しょうが無いとは
いえ」

作者「ああ、保育士目指して短期大学入ったのだが書類やら計画や
らで精神的に限界感じて資格諦めたからな。卒業はするがどいう
職で働くか迷い中だよ」

龍牙「まあ、とりあえず心機一転 小説を完遂させるというのは今
の目標だよな」

作者「自分を変えるきっかけにしようと思ってな」

ナレ「それじゃあ、本編を開始する前に注意があるよ」

作者「そんなのあったか？」

注意

この作品を読むときにはパソコン・携帯の画面が見える距離ギリギリまで離れ、離して 大声で「龍牙様、万歳×3」と言いながら読みましょう

作者「何でじゃあああああ!?」

龍牙&ナレ「それじゃあ、久しぶりに本編^{スタート}開始」

「何と！ 数カ月ぶりに作者が作品を書き始めた。そして誕生する魔王 いった
玉座に一人の男が座っていた。いや、人と呼ぶのは正確では無いの
かもしれない。

玉座に座りし、その者からは禍々しい気が発せられていた。黒で染
まりし姿に異形の仮面を着けている者は他の者が見れば人間には思
えないだろう。

そして、その男は 。

「もしもし、ケンちゃん。ああ、俺だよ俺。え？ オレオレ詐欺？
ちやうちやう龍牙だよ。そうそう久しぶり。今ね異世界に居る

んだ。 え？ 寝言？ 寝言じゃないよいつも突拍子もないこと言ってるけど本当だよ？ うん、そう。 何でも屋しばらく休業しようかと思ってるんだ。 二次元の世界と関わるの面白いからさ。 いやあ、こんな面白いことあるならもつと早くに二次元の世界と関わるんだったよ。 うん、そういうわけで……え？ もう帰って来なくて良い？ 分かった帰らない それじゃね。 アウフ・ヴィダーゼン（さようなら）」

携帯電話を使っていた さっきまでのナレーションが台無しである。

というより此処は三国志の並行世界であり、電気も何も無いのになぜ、使えるのだろうか？

五話である「呉の人たちにゴチになります 俺様大復活！そして呉の御使いに……」では携帯を持ってはいたが通話は出来ないとも言っている。

Q ねえ、何で通話出来るの？ みんなby読者の代弁者ナレちゃん

A そんなこと簡単だよ。 主人公補正

それは多分っていうか絶対違うよね byナレちゃん

細かいことは良いんだよ

さて、そろそろ真面目に魔王やりますか……まだ反董卓連合来てないしな。

俺は気を引き締めて、魔王を演じることにした。

そして、洛陽の門前で反董卓連合は今、洛陽に入ろうとしていた。

袁紹と袁術が我先に競って入ろうとしていたが……。

『反董卓連合の諸君よ。城まで皆で来ると良い』

突如謎の声が聞こえた。

皆、混乱して声の主を探したが見つからない。

「だ、誰何ですの!？」と袁紹が問いかけた。

『これはまた異な事を言う。？水関と虎牢関を守っていた我が英雄である華雄・張遼・そしてその中でも一番であった呂布を破り此処まで来たのだ。だとしたら残るは誰だ?』

「董卓……」

曹操が言う。

『そうだ。さあ、早く城まで来ると良い。待っているぞ』

声は突如止んだ。反董卓連合は全員で城を目指すことになった。

その声に従わなければいけないような気がしたからだ。

そして、洛陽の中に入った。

『!?!?』

そこにあつたのは平穩であつた。

洛陽にいる民は皆、平和に暮らしていた。

反董卓連合の諸侯たちは袁紹の手紙に書かれていた事と今の状況の違いに混乱するものがほとんどだった。

一部最初から袁紹の手紙のほうが嘘だと言うことを分かっていた者たちは混乱はしていなかったが……。

「ど……どういことですか……これは!？」

袁紹も混乱していた。董卓は十常侍による反乱の時に救援に駆け付け、此処に移り住むことにより帝を手中に収めたようなものだ。

自分は間に合わず、帝を救い更に地位を高めることが出来なかった。

帝を手中に収めた董卓は必ず暴走するということを袁紹は自分の固定観念から思っていた。気品高くない何処の馬の骨とも分からないものならそうすると。

だからこれ幸いと反董卓連合を組み、此処までやって来たのだ。

だが、何だこれは?……平穩そのものであるこの状況は?

辺りを見渡せば、反董卓連合の諸侯たちも混乱している。

このままではまずい。早くなんとかせねば。

「とにかく、城に行きますわよ。」

城に居るであろう董卓を倒せば何とかなるであろう事を思いながら城まで袁紹は城まで進んでいった。

城の中に入れば、そこは無人だった。

兵の一人も居ない。反董卓連合は董卓が居るであろう王室まで進み、そして部屋を開けた。

そこには玉座に座っている者が居た。

黒に染まりし衣装に異形の仮面を着けし者が其処に居た。

「ようこそ、反董卓連合の諸君。此処まで来た諸君たちは須らく英雄だ。

君たちを私と相對するに相応しい英雄として認めよう。そうでなければならぬのだから」

その者は声を発した。しかし男からは禍々しい何かを感じた。まるで居るだけで自分たちが死の淵に居るのではないかということをおぼろげに思わせるような何かを……。その者が声を発しただけで恐怖を感じた。下手なことは言わないほうがいいと皆が思った。

その者は気軽に声をかけたただけだというのに。

袁紹や袁術そして一部の諸侯は沈黙する。

「あなたが董卓ね？」

そんな中、曹操が問いかける。

「そうだ、全てを呑み込む霸王の器を持ちし英雄よ。改めて名乗ろう。」

私は此処、洛陽の主董卓。諸君ら反董卓連合が打倒すべき敵だよ」

男は答える。

「あ、あの……」

そして、次に劉備が問いかけた。

「何かな？ 人の幸せを願う麗しき女神の心を持った英雄よ……知りたい事を尋ねるが良い。私が答えられる限り何でも答えよう」

「あなたは洛陽の人を苦しめている暴君では無いんですね？」

劉備は自分が確認した洛陽の事を思い出しながら董卓である者に問う。

「ああ、そうだ。答えよう。私は洛陽の民を苦しめてなどいない。全ては反董卓連合の盟主である袁紹のでまかせだ。帝を利用などせぬし、する気もない。もちろん民もな。民あつての国だ。それを蔑ろにするようでは王とは言えない？」

「そうですね……ありがとうございます。そしてごめんなさい」

劉備は答えを聞くと満足し、謝る。

「気にする事では無い。誰にだって間違いはある。それに袁紹に連

合を組ませる隙を作ったのは此方だ。弱者は強者によって滅ぼされるもの。隙を見せれば尚更だ」

「へえ、分かっているようね。じゃああなたは何故私たちを呼んだの？」

孫策も問う。

「諸君らが私を倒すために此処まで来たのだ。我が英雄たちは負けてしまった。

ならば私と相對するに相應しいと認めるしかあるまい？ それにこの目で見ても、話をしたかった。分かったかな虎の魂を持つ英雄よ」

「十分にね」

「それでは始めるとしようか。諸君らは私を打倒しに来たのだ。ならば戦い（これ）は必然。気にすることはない人の幸せを願う麗しき女神の心を持った英雄よ。私たちは戦う（こうする）しかないのだから」

董卓は玉座から立ち上がった。

「抜剣 概括？暗的？（闇を統べる剣）」

董卓の右手には黒に染まりし剣が現れた。

「？暗在？里？生（闇はここに誕生する）……諸君らと戦うのには手狭だ。ゆえに相應しき舞台を用意しよう」

そして男は謳い始める。

「我是???暗活人(我は闇に生きし者)」

董卓は謳う。自分が何者であるかを。

そして、反董卓連合は理解した。

「从?暗出生(闇に生まれ) 在?暗上染上(闇に染まり) ?暗
住(闇に住む)」

假如正是?暗我身姿(ならば闇こそ我が姿)」

董卓は人間ではないと。

「所以比起什?都也?求光(ゆえに何ものよりも光を求める)」

暗的?暗有救?的光(暗き闇に救済の光) ?暗有光(闇があつて光がある) 有光又有?暗(光があつて又、闇がある)

表里?和表面(表裏に陰と陽) 光和?暗是一同不?的?西(光と闇は共に不滅の物)

可^{しか}是 我?誓(私は誓う)

?暗?没????个光(闇はいずれ、光を呑み込む)

?暗?求着那个(闇はそれを求めているから)」

王室が黒く染まり出して行く。

「并且染上（そして、染まれ）」

そして、人ならざる者は宣言する。

「？成（構成） 黒染、闇全て包み呑み込む世界」

此処に闇の世界の創造が完了したことを。

途端、反董卓連合の諸侯たちは苦しさを感じた。

このまま、此処に居ては死に至るほどの苦しさだ。

「おっと、諸君らにはきつすぎたかな？ もう少し薄めるとしよう」

人ならざる者が言つと、皆苦しさから解放された。

しかし、袁紹と袁術そして一部の諸侯たちは倒れる。

『ひ、姫様！？』

顔良と文醜は倒れた袁紹に駆け寄り呼びかける。

「ふむ、この闇の世界は英雄や魔物以外には耐えられない世界だ。

袁紹や袁術一部の諸侯には英雄たる資格は無かったか……残念だ」

「お前、よくも姫様を」

文醜は叫んだ。

「安心しろ、死んでなどいない。すぐに闇を薄めた。気を失っているだけだろう。この闇がある限り気絶したままだが……」

「あなたは何なの？」

曹操が冷や汗を出しながら問いかける。

「私は闇に生まれし者だ。董卓とは私がこの世界に住むための仮の名。今こそ諸君ら英雄たちに真名を贈ろう。私の真名は黒闇（ダカ）。闇に生まれし王だ。さあ、英雄たちよ、私が諸君らを包み呑みこんでやろう。この闇こそ私の世界だ。平等に包み呑みこむゆえに逃がしはしない、逃げられはしない。さあ、かかってくるがよい。私が呑み込む英雄たちよ。この闇を晴らしたくば全てを見せる。私を打倒するが良い。英雄は魔王に挑むのが運命さためならば」

そして、黒闇の右手から剣が消える。

「まずは剣を使うに相応しいか見せてもらおう。さあ、かかってくるが良い」

そして、黒闇から敵意と殺意が放たれる。

その瞬間、闇の世界で倒れなかった英雄たちは皆、恐怖を覚えた。

あれに挑めば死ぬ。そんな考えが頭に浮かぶ。身体が震えだす。

しかし、倒さなければこの闇から抜け出す方法は無いだろう。
ならば倒さなければならぬ。全ての力を使い黒闇を倒す。

英雄たちは気を引き締めた。

そして……。

「うおおおお」

「はああああ」

文醜と顔良が動いた。黒闇へと向かう。

黒闇は構えない。ただ向かって来るのを待っていた。

そして、大剣は右斜めから切り裂き、大槌は左頬から破壊する筈だった。

甲高い金属音が鳴る。

『あ……あ』

二人は恐怖を覚えながらも黒闇に向かって一撃を繰り出した。

それで黒闇を倒せば全てが終わったのに……。

黒闇に当たりし大剣と大槌は黒闇に何ら傷つけることは無く、黒闇も動かず大剣と大槌に当たるがままだった。

黒闇は腕を組んでいた。

「さすがは英雄だ。少なくとも袁紹よりはな……だが恐怖を持ったままでは私は倒せない。殺意も薄れていた。もっと絞り全力でやれ……また挑戦するが良い」

そう言うと、文醜と顔良が吹っ飛んだ。

「うわ！」

「がは！」

黒闇はただ文醜と顔良を押したただけだ。

それだけで二人は吹っ飛ばされていった。

「さあ、まだまだかかって来い。私を楽しませてくれ」

そして、何かが黒闇に向かっていく。

「ほう」

それは矢だった。

矢は黒闇を貫かんと顔や首など急所に向かって行く。黒闇は動じず、受けるがまだ。

矢は黒闇に当たるが、貫くことはできず折れていく。

「もっと殺意を込めろよ。私を傷つけてみる」

黒闇は言う。

「ならば」

その声に答える者あり。

「これならどうだ!」

その声の主は黒闇に向かっていく。

そして、持っていた剣を振り下ろす。

「ふ……」

黒闇は右手を動かす。

甲高い金属音が鳴る。

「馬鹿な!?!」

黒闇は右手の人差指一本で受け止めていた。

剣を振り下ろしたのは夏候惇だ。

「そうだ……もっと殺意を絞ると良い」

そして、夏候惇を攻撃しようとした黒闇は拳を炸裂させるのを止め、何かを土佐に掴む。

その間に夏候惇はいったん下がった。

掴んだのは矢。放ったのは夏候淵だ。

黒闇はそれを確認すると矢を握りつぶした。

「良いぞ、どんどんかかって来い」

そのとき、鈴の音が鳴る。

黒闇はその音に振り向く。

そして、鉄球が顔へと炸裂する。

「ぬ？……」

黒闇は少し仰け反った。

鉄球を放ったのは許？だった。

仰け反った黒闇の数秒の隙を突いた何かがあった。

それは剣だった。

しかし剣は黒闇の首を斬り裂く前に黒闇によって掴まれていた。

「くっ……」

その剣を持っていたのは甘寧だ。

甘寧は剣に着いている鈴を指で弾いて鳴らす。

「むう……」

黒闇は一瞬強力な脱力感を覚えた。

だが、剣ごと甘寧の上に投げ、落ちてきた甘寧の無防備な腹部へと右拳を炸裂させた。

だが、炸裂させる瞬間に何か黒闇の後ろを狙う。

黒闇は右拳を甘寧に炸裂させ吹き飛ばすと同時に後ろから向かって来た何かを掴んでいた。

それは刃のついた円盤だった。典韋が放ったものだ。

そのまま後ろへと投げ返す。自分が投げた速度以上の円盤が典韋に迫る。

典韋はそれを避けようとして、腹部に何か炸裂した。

黒闇の右での蹴りだった。

典韋は吹っ飛ばされる。

「流琉！」

許？は鉄球を放つ。

「ふふ……」

黒闇は鉄球に向かって右の拳を放つ。

「うあ！」

許？は弾き返された鉄球を受けて、吹っ飛ばされた。

「ふふふ……」

黒闇の両肩に何かが食い込んでいた。

それは矢だった。

夏候淵と黄蓋が放ったものだ。

矢は碎け散る。

黒闇は二人に向かって行くが……。

首の後ろに何かが炸裂する。

「ふふふふ……」

「!？」

いつの間にか黒闇の後ろにいた周泰が首の後ろを狙い刀を振ったのだ。

しかし、黒闇は微動だにしていない。

左の肘で周泰を打つ。

「がはっ!？」

周泰は倒れた。

「猛虎蹴撃！」

声とともに何かに向かってきていた。

それは黒闇に炸裂し、爆発する。

爆発したのは気弾だった。

放ったのは楽進だ。

「はあああああ」

楽進はそのまま黒闇に、右の拳を黒闇の顔へと叩きつける。

左右からは李典と于禁のドリルらしき槍と双剣が襲いかかっている。

黒闇は楽進の拳をまともに受けて仰け反った。

「ふふふふふふふふふ」

黒闇は右の拳で楽進の腹部に炸裂させ、左から来る李典の槍を掴み、于禁の双剣は右腕で受け止めた。

これが素晴らしいことでは無かったら何と言っ。ああ、やはり私の目に狂いは無かった。

此処にいるのはまごうことなき英雄だ。

「ならば……」

そして黒闇は……。

「抜槍 接受??? 全部的? 暗的??? (全てを呑み込む闇の槍)」

黒闇の右手には黒く染まった槍が握られる。

「? 暗接受??? 全部 (闇は全てを呑み込む)」

ならばここからはこちらもそれなりに英雄に相応しき対応をしなければなるまい。

「さあ、英雄たちよ。もっと私を楽しませてくれ」

まだ胸から湧き出る喜びを感じながら黒闇は遂に武器を手を取った。

「何と！ 数カ月ぶりに作者が作品を書き始めた。そして誕生する魔王 いった

龍牙「ぶつちやけ疲れるわー」

ナレ「あともうちよつとだよ、頑張つて」

龍牙「おう、頑張る」

作者「お前はどこの作品パクってるんだ!？」

龍牙「いや、せつかくだから作者がはまってるゲームから」

作者「あのゲームは詠唱かつこいいけどな……なぜやったし……」

龍牙「ラスボスならそれなりにいかないかね……さあ、後編も頑張ろう」

作者「はあ……」

「真・恋姫十無双 魔王誕生後編」

黒闇が遂に武器を取ってしまった。黒闇の放っていた殺気は更に増していた。

しかも黒闇が持っているのはあの剣では無く、槍だ。

どうやらまだ本気を出していない。

素手で幾人も倒された。だが、それでもまだ何人かは立っている。

だったら行くしかあるまい。

こんなときに龍牙は何しているのだろうか……今は居ない龍牙を皆は求めている。

「蒲公英行くぞ！」

「うん、お姉さま」

馬超と馬岱が槍を持っている黒闇に挑む。

黒闇は槍を構える。

そして、黒く染まりし闇がさらに黒くなる。

それはさながら闇を纏ったようだった。

「さあ、次は此方も行くぞ」

黒闇は槍で突く。

すると、槍から闇が放たれた。

それは馬超と馬岱を呑みこもうとし、爆発した。

「何？……」

「ふむ、さすがは龍牙殿の技だ。十分役に立ちますな」

趙雲が槍を突いた姿勢で馬超と馬岱の後ろにいた。

「ほう……」

そして、隙だらけな闇蘭に向かって馬超と馬岱の槍が迫る。

「無駄だ」

黒闇は隙だらけな姿勢から瞬時に槍を振るい、二人の槍を弾いた。

馬超と馬岱は槍で突き、ときには振るってなんとか黒閻を倒そうとするが弾かれ反撃される。

しかも一撃がかなり重い。

このままでは……。

そして、黒閻が馬超の槍の突きを槍を回転させることで弾き、石突きで馬超の腹を突く。

「うぐ！」

馬超は倒れた。

「お姉様！」

「気が緩んだな」

黒閻はそのまま馬岱に向かって石突きで馬岱の首を打つ。

「あー！」

馬岱も倒れた。

「はあああ」

いつの間にか向かっていた公孫？が剣を振り下ろす。

黒闇は槍で弾いた。

公孫？の間隙だらけな腹部に石突きで突いた。

「がは！」

公孫？も倒れた。

「その心臓頂きますぞ」

趙雲が叫ぶ。槍を頭上で旋回させ、そのままの勢いで黒闇の右胸を狙い突きを放つ。

「ブラディースクライボルグ！」

その突きは旋回の威力を乗せ螺旋を描く最速の突きだった。

黒闇も突きを放つ。

二つの槍は拮抗し、そして趙雲の槍が黒闇の槍を弾いて胸に炸裂する。

「くくつ……」

しかし、槍は胸を貫けなかった。

螺旋状の傷跡を刻むに終わっていた。血は滲んでいる。

黒闇は趙雲の腹を蹴る。

「っあー！」

趙雲は吹っ飛ばされた。

「いくのだ!」

張飛が向かっていく。

そして蛇矛を振りおろす。

黒闇は槍で弾こうとした。

しかし、斬撃が曲がる。

蛇矛は龍牙の右胸の傷跡に線を刻んだ。

「龍牙お兄ちゃんに習った技なのだ。」

「は……」

「にゃ!?!」

黒闇は左手で張飛の首を掴むと持ちあげ、地面へと叩きつける。

「にゃ……あ……」

張飛は倒れた。

「行くぞおおおお！」

夏候惇が黒闇に向かっていく。

黒闇の槍が闇を纏う。

闇が放たれ夏候惇を呑みこもうとしたが、それは切り裂かれた。

「斬撃飛ばし……あいつの技は身に着けると役に立つな」

薙刀を振り下ろした姿勢で関羽が居た。

「はああああ」

夏候惇はそのまま剣を振り下ろし、黒闇の傷跡に斬撃を叩きこみ、傷を更に抉った。

黒闇の血が広がる。

「君で英雄の戦士は最後か……」

黒闇は関羽を見る。

「私は負けない」

そして、薙刀を構える。

黒闇の槍が闇を纏う。

そして、走る。

関羽も走った。

そして、薙刀で円を描く。

黒闇は突きを放った。

関羽も薙刀を振るう。

「!？」

黒闇の槍は弾かれた。

今、私から祝福を送ろう。

「抜剣　概括？暗的？（闇を統べる剣）」

黒闇の右手から槍は消えて黒に染まる剣が握られていた。

「那？我？暗？（さあ、我が闇よ）　正是？在接受？？全部（今こそ全てを呑み込むべし）」

黒闇が謳い地面に剣を突き刺すと、闇が動いた。

それは英雄たちを呑み込んでいく。

「さあ、諸君たちが誇る戦士はさらなる闇が呑み込んだ。それでも私に挑むかな？」

黒闇は四人の王に問いかける。

「当たり前よ。　私の霸道は此処で終わらない」

曹操が鎌を持つ。

「そうね、私も此処で終わる気は無い」

「私もまだ此処で終わりたいありません」

孫策と孫権が互いに一本の剣を持つ。

「皆が平和に暮らせる世界にするためにあなたを倒します」

劉備も剣を抜いた。

そして、武器が輝きだす。

「ならば……かかってくるが良い。私に諸君らの全てをぶつけろ」

そして、四人の王は走る。

『はああああああ！』

そして、曹操の鎌が、孫策と孫権の剣が、劉備の剣が黒闇を斬り裂いた。

黒闇の傷跡から光が生まれた。

「見事……。」

黒闇は咳く。

「闇が強くなれば光も強くなる……魔王とは英雄に倒される運命だ。さためだが、忘れるな光があるとこゝろ闇がある。ゆえに私は滅びはしない。又、再び現れる。ひとまずの別れだ。私が呑み込もうとして、呑み込めなかった英雄たちへ愛と憎悪と賛美を贈ろう。さらばだ、英雄

である諸君。又会うときを楽しみにしている。」

黒闇の身体が光に包まれ、その光は闇を覆った。

そして、世界は元に戻る。

黒闇は居なくなっていた。

皆は混乱していた。傷も何もかも消えていたからだ。

まるで夢を見ていたように思う。

英雄たちは自分の信じる道を進んでいこうと強く誓い、戦士たちは強くなるうと誓った。

は自由の表現という便利なものもあるからね
やりたい放題さ

後付け設定も主人公補正も全てが小説では

小説って本当最高だね

……。byナレちゃん

あれ？ ナレちゃん？

まあ、良いや。

俺は董卓たちを時空から引きずり出した。

「さあ、これで君は安全だ。ここから何処か遠くへ行っても良いし此処に住みたいなら民として暮らしても良い。自由だよ」

俺は笑顔で言う。

「あ、あの……大丈夫なんですか？」

董卓は心配している顔で言う。

「ん？ 全然大丈夫。俺って存在自体がいろんな人にとって反則だからね」

「まさかあんたがあんなでたらめだとは思わなかったわ……しかも死んで無いし」

「ん……龍牙は凄い」

「お前はもう人間じゃないな……」

「もう化け物なんじゃないですか？」

賈？や呂布や華雄にねねちゃんは口々に言う。

「よせやい、照れるぜ」

『褒めてないわ』

賈？に華雄にねねちゃんは言う。

「恋は褒めてる……」

「ありがとうな、恋……で、君はどうするんだ？」

俺は董卓に問いかける。

「私は……」

董卓は何か迷っているようだ。

「私はあなたに従います」

「ゆ……月!？」

「董卓様!？」

賈？と華雄は驚いていた。

「良いのかそれで？」

俺は董卓に問いかける。

「はい……龍牙さんのおかげで私や詠ちゃん、華雄さんに張遼さん、恋さんにねねちゃん……皆生きています。それに助けられたお礼がしたい……だから……」

「そうね……めちゃくちゃな奴でも命の恩人には変わりないわ」

「まあ、誓いも守ってくれたし、悪いやつでは無さそうだ」

「龍牙は恋との約束守ってくれた。だから良い人」

「そうですな……」

べつやら、皆決まったらしい。

「いいぜ、この時から君たちは俺の仲間だ。歓迎するぜ」

「はい、私の真名は月です」

「私は詠よ……」

「ちょっとした事情で私には真名が無い……すまないな」

華雄は頭を下げる。

「なら俺が着けてやるよ……烈華れっかってのはどうだ？」

「何……」

華雄は困惑しているようだ。

「烈火のごとき熱く気高い魂を持ちながら華の如く美しいという事から名づけたが……駄目か？」

「いや、分かった……今日から私の真名は烈華だ。真名を名づけてくれてありがとう」

「良いつて事だ……さて、後は……」

そして、反董卓連合の皆に紹介した方が後腐れなために芝居を打つことにした。

洛陽の城へと向かって行く。

そして王室に入ると……。

『龍牙!?!』

「お前いつたい今まで何処に……」

愛紗が俺に問いかけてきた。

ち、違う……これは俺の仕業じゃない。俺の指が勝手に……。

そして、俺は信じられないものを見た。

パソコンから何かが飛び出していた。

そして……。

「お前はやってはならないことをしてしまった。」

「まさかお前は……」

俺はパソコンの中へと引きずり込まれて、龍牙と一緒にフルボッコされたのだった。

そして俺と龍牙は全てを悟った。

『な……ナレちやあああああああああ……俺たちが何を

やったと言っただあああああああああ！？」

ああ、どこでこの小説の道を間違えてしまったのだろう。この小説は常に暴走してしまうだけに……だが、この状況で必ず生きて言わなければならない事がある。

俺は龍牙をなんとか盾に使いながらフルボッコの渦からなんとか脱……。「させねえよ……お前はここで死ぬんだ。」……くっ、龍牙が俺を引きづってくる。

「龍牙……俺は言わなければならない言葉があるんだ」

「そつだな、一緒に言うか……」

俺と龍牙は読者^{みんな}が見える方を向く。

しかし、身体はフルボッコの渦に呑み込まれていく。

俺と龍牙は右手の親指を立てながらなんとか言葉を話す。

『じ』か……………『じ』……………い……………に……………じ……………

俺と龍牙は薄れていく意識の中、最後に言っ。

『……………』

これでもう何も思い起すこと無く逝く事が出来る。

そして、俺たちは……。

「真・恋姫十無双 魔王誕生後編」(後書き)

ナレちゃん「さて、読者……今回の話に限って言いたいことはたくさんあるだろうからどんどんつつこんで良いよ。それじゃあ次回……バイバイ」

「とりあえず反董卓連合編は終わり

まだまだ物語は続くけどね

」(前書き

前話についてのお詫びとお知らせ

読者(皆)、前話のときはついついテンション上がってて変なこと
ばっかやって済まなかった。

作者と龍牙はこれから心機一転真面目にやっています。

前話のときは本当に済みませんでした。

……と言いつつ思ってたの
これから俺はどんどんめっちゃくちゃ
に生きてやるぜ。

刺激が一番だからな

注意事項

この小説は自由の表現を悪用しています。

何でもありになっていきますので読むときにはあまり深く考えずにお読みください。

まあ、要するにこまけえこたあいいんだよ

龍牙&ナレ&作者「それじゃあ、本編始まり始まり」

「とりあえず反董卓連合編は終わり

まだまだ物語は続くけどね

」

結局あその後、反董卓連合の諸侯たちは董卓（俺が演じた）を倒したことにより、朝廷から褒美を貰った。無論桃香もだ。何と平原の相から徐州の州牧に昇格したのだ。

出世街道まっしぐらである。さすが英雄

まあ、華林が裏でいろいろやったっばいけどね　まあ、今のところ恩恵に預かっつとして損は無いしな。ちなみに俺は皇帝の玉璽を持っている。

え？ さっさと雪蓮に原作どおりに渡せって？

何を言っているんだ？　拾ったものは俺の物、俺の物も俺の物だぞ

これを宝物にしてあとで秘密兵器にもするんだ

素晴らしいジャイ○ニズムである　byナレちゃん

そうそう俺の物といえば、　金髪面白ドリルな生きる騒音機で大迷惑なお　ば　さん

袁紹の事です。

そいつが貸した兵士と食糧返せと言って来たから……。

「龍牙真剣奥義」そんなことは忘れちまえ」

俺は袁紹の左右のこめかみを人差指で突いた。

「はう！」

袁紹は倒れた。

「麗羽様！！」

文醜と顔良は驚いて叫ぶ。

「心配するな、記憶を消しただけだ。そしてさっさと此処から去るんだ」

龍牙秘密奥義 e x 強制ワープ

これにより袁紹軍は自分たちの国に帰っていった。

借りパクやっちゃったね b y ナレちゃん

まあ、袁紹がいなくなっちゃたので反董卓連合は解散。

諸侯たちは皆帰っちゃった

曹操が帰る前に一応張遼にこっそり会いに行った。

「一応見ていたと思うが確かに董卓は助けたからな」

「おおきにな、しかし皆は龍牙のところに行ったんか……残念やな。うちも龍牙のところに行きたかったわ」

「まあまあ、いずれそっちにも行くからよ……それじゃあな」

「楽しみに待つとるで……うちは霞や」

「真名か……よろしくな霞」

俺と霞は握手をして別れた。

そして今、現在俺たちは……。

「えー、皆様このたびはどうもお疲れ様でしたー、今日はとことん飲み明かそうぜえ」

『いええええええい!!』

ただいま、桃香と雪蓮と白蓮も交えての大宴会中である。

俺が腕によりをかけて作った料理と自慢の酒を皆に与えました。

激しい戦だったしね さあ、飲むぞおおおお

月ちゃんと詠ちゃんたちは董卓にむりやり侍女にされた事にして、烈華はそれを守ろうとして城から抜け出し、途中俺が保護したことにした。

恋とねねちゃんについては恋の家族である動物を助ける事を条件に仲間になったということにしている。実際そうなんだけどね……。

まあ、この話をもろに信じた桃香や鈴々ちゃんは納得して、他は若干訝しんでいたのだが……俺が今回かなり活躍していて、金や食料を提供していることもあり特に俺に非難は無かった。結局なし崩しに納得していた。

で、雪蓮や白蓮を誘って大宴会だ。袁術ちゃんと張勳には悪いけど怪しまないように記憶を消した後、捏造してから自分の城にワープさせときました

白蓮を誘う時はこんな感じだった

「公孫？、宴会しようぜ宴会」

「はあ？ 宴会だと？」

「そうそう酒も料理も俺が出すからさ」

「まあ、特に急いで帰る理由もないし、兵たちを労う意味でも行ってもいいか」

「話が分かるね、それじゃあ俺の陣地で持つてるよ」

「ああ、それと私の真名は白蓮だ。お前の实力は凄かったし、桃香もいろいろと世話になってるようだから……預けるよ」

「分かった、宜しくな」

ちなみに雪蓮は……。

「宴会しようぜ、雪蓮」

「良いわね、それ」

即考即決だった。

皆、料理を食べ、酒を飲んでいる。

俺の料理や酒を初めて味わう月ちゃんたちは口々に「おいしい」、「うっ……うまいわね」、「おいしい……」、「むう……おいしいのです」

大絶賛だった。後はもう俺と龍牙団の訓練により鍛えられたダンスや歌唱や一芸などかなり盛り上がった。

星と祭や雪蓮は飲み比べ、冥林と穩と朱里ちゃんと雛里ちゃんは軍師なのでいろいろ語り合っていた。小声で「やっぱり呉の人たちは凄いね」、「そうだね」と言っていたのが聞こえたが何がとは言わないでおこう……そのままの君たちでいて。

桃香は酒乱だったらしく、やたら人に絡んでいる。今絡んでいるのは月ちゃんだ。

愛紗と鈴々ちゃんと詠ちゃんと烈華が抑えている。

恋は俺の料理を黙々食べて、ねねはそれをただじっと見ている。

そばで何やら愚痴っている白蓮がいる。「どうせ……私なんて……」
と呟いているが二人は全く聞いていない。見かねた星がなだめていた。

蓮華も酒乱で明命や思春に百合っぽく絡んでいる。

目の保養、目の保養……ふっつ。

賢者モードになってしまった。

俺は龍牙団と飲みながら様子を見ていたがちょっと宴会から抜けることにした。

俺は星を見ていた。

しかし、今回はさすがにきつかったな。ラスボスごっこがあんなにきついとは……。

「何してるの龍牙？」

ふと、声が聞こえたので振り返った。声をかけてきたのは雪蓮だった。

「別に、何となく星を眺めてただけだ」

「ふーん」

言いながら俺に近寄って来た。

「ねえ、本当に龍牙が助けたっていうあの子たちはただの侍女だったの？」

月ちゃんと詠ちゃんのことだろう。雪蓮は勘づいているようだ。

「おいおい、俺を疑うのか？俺は嘘をつかない主義なんだ。シヨツクだぜ」

「どうかしら……龍牙ってめちゃくちゃだから」

当たってるだけに何とも言えないや……。

的確だね、本当 byナレちゃん

「ひどい言いようだな……」

俺はため息を吐く。

「まあ、良いわ……ねえ、龍牙」

「うん？」

雪蓮は俺の眼をじっと見る。

「私ね……あれからずっと考えてたの……」

「何を……」

「私は……」

雪蓮は更に俺に近寄り、そして……。

「!?!?」

俺と雪蓮の口は重なり合った。

雪蓮……お前……。

俺は雪蓮を抱きしめると自分の舌を雪蓮の舌に絡める。

「ん!?!?……ふっ……ふう……ちゅっ……」

雪蓮は最初こそ驚いていたようだが自分からも舌を絡ませる。

「ふあっ……んんっ……ふう……あっ……ん」

俺と雪蓮はお互い息を吸いながらも舌を求め合う。

舌を絡めるうちお互い相手の唾液を啜っていく。

「じゅる……ん……ふ……は……龍牙……」

しばらくすると俺は雪蓮から舌を離した。

「雪蓮……」

雪蓮は顔を赤らめながら俺を見ている。

今の雪蓮はかなり魅力的だ。

「雪蓮、俺は……」

俺は何か言おうとしたが、「龍牙、私はあなたが好き」

雪蓮の言葉によって二の句を告げられなかった。

「たとえあなたとの子供が出来なくても良い……だって一緒にいるだけで私は幸せだもん」

「雪蓮……」

「ねえ、龍牙……あなたはどうなの？」

不安げに聞いてきた。

あー、くそ……。

俺は頭を掻きながら言う。

「ここまで情熱的な告白は初めてだ。男としての立場が無いな。ま
いったぜ」

「龍牙……」

「俺も好きだ、雪蓮」

俺はまた雪蓮を抱きしめて、今度は軽く口づけをする。

「こんなことならもっと早く告白すれば良かったな……」

「そうだったら、俺はもう呉ルート決定だったな」

「また、訳の分からない事を言っ……」

雪蓮は呆れながら笑う。

「俺はなんだかんだ言っ……強欲だからな……節操なしだ」

「でも無下にするつもりもないんでしょ……」

「勿論だ。俺は俺の愛する女、愛してくれる女には必ず応える」

「なら、良いわ……私もあなたを縛るつもりは無いしね」

「このまま思っ……存分求め合いたいが、場所が悪い。だから次に合った時は……」

「ええっ……待ってるわ」

そっ……と雪蓮は俺から離れ、宴会へと戻って行った。

「居るんだろ？……出て来いよ……星」

俺がそう言つと星が木の陰から出てきた。

「ばれていましたか……」

「俺から隠れようなんて百億年早い」

「むづ……しかし驚きましたぞ。まさか孫策殿と愛し合っていると
は……」

「まあな、あいつは勇気を出していたからな。俺もそれに応えた。

……拒むことは出来ねえよ」

「ふむ……それなら私も……」

星は近寄って来た。

「最初に言っておくが、俺は子供を作ることにはできない」

「な？……どつという意味ですか？」

「そのままの意味だ……種が無いんだよ」

「冗談では無いのですな……」

「冗談だったら良いんだがな。愛し合っても子供ができないってのはなかなかきついで……雪蓮はそれでも良いといってくれたが中々言える事でも無いだろう」

「……」

星は黙っている。

「からかい半分ならやめとけ。それに今はスイッチ入ったからな……発情してる。もう次は耐えられそうにない。獣みたいに襲っちまう」

「すみませんでした……私は……」

「ああっ、分かってる……酔ってたんだろ……もうそろそろお開きにするべきだな」

俺はそう言いながら星の耳元に口を近づける。

「雪蓮はかなり悩んでいた。星もよく考える……」

「はい……」

そして、星も宴会へ戻った。

久々にシリアス入っちゃったな……はあっ……。

俺も宴会へと戻り、お開きになった。

そして、翌日は若干二日酔いになってる人も居たのでワイプで皆、自分の国へと帰してあげた。

「とりあえず反董卓連合編は終わり

まだまだ物語は続くけどね

」(後書き

ナレちゃん「今日は赤飯炊かなきゃ

」

作者「いや、めでたいなあ……」

龍牙「ああ、ありがとうな。嬉しいぜ

」

次回「久々の番外編でござる」

龍牙「番外編ってなんだっけ？」

作者「え？」

番外編 龍牙の蜀ルートでござる。(前書き)

龍牙「おいおい、個別がめんどうだからって逃げに走ったな」

作者「個別でやったらネタが無くなるのに気づいたんだ」

ナレちゃん「このダメ作者め」

作者「ぐふっ……」

龍牙&ナレちゃん「じゃあ始まり、始まり」

番外編 龍牙の蜀ルートでござる。

この物語は龍牙が恋姫の蜀ルートでなどんな生活をしているかを描いた物語である。

〇〇月〇〇日〇曜日 天気 晴れ

「ねえ、詠ちゃん……何で皆天下取ろうとすんのかな？」

「な……何よ急に……」

俺は詠ちゃんに呟く。月ちゃんと詠ちゃんは龍牙団の仲間になった。俺は自由に暮らして良いと言ったが、月ちゃんは人のためになることがしたいらしく結局侍女のようになってしまった。詠ちゃんも月ちゃんの補助をしているが軍師でもあったので龍牙団の軍師も担ってもらった。

月ちゃんは買い物に行っているので、龍牙団の5人に護衛させている。

たまたま詠ちゃんに相談したい事があつたからだ。

「いやさあ、俺も天下取ろうと思つてさ……」

「あんななら取れるんじゃないの？ それこそ一人でも」

「そうなんだけどね……迷つてるんだよ」

「じれったいわね……何なのよ」

「さつき、朱里ちゃんと雛里ちゃんのところ遊びに行ったらね…
…誰も居なかつたんだ」

「桃香と街を周りに行くって言ってたわね……」

「でね……戻ろうとしたんだけど、あるものを見つけたんだ」

「あるもの？」

「そう、〇（ピー）と〇（ピー）が〇（ピー）で〇（ピー）する本
なんだよ！」

「な……な……」

詠ちゃんはあまりの事実に驚愕している。

「だから、俺は今迷っているんだ。このまま激情に任せて天下取っ
て801本を全部廃絶するかを……どうしよう……朱里ちゃんと雛
里ちゃんが腐ってしまう」

「で？……その本は？」

「とりあえず俺手製の百合本にすり替えておいた」

「余計悪いわ！」

俺は頭を叩かれた。中々良い拳だ。

ちなみにその後、なぜか詠ちゃんに俺手製の百合本を上げることになった。

なんで？

それと朱里ちゃんと雛里ちゃんがなにやら部屋でときおり「朱里お姉様」「雛里」と呼び合う声が聞こえたとかどうとか……良い兆候である。百合っていいよね

〇〇月〇日 曜日 天気 晴れ

今日は龍牙団の訓練日。

今日の訓練はc h O c h O t r a O nのあれだ。

「それじゃあ、行くぞお……せーの」

そして、あれが始まった。

「烈華、遅れているぞ」

烈華はまだ入って浅いから仕方ないが難しそうだ。

「す……すまない皆」

「あせらないで良い……頑張ろう烈華さん」

「烈華……頑張る」

龍牙団の皆は烈華を励まし合う。

龍牙団に入った以上団員は皆、家族だ。

支え合わなければならない。

良い兆候である。

そして三時間に及ぶ訓練は終了し、無事c h O c h O t r a O nは完成した。

烈華は訓練を始める事で今では実力をかなり伸ばしている。

でも、なんで強くなったかは謎である。

〇〇月〇日 曜日 天気 晴れ

「よし、行くぞセキト」

「はい、ご主人様」

俺はfrisbeeを投げるとセキトはそれを追い、跳躍して加えるとまた戻ってくる。

「よし、よし」

俺は頭を撫でてやる。

「へへっ……」

セキトは嬉しそうに尻尾を振っていた。

「次は恋……」

「はい、恋様」

恋はfrisbeeを投げる。

セキトはかなり優秀な犬でちょっとしつけると何でも覚えた。

今では人間の言葉ですら話せてしまう。

他にも猫五郎や鳥やんなど恋の動物たちにもいろいろ教えているのだが、皆少しだけで、すらすら話せるのはセキトだけである。

皆の前で披露したらかなり驚いていた。

っていうか……ノリで教えたのに何で話せるの？ やだ怖い……。

〇〇月 日 曜日 天気 晴れ

突如町に怪人が現れた。

その者は虎の顔を胸に持ち、顔も異形な怪人だった。

彼はトラゴン。人間どもに虐げられた虎の集合体により誕生した怪人だ。

「はーはっはっは、人間どもめ復讐してやるぞ」

町の人たちは恐れて、恐怖の叫びを上げる。

月も詠も捕まってしまった。

「待てい！」

「む、何者だ！」

トラゴンは声の方向を見る。

屋根の上に何者かが数人いた。

そして、跳躍して着地する。

「華蝶仮面推参！」 言わずとも分かるよね

「桃華蝶」 蝶の仮面を被った桃香

「鈴華蝶」 蝶の仮面を被った以下略

「愛……愛華蝶」 以下……。

「朱華蝶」「雛華蝶」「れ……烈華蝶」「恋華蝶」「音華蝶」

そして、仮面を被った美しき謎の美少女9人が現れた。

「人を襲つ悪しき虎の怨霊よ、今私たちが退治してくれる」

『義の心を持つ美しき花、9人そろって華蝶連隊華蝶レンジャー』

ここに華蝶レンジャーが誕生した。

「くっくっくっ……俺を倒そうなど甘いわ」

虎の口が開き、光が収束していく。

「行くぞ、皆！」

『おつ』

そして、華蝶レンジャーは自分たちの武器を合わせる。

するとバズカになった。

そして、バズカーに光が収束する。

「くらえ！ トラゴンファイアー！」

「華蝶バースト！」

互いに光を放ち、拮抗する。

そして……。

「な……何！？……ぐあああああああ！」

トラゴンの放った光は小さくなりやがて、華蝶バーストによって消滅した。

「哀れな虎の怨霊よ……安らかに眠れ」

華蝶仮面は呟く。

『我ら、人の呼ぶところ何処にでも現れる。華蝶連隊華蝶レンジャー！』

そして、民たちの歓声が上がった。

「さあ、次は皆のお待ちかね握手会だよ」

今日のヒーローショーはよく盛り上がった。

初回にしては中々だ。

「皆、お疲れ」

俺は皆にジュースを配った。

「あー、楽しかった」

「面白かったのだ」

「なかなか恥ずかしいな……」

「ああっ……」

「はわ、恥ずかしかったよ。雛里ちゃん……」

「あわ、恥ずかしかったね。朱里ちゃん……」

「恋、楽しかった……」

「良かったですな、恋殿」

「私もしてみたいな……」

「ゆ……月!?!?」

皆、口々に今日のヒーローショーについて話し合っている。

「次はどういう設定で行くのですかな？」

「さあ、どうするかな……でも、良いもんだろ、じじいじいのもっ。」

「はい、皆も笑ってましたし」

「皆が楽しめるなら良いことなのだ」

「まあ、悪くは無かったが……」

「いつもは勘弁してほしいがな……」

「たまになら良いかもね。雛里ちゃん」

「たまにならね。朱里ちゃん」

「恋はいつでも良い……」

「恋殿がやるならねえもしますぞ」

「やっぱり私たちもやるうよ月ちゃん」

「ぼ……僕は別に……」

うんづん、今日も平和だなあ……。

番外編 龍牙の蜀ルートでござる。(後書き)

龍牙「んじゃ、次はそろそろ三作目の更新に入らねえとな」

作者「おう、そろそろ書くよ」

ナレちゃん「頑張れ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9016t/>

真・恋姫†無双～お喋りで愉快で刺激を求める何でも屋さん

2011年11月28日18時57分発行